白と黒のアリス

時鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白と黒のアリス

【Ｎコード】
Ｎ０８３７Ｄ

【作者名】
時鳥

【あらすじ】
アリスの世界観をモチーフにしたファンタジー。コミカルなライトノベル風味。色の消えた世界へ……ようこそ、アリス。他の誰でもない君がアリスだ。

白の夢　ようこそアリス（前書き）

＊注意＊
歪みの国のアリスの二次創作ではありません。
歪みの国のアリス、ディズニーのアリスとは関係ありません。
あくまで参考は原作のみです。

白の夢　ようこそアリス

ようこそアリス。僕らの世界へ。
白兎を追ってこの世界へ来た時から君はアリス。
他の誰でもない。他の誰にも戻れない。他の誰にだってなれない。
だってそうだろう？
アリス、君がこの世界を変えたんだ。
アリス、君がこの世界を必要としたんだ。
アリス、君を……この世界が必要としたんだ。
だから、逃げられない。帰れない。戻れない。

アリス、君はこの世界で見つけなくちゃならない。
白兎を追いかけて。
白と黒だけに染まったこの世界を元に戻す方法を。

アリス、君が来た日に世界は色を失った。
いや、君達がきたあの日に……。

一の夢　白のアリス（前書き）

迷い込んだのは一人の少女。
彼女は……。

一の夢　白のアリス

迷い込んだのは一人の少女。
彼女は……。

閉じられた瞼の上から眩しいくらいの光を感じる。ゆっくりと目を開けても光の強さに目が眩んだ。
ここはどこ？
目頭を押さえ、差し込む光を抑えながら回復しつつある視力で辺りを……
！？
なに、これ？
思わず眩暈がした。生い茂った木々。そこまではいい。
あまりに現実離れしているのは――色。その一点のみ。
漫画の世界に迷い込んだような白と黒のモノトーン。
夢……そうよ、夢だわ。
色を持たない夢を見ることもあるんだと聞いたことがある。今まで経験したことはなかったけれど、これがきっとそうなんだわ。
「本当にそう思う？」
「うわきゃぁぁぁあああ！？」
声と同時に突如ひょっこりと白い顔が現れた！
いきなり目の前に！
思わず悲鳴を上げるほど驚いてしまったわけだけど……。
よく見ればそこまで驚く相手じゃなかった。
白いフード、というより白い雨がっぱを羽織った小さな子供。ただその雨がっぱには猫の耳と尻尾、まして全体にふさふさと毛が生えている。そして頭の部分には大きな瞳が並んでいて少々不気味だ。
子供の顔はフードに半分以上覆い隠されてまったく見えない。
「本当にそう思う？」

子供はもごもごと小さく口を動かしながらさっきの言葉を繰り返した。けれど声ははっきりと聞こえる。ただ、問われている意味がわからなかった。
「本当にそう思う？」
「何が？」
三度目の同じ問いに眉を顰めて問い返した。すると子供は黙ったまま二、三度尻尾をくゆらせた。フードが少し歪んだ気がしたけど気のせいだろうか？
「夢だって、本当にそう思う？」
「え？」
思わず反射的に声が漏れる。けど、夢なんだから不思議はないわよね。何を考えてたかわかることぐらい。
「駄目だよ、アリス。君は信じなくちゃならない。君が信じなくちゃこの世界は泡沫に帰す……」
「きゃっ！」
その子の言葉が終わらないうちに地面が大きく揺れた。そして視界に映っていた全てが消える。不愉快な浮遊感だけが残って……。
悲鳴を上げてるはずなのに風を切る音だけが頭に響く。
「アリス。このまま落ちていくの？」
さっきの子の声が聞こえる。風の音さえ切り裂くような澄んだ声が。
近くにいる？
ううん、どちらかというと直接頭の中に声をかけられたような不思議な感覚。
「アリス。このままずっと落ちていくの？」
「――――――っ！」
あたしは叫んだ。
でも、自分でさえ何ていったのか聞こえない。でも、落ち続けるのは嫌だった。浮遊感と一緒に恐怖が背中を駆け上がってきている。
「それならアリス。信じるんだ。地面はあるんだって。存在してる

んだって。信じて、アリス」
もう！　信じるってなんなのよ！？
半ばやけくそ気味に心の中で悪態を付くものの、それじゃあ、何も変わらない。結構落ちてるはずなのに真っ暗で底なんて見えないんだもの。
いいわよ、どうとなったって！
あたしは地面の上にいる。落ちてるなんてなんかの間違い！
目を閉じて強く念じた。それ以外考えないようにした。
すると足が硬いものに触れ、そして浮遊感も止まる。髪がぱさりと頬に触れた。
目を開けると元の場所に戻っていた。
あの白と黒だけが支配する森の中に。
そして、一際白いあの子供はあたしの正面に立っていた。
「ようこそ、アリス。世界は君が来るのを待ってたんだ」
「あのねぇ……さっきからアリス、アリスってあたしは物語の登場人物じゃないんだから。人違いよ」
手を差し伸べてくる相手に思わずため息交じりに言い返す。あたしはアリスなんて名前じゃないもの。
「人違いじゃないよ。君はアリスだ。白のアリス。君を待ってた」
「違うったら！　だいたいあたしの名前は……あれ？」
あたしは……誰だっけ？
名前、自分の名前がわからないってどういうこと？
色んな出来事は覚えてる。でも、出てくる名前の部分は空白。
思い出せない。あたしは、あたしなのに……。
「アリス。無駄だよ。ここで君はアリスなんだ。アリス以外の誰でもない。誰にもなれない。誰にも戻れない」
頭を抱えてるあたしを見ながら淡々と表情も変えず猫がっぱの子は言う。それが妙に怖かった。
「あたしは、あたしよ。アリスじゃないわ」
声は震えていた。全力で否定したかった。名前がわからないだけ

で記憶の中の自分が他人のように思えた。
「何も違うことなんてないよ。白兎を追ってこの世界へ来た時から君はアリス。君は白兎に導かれやってきた。この世界を元に戻すために。だから、アリス。他の誰でもない、君がアリスなんだよ。白のアリス」
白兎？　その一言にふっと、引っかかるものを感じた。最近見たような？　ううん、最近なんてもんじゃない。
そう、ついさっきよ。
学校帰りで確かマンホールに落ちそうになってたうさぎを助けようとして……。
「穴に落ちた」
あたしの思考と子供の声が被った。
「その穴はこの世界の入り口。アリス、その白兎を追って。まずは黒のアリスを見つけて」
「ちょ、ちょっと待ってよ！　アンタ、誰なの？　言ってること全然意味判んないわ。黒のアリスって誰？」
かなり頭は混乱してた。冷静に考えてれば夢ってことで全部片付けられたはずなのに。あたしは途中からコレが夢なんだってことを忘れていた。だから問いかけてしまった。
相手はやはり無表情で。
「僕はチェシャ猫。白のアリス、君のもう一つの道しるべ。でも、猫は気まぐれ。ずっとそばにいるとは限らない」
ザァァアアア
強い風の音がした。あたしが見てるその場所でチェシャ猫と名乗った子供は水に映った影のように揺れて、そうして何処からともなく消えていく。
風がおさまったときには、ただ森が静かに佇んでいた。

黒の夢　ようこそアリス

ようこそアリス。俺達の世界へ。
あんたは白兎によって導かれたその日からアリス。
どう足掻こうとアリス以外でなくなることなんざできない。
だってさ
アリス、あんたがこの世界を変えたんだ。
アリス、あんたがこの世界を必要としたんだ。
アリス、あんたを……この世界が必要としたんだ。
だから、逃げようなんて思うな。帰ることも戻ることも出来やしない。

アリス、あんたはこの世界で見つけなくちゃいけない。
白兎を追いかけて。
白と黒だけに染まったこの世界を元に戻す方法を。

アリス、あんたが来た日に世界から色は消えた。
いや、あんた達がきたあの日に……。

二の夢　黒のアリス（前書き）

迷い込んだもう一人の少女。
彼女も……。

二の夢　黒のアリス

「あー、暗いねぇ？　ウサギちゃん」
腕の中に抱えた小さな動物にワタシは語りかけた。温もりが小さく揺れる。
でも、本当にマンホールの中って暗いのね。
辺りを見回したってなーんにも……あれ？
ふと気が付いた。ワタシが座り込んでいる正面。そこに白に近い灰色の何かが光っていた。大きな何かの目みたい。白い中に黒い丸――眼球があるもの。
「アナタ、だーれ？」
声をかけたら目がぎょろりと動いた。こんなに目の大きい動物ってなにかしら？
「俺はチェシャ猫。アリス、あんたを導くもののひとつ」
予想外だった。鳴き声とか唸り声とかが返ってくるって思ってたから。ぎゅっとウサギを抱きしめる力が強くなる。
「アリス、怖がる必要なんてない。あんたに危害を加えるものは今はない。だからアリス。俺の話をよく聞いてくれ」
淡々とした声色。でも怖くはなかった。なんだか何処かで聞いたことのある声だったから。
「ねぇ、まって。チェシャ猫さん。ワタシはアリスじゃないわ」
「いや、あんたはアリスだ。あんたは白兎によって導かれたその日からアリス。黒のアリスなんだよ」
「ううん、ワタシはアリスじゃなくって……」
彼が何故、ワタシをアリスと呼ぶのか判らなかった。だから、ワタシの名前を教えようと思ったんだけど……
出てこない。
名前が喉から出てこない。ううん、名前自体がワタシわからなくなっちゃってる。ワタシ、落ちたときに頭でも打ったのかな？　自

分が誰だか判んなくなるなんて……。
「アリス。今はどう足掻こうとアリス以外でなくなることなんざできない。アリス、黒のアリス。もう一度いう。俺の話をよく聞いてくれ」
彼の言っていることの意味がよくわからなかった。けど、名前が思い出せない以上呼び方に不自由しちゃうわけだし、もう「アリス」って呼ばれることには突っ込まないことにした。
黙って一度だけこくりと頷く。こんな暗闇でワタシの行動が見えるかちょっと心配したけど要らない世話だったようだ。
「いいか？　アリス。あんたはまず、白兎を追って白のアリスを探すんだ」
「ねぇ、さっきから言ってる白兎って……この子のこと？」
抱えていたウサギを両手で持ち直し、チェシャ猫のほうに向ける。あの白い目が下へ動いた。ウサギの毛が逆立つのを感じた。
パンッ！
風船の割れるような音がして動物の温もりが手の中を飛び出す。あまりの音の大きさに耳の中がじーんと痛んだ。耳鳴りがわんわんと止まらない。
「きゃっ！」
耳を押さえてたら急に右の手首を掴まれて引っ張られた。転びそうになったけど何とか体勢を立て直す。
「アリス、走れ！　白兎を追うんだ」
チェシャ猫さんの声がした。耳鳴りは治まってないのにはっきりと頭の中に響いてくる。腕を引っ張られながら自然とワタシは走り出していた。
「アリス、白兎を見失わないように。しっかり前を見て」
声がそっと囁く。ワタシは言われるがまま前を見た。ウサギは白く……チェシャ猫さんの目と同じように淡く光っている。
これなら早々見失わないわ。
ほっ、と一息ついてからチェシャ猫さんのほうを振り返る。あの

大きな瞳と目が合った。
「アリス、白兎から目を離さないでくれ」
「う、うん。分かったわ。でも、さっきワタシに聞いてほしいっていってたことは白兎を追え、ってそれだけなの？」
彼の目が正面を向いた。ワタシも合わせて前を見る。耳鳴りもようやく治まり、駆ける足音が耳に響く。
「いいや、後いくつかある。でも、時間がない。走りながら聞いてくれ」
彼は言うと同時にワタシの手を離した。横で白い目がこちらを向く。そういえば、駆け足の音が一人分しか聞こえないような？
「話というより忠告だ。アリス、この世界は実に不安定で脆い。もしあんたがこの世界を否定するなら、夢だと思うなら……このまま暗闇を延々と走り続けることになるだろう」
ぞくりと背筋が冷たくなる。彼の言葉は非現実的。でも、ワタシにはとても現実的に聞こえた。下手したらこの暗闇から抜け出せなくなる。それはすごく怖かった。
「信じていれば大丈夫さ、アリス。この世界でやるべきことを終えるまでは疑わなければいい」
隣を振り向いてこっくりと頷くと目は少しだけ細められ……急に光がはじけ飛んだ！
視界が白一色に染まる。
眩しすぎて腕で光を遮りながら目を閉じた。それでも白は瞼の裏側まで侵食する。
けれど少しして光は急激に治まった。
おそるおそる目を開ける。白い雲、やや灰色掛かった白いに近い……空？　黒く鬱蒼と茂る森。
白と黒のみのコントラストは本当に不思議だった。
暫くぼんやりとたゆたう雲を眺めていたけど、それじゃただ無駄に時間が過ぎるだけだと気づく。
そういえばチェシャ猫さんの声がない。後ろを振り返った。

正面とほぼ同じ風景。
あれれ？
納得いかずぐるりと一回転。
ワタシは間違いなく森に囲まれた草原にいた。
抜けてきたはずの暗闇はどこ？
チェシャ猫さんはいったい？
ここはどこなの？
疑問符を並べたところで答えは出ない。
その時、チェシャ猫さんの声が聞こえた気がした。
――　白兎を追え。　――
そうだ！　あのウサギはどこへ行ったんだろ？
もう一度、探すように視界を３６０度回転させる。
いない……。
追わなきゃいけない目標を見失ってしまったみたいだ。どうしよう？　白兎を追って白のアリスを見つけなくちゃいけないのに。
眉を寄せて額に人差し指を当てながら首を捻る。良い案なにか浮かばないかしら？
すると視界の端に木々に隠れて動く白い影が飛び込んできた。
「あっ！」
急いで方向を変え、ワタシは全速力で白いものに駆け寄った。徐々にしっかりとその影の姿が形を成していく。
黒い長い髪が真上で一つに括られていた。白い洋風の人形が着るみたいなレースがちりばめられたワンピースを羽織り、肌は微かに紅葉してる。
ウサギではなく人間だった。
しかもその後ろ姿には見覚えがある。懐かしい感情が近づく度に込み上げてきた。
「お姉ちゃんっ！」
彼女が振り返るその瞬間、ワタシは相手に抱きついていた。彼女の凛々しい眉は寄せられて、鋭い黒い瞳は困惑に揺れている。口は

小さく開けられて、言葉は発せられない。そんな相手の表情にも懐かしさが胸をいっぱいにした。

三の夢　二人のアリス（前書き）

白と黒のアリスが出会い、そしてやっと始まる。
小さな物語が……。

三の夢　二人のアリス

「お姉ちゃんっ！」

後ろから聞き覚えのある声が飛んできた。振り返ると黒いものが走ってくる。短い髪が風に揺れ、頬は赤く染まり、顔は嬉しそうに笑みを浮かべて。

あたしは彼女を知っていた。

抱きついてくる相手を受け止めて名を呼ぼうとする。

また……空白。

彼女の名前があたしの名前と同様にぽっかりと消えていた。彼女があたしの妹だということは間違いない。けど、やはり名前だけが出てこないのだ。

妹とあたしは一つ違い。でも四月と三月生まれだから同じ学年だったりする。仲はもちろん良くて妹はしょっちゅうあたしの後を付いてくるのだ。

今日だって学校の帰り道を一緒に歩いてたのよ。それでウサギがマンホールに落ちそうになってるのを見つけて……。

「お姉ちゃん、どうかした？」

そこではっと気が付く。彼女は不思議そうに腕の中で首をかしげていた。

首を横に振り「なんでもない」と付け加える。妹はどこかほっとしたような笑みを浮かべた。

「よかった、お姉ちゃん。マンホールに落ちてからどうしたのかと思った。だって全然見つからないんだもの」

弾んだ声。肩は呼吸を助長するように上下している。あたしは彼女の頭をぐりぐりと撫でた。そこで違和感を感じる。

「アンタ、落ちた直後の記憶あるの？」

「うん、あるわ。ウサギを捕まえたはいいけど真っ暗でなーんにも見えなくてお姉ちゃんを呼んだけど返事はなくて……」

どんどんと声が小さくなっている。一人になってしまった時のことを思い出したのだろう。彼女はとても怖がりだ。
「でも、チェシャ猫さんに会ったのよ！」
すぐに戻った弾んだ声。でも、あたしはそれより出てきた名前が気になった。
チェシャ猫？
それはさっき、あたしが出会った白いカッパの子供。
この子もアレにあったというの？
「ねぇ、それって真っ白な服を着た子供よね？」
確認するように問う。でも予想外に彼女は首を捻った。そして言う。
「さあ？　暗い中でおっきな目だけが光っていたの。チェシャ猫って言ってたから大きな動物だと思ったけど人間だったのね？　見上げる程大きな猫なんていないかぁ」
はしゃぐように話す彼女。でも彼女の話すチェシャ猫の容姿はあたしが出会った子供のそれと違っていた。
きっと妹が目だと言ってるのはあのフードについた大きな飾り。でも、あの子供はあたしより……ううん、妹より全然小さかった。
別人？
でも、早々同じ名前の人間に関係ある二人が出会うかしら？
「でね、彼、ワタシのことをアリスって言うのよ」
ぴくり、と自分でもわかるくらい眉が跳ね上がった。
――　アリス……。　――
チェシャ猫の声が頭の中で反復される。
振り払うようにあたしは二、三度首を振った。
「不思議よね。あたしも言われたわ。あたし達はアリスなんかじゃないのに」
その言葉に俯いて視線を泳がせる妹。こんな時の彼女は何か言いたいのだ。でも、迷っている。
「何？　言いたいことでもあるの？」

誰かが促さないとずっと黙ったままになるのは経験済み。彼女は更に戸惑いを見せた後、ゆっくり口を開いた。
「お姉ちゃん、変なこと訊くけど……ワタシの名前覚えてる？」
ドクン――ッ
鼓動が大きく鳴った。あたしは今、一度も妹の名前を呼んでいない。判らないのが変に申し訳なくて誤魔化していた。でも、こう質問されたら答えるしかない。
あたしは遠慮がちに首を左右へ振った。
「やっぱり！　お姉ちゃん、ワタシもお姉ちゃんの名前忘れちゃったの。ううん、お姉ちゃんのだけじゃない。自分のも他の人も誰の名前も思い出せないの！」
一気に彼女は捲くし立てる。その瞳は好奇心に輝いていた。妹は昔から現実離れしたことが好きなのだ。あたしと違ってよく本の世界に憧れていた。
「お姉ちゃんもそうなんでしょう？」
「え、えぇ。そうね、信じられないけど」
弾んだ声で問われて戸惑いながらも頷き返す。そう、まったくその通りなのだ。考えてみたら誰の名前も思い出せない。父さん、母さん、学校の先生、友達……誰も。名前だけが空白の思い出は妙に気持ち悪かった。
「本当、信じられないくらい不思議。本の世界に来たみたいよ！　そうだ、お姉ちゃん！　お姉ちゃんはチェシャ猫さんに何て呼ばれたの？」
「あ、アリス。白のアリスって……」
好奇心に満ちた瞳と口調に押され、深く考えず反射的に答える。すると、彼女は数回瞬きしより大きく黒い瞳を見開いた。
「お姉ちゃんだったのね！？　チェシャ猫さんが言っていた白のアリスって。ワタシね、白兎を追って白のアリスを探すように言われたのよ！」
ぐっと拳を握り締め熱の入った様子で言う妹。その熱の篭り様に

あたしは半分以上彼女の話を聞き流していた。
――　アリス、白兎を追って。まずは黒のアリスを見つけて。
――
ぽんっと、脳内にあの声が思い出される。確かそんなことを言っていたっけ。
黒のアリス。
「あたしも……あたしも言われたわ。黒のアリスを探せ、って」
ぽつりと自分に向けて呟くように言った。そして気が付く。妹の表情がより一層輝いたことに。もしかして、もしかしなくても多分……。
「アンタ（ワタシ）が黒のアリス！」
綺麗にはもった声が虚空に吸い込まれて消えていく。暫く互いに何も話さなかった。でも、妹はにっこりと嬉しそうに笑っている。
「まぁ、いいわ。ところで、あんたこれからどうするの？　あたしは黒のアリスを探せ、としか言われてないわ」
「呼び方がなくて不便ならクロって呼んで、お姉ちゃん。ワタシも白のアリスを探した後のことは聞いてないの。ごめんなさい」
しょんぼりと妹――クロ（仕方がないので仮でそう呼ぶことにした。）は頭を下げる。謝る必要は無いんだけど……困ったわね。
腕を組んで黙ったまま考える。ふと視線を下げたら自分の足元が目に入った。小さな違和感。足元に散っている黒い葉っぱが動いている。
風もないのに？
ぞわりと肌が泡立った。そして気が付く。ざわざわと囁くような声に。クロの腕を掴み引き寄せて辺りを見回す。人影は無い。でも、囁きはどんどんと大きくなっていく。
――　アリスだ。アリスが揃った。
帰ってきたんだ、アリス達が。　――
――　色が、色が戻るぞ！　――
同じような囁きがそこかしこで聞こえる。でも、誰の姿も見えな

い。
ぎゅっと妹があたしの腕にしがみ付いた。
「アンタ達誰よ！！」
あたしは沸きあがる恐怖を抑え、叫ぶ。妹に格好悪いところは見せられないから体全体を駆け上ろうとする震えを必死に堪えた。ざわめきはぴたりと止まる。
暫くの沈黙。
その後に、またさっきよりも静かに囁きは戻ってきた。
――　アリスは私達のことを忘れているわ。
それは困った。　――
――　色が戻ればきっと思い出すさ！　――
ざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわざわ
聞き取れないくらいざわめきが大きくなる。背筋を一瞬にして何かが這い上がってきたような感覚に襲われた。木々が大きく揺れて葉が擦れ合う音。それが人の声のように聞こえているのだと気が付いたせいだ。
そして葉は一様に同じ言葉を繰り返す。
――　アリス、私達に触れて。
さあ、早く　――
――　アリス、色をちょうだい　――
「きゃぁぁぁあっ！」
直ぐ近くで耳を劈くような悲鳴が上がった。妹だ！
あたしの腕を掴む彼女の力が一層強くなったから間違いない。振り返れば妹の体中に木の根が巻きついていた。
「クロっ！！」
木の根を掴んで引っ張り妹から引き剥がす。もちろん怖かった。でも、妹をそのままにさせたくなかったし、何より妹を襲った木々に対しての怒りが先行していた。怒り任せに頭より体を動かす。木の根は案外あっさり剥がれたが直ぐまた巻きついてきた。
「おねえちゃぁぁんっ！」

「大丈夫！　すぐ助けてあげるわ！！」
妹は耐え切れずわんわん泣きながらあたしを呼ぶ。それに答え、慰めながらあたしは必死に戦った。でも、木の根は妹だけでなくあたしにまで巻きついてくる。段々身動きが取れなくなってきた。
このままじゃ――っ
「こらこら迷いの森の木々達よ。あんまり手荒なことはしちゃいけないよ？」
目を瞑って諦めかけた瞬間、よく通る声がこだました。
今度こそ、人間の声だ。しかも何処かで聞いたことがある……。
何処だったっけ？
思い出せない。
「アリスは怖がってるじゃないか。そんなことしてると色を戻してもらえないかもしれないよ？」
更にその声は話を続ける。すると木の根がゆっくり引いていった。体の自由を確かめ、直ぐに妹を引き寄せ抱きしめた。そして、声の主のほうを振り返る。
黒いシルクハットに同じく黒の燕尾服をぴっしり着こなしている男。帽子の横にちょこんとはみ出した灰色の長い獣の耳が妙に不釣合いだ。
口元に笑みを浮かべているが肌は灰色。黒と白と灰色のコントラストで古い写真を見ているようだった。
黒い森、灰色の空、モノクロの人間。あたしは自分の肌を見た。ちゃんと見慣れた色だ。あたし達二人以外に色は無い。彼等の色は何処へ行ってしまったのだろう？
「それにアリスはまだ、何も知らない。説明役が必要なのさ。僕みたいな」
木々のざわめきは既に止んでいた。燕尾服の男は言葉を続ける。その言い様はまるで歌っているようだった。
――　お前は誰だ？　何を知っている？
わかった、いかれ帽子屋だ！　――

――　そうだ！　その帽子は間違いないっ　――
木々がざらりと揺れて囁きあい、人間に近い声を作り出す。彼は笑った。
「正解。でも、よく見てよ？　この耳は何だろう？」
くるりと手にした黒い傘を回して楽しそうに喉を鳴らし帽子からはみ出た耳を指差す。
――　いかれ帽子屋の耳は人間の耳のはずだ。
じゃあ、いかれ帽子屋じゃないのか？　――
――　あの灰色の長い耳は三月ウサギよ　――
「それも正解」
満足そうに笑みを満面に広げ、小さく一度頷いた。彼はいかれ帽子屋で三月ウサギらしい。木々が一斉にざわつく。そんなはずはない。と言う意味のどれもこれも似たような言葉が繰り返された。
――　怪しいやつだ！
きっとアリスを狙う危険なやつだ！　――
一際大きな声が辺りの空気を震わせた。二重三重に沢山の人の声が重なっているように聞こえ、耳が痛くなる。そして、声は消えた。けれど葉の擦れ合う音自体が消えたわけじゃない。
ざわざわざわ、と、言葉にならない音が周りを支配する。
シュッと風の切るような音が耳の直ぐそばを掠めた。ぎこちなく振り返ればそこには太い根。さっ、と血の気が引いていくのがわかった。あと少しずれていたら……考えるのはよそう。
「まったく、困ったものだね。すぐに周りが見えなくなるのだから」
やや遠めにあったはずの声が直ぐ後ろで聞こえた。根が降ってきた方だ。いつの間にやらあのいかれ帽子屋三月ウサギがとても近くに居る。そして、傘で根を弾き飛ばしていた。それでも絶えず根は襲ってくる。いや、根はここら一帯に見境無く降り注いでいた。
それをあたし達の付近だけ全て彼がなぎ払っているのである。
状況をうまく頭が受け付けなくて暫く呆然と彼の背中を見てた。
「アリス、ぼんやりとしてたらいけないよ。そろそろ抜け出さない

と僕達全員、風穴だらけになってしまう」
彼が振り返らずに言う。その言葉は軽く、歌うような口調だった。緊迫感はゼロ。
でも、それが冗談でないことはすぐわかった。彼の足が少しずつ後ろにずれてきているからだ。後ろ足の付近にこんもり小さな山が出来ている。押されて、いるのだ。木に。
「わかったわ。けど……何をすればいいの？」
あたしは背中に問いかける。妹は腕の中で目を瞑って震えているのだ。あたしが何かやるしかない。
「僕に掴まってごらん」
彼は答えた。そして、片足を後退させ体半分ほどこちらに向ける。手が目の前にきた。白い手袋に覆われたその手をあたしは迷わず掴む。彼の口端がつりあがったように見えた。
彼はぐっと手を握り返してきて、一言。
「跳ぶよ？」
その言葉が終わるか終わらないかのうちに足が地面から離れていた。ぐいぐいと森の葉の塊の中に引っ張られていく。でも直ぐに抜けて灰色の空が見えた。頬を掠める風が気持ちいい。髪がたなびいてはたはたと音を立てた。
「アリス、もし恐怖はもう去ったなら下を見てごらん」
いかれ帽子屋三月ウサギが振り返り笑う。彼は、顎で地面のほうを指した。その言葉と仕草に誘われて視線を落とす。
「……すごい……」
ため息とともに言葉が出た。
今まで見たこと無いような光景。黒い鬱蒼とした森が真下にスペードの模様を描き、その周りを川が囲んでいる。その川は、どこか遠くへ一本だけずーっと伸びていた。森から旅立つようにずっとずっと。川の終わりはまったく見えない。
そのスペード型の森の他にあるのは草原と他の森。他の森の形はわからなかった。そこまであたしは高い場所にいない。でも、他の

森の周りにも川が流れているのは見えた。
「面白い形だろう？　この間女王様が模様替えをなさったばかりなのさ」
「えぇ、こんなのはじめて見たわ」
上から声が降ってくる。あたしは風景に見惚れて半分上の空で返事を返した。
「お姉ちゃん？」
腕の中であたしを呼ぶ声にはっとする。妹が目を瞑ったまま不安そうにしていた。未だに怖くて目が開けられないらしい。
「大丈夫よ、目を開けてみたらいいわ。すごいんだから」
自分の声はとても弾んでいた。頬が緩んでいるのもわかる。あたしの胸は大きく鼓動を鳴らしていた。
隣でごくり、と唾を飲む音が聞こえる。
「……すごい……」
あたしと同じ言葉がクロの口から漏れた。彼女を見やれば瞳が煌々と輝いている。どうやら彼女もこの景色を気に入ったようだ。
「アリス、景色は十分堪能したかい？」
いかれ帽子屋三月ウサギが問いかけてきた。あたしは迷わず大きく頷く。
「えぇ、すごく素敵だわ」
「じゃあ、落ちるよ？」
え？
思わず振り返って彼の顔を凝視する。柔和に微笑んだままの表情に不安になった。
落ちるってどういうこと？
訊こうとした瞬間、がくんっ！　と、彼の急上昇が止まった。
そして……。
「跳んだら落ちる。常識だよ？」
くすくすと楽しそうに目を細めて笑いながらも、いかれ帽子屋三月ウサギは落下していく。もちろんあたし達も一緒に。

落ちるスピードは徐々に加速し、地面は嘲笑うかのように迫ってくる。
あたしの隣から悲鳴が上がった。妹だ。
そりゃ、怖いわよね。どんな絶叫マシーンも顔負けの落下スピードだもの。
しかし、あたしはいたって落ち着いていた。チェシャ猫の時の落下の浮遊感の方が数倍怖かったからだ。だから、叫んでもいない。
「ちょっと！　もっとスピード落とせないの！？」
むしろあたしはいかれ帽子屋三月ウサギを睨み付け食って掛かる。
「う～ん、そいつがねぇ。いつもスピード調整に使ってるこいつが、困ったことにさっきの木々達のおかげでボロボロになってしまってるんだよ」
困った雰囲気は一切感じさせない口調で、彼は傘をくるりと回しながら言った。そういえば、あの傘で木の根を弾き飛ばしていたわ。
「ボロボロでも使えるんじゃないの？　ちょっと一回使ってみてよ。少しはマシになるかもしれないわ」
黒い傘はそんなにボロボロになってるように見えなかった。まぁ、いかれ帽子屋三月ウサギが間に挟まってよく見えないんだけど。
「別にいいけれど……あんまり変わらないと思うね」
言いつつ彼は片手で傘を開いた。黒い傘に穴がボコボコ開いている。本当にボロボロになっていたのだ。
「あー、ひどいな。気に入っていたのに」
傘を上に向け、残念そうに眉を寄せ彼は呟く。
でも、いったいこの傘をどうつかうのだろう？　まさか、差すだけなんてことはないわよね。そんなんじゃ、落下スピードを調整できる筈無いもの。
「ほらごらん、アリス。僕等を助けようとする風は穴から殆ど抜けていく」
「へ？」
思わず絶句する。

確かに風はひゅーひゅーと傘の穴から抜けてるけど……。
「アリス、そんな顔してても仕方ないよ。地面はすぐそこさ」
言われてはっ、と下を見る。もうすぐそこだった。手を伸ばせばきっと届く。そんな近さ。思わず目を瞑った。
ボスッ！
……あれ？
予想と反した音。ゴッ、とかグチャとか、そんな音がすると思ってた。何か柔らかいマットの上に落ちたような？
そういえば、体も全然痛くない。目を開けた。正面ににっこり笑ったいかれ帽子屋三月ウサギが立っていた。あたしの腕の中の妹は気を失っている。
「良かったね、アリス。優しい草の上に落ちて」
言われて下を見た。灰色の草が沢山折り重なって山になっている。その上にあたし達はいた。落ちていく瞬間に見た地面にはこんなもの無かったはずなのに。
「アリス達の為に集まってきたんだよ。さあ、立って」
手を差し出された。妹をそっとその場に寝かせて、その手を取り立ち上がる。
草の山の周りは黒い土が見えていた。さっきは満遍なく草が広がっていたはずなのに。
「不思議……」
「しまった！　もうこんな時間だ！！」
小さく呟いた時、隣のいかれ帽子屋三月ウサギが慌てた様に大きな声を出した。
「ど、どうかしたの？」
振り返り問う。彼は銀の懐中時計を片手に持って首の後ろを世話無く擦っていた。
「見てごらん、アリス。もう三時だよ！　お茶の時間だ。戻らなければ！」
銀の時計をあたしの真ん前に勢いよく突き出す。危うく、顔面に

当たりそうになった。
この人……そんなに三時のおやつが大事なのかしら？
あれ？
「でも待って、この時計」
「僕はもう行くよ！　もし良ければ僕のお茶会に寄ってくれ。アリス。準備をして待っているから」
彼はそそくさと時計をしまい、早口に捲くし立てた。あたしが何か言おうとしたことにも気づいてないようだ。そして、こちらの反応を待たず踵を返し駆けて行く。
時折飛び跳ねながら走っていく彼の背中はあっという間に見えなくなった。
取り残されたあたしは暫く呆然と虚空を眺めていた。
「……寄れったって何処でやるかなんて知らないのにどーしろっつーのよ？」
あたしが呟いた疑問もさらりと風が流していく。
なんか、すごく虚しい。
でも、いつまでもぼんやり突っ立てるわけにもいかない。あたしはまず足元の妹を見た。意識は戻っていないようだ。しゃがんで抱き起こし頬を軽く叩く。
「クロ、クロっ！」
「う、う〜〜ん……」
微かに唸りゆっくりと彼女は瞼を上げる。数回瞬きを繰り返して、自分の力で起き上がり首を傾げた。
「えっと……う〜ん」
「クロっ！　大丈夫？」
まだ意識がはっきりしてないんだろう。ぼんやりとしている妹の肩をしっかり掴んで揺さぶる。
「お、お姉ちゃん、だいじょぶ！　だいじょぶだから！」
「よかった……」
彼女の意識は、はっきり覚醒したようだ。安堵の息を吐く。手を

離して彼女の正面に座った。
「えっと……お姉ちゃん。帽子屋ウサギさんは何処に行ったの？」
キョロキョロと辺りを見回してクロは不思議そうに首を捻る。多分、彼女が言っているのはいかれ帽子屋三月ウサギのことだろう。
あたしは左右に軽く首を振った。
「どっか行っちゃったわ。動いてない時計を見て、ね。三時だからお茶会するとか言ってたわよ？」
そう、あたしに見せられたあの時計は動いてなかったのだ。秒針さえぴくりとも。教えてあげようと思ったけど、そんな暇なくいかれ帽子屋三月ウサギは去ってちゃったし。
「そうね、いかれ帽子屋に三月ウサギだもの。終わらないお茶会をするんだわ」
何故か妹は一人納得したように、うんうんと頷いた。彼女の言っていることが何のことかあたしにはさっぱり判らない。
「ま、いいわ。それよりこれからどうするの？」
「これから？」
立ち上がって何処か遠くを見やりあたしは言った。妹も釣られたように立ち上がる。そして困ったように眉を寄せていた。あたしも特に案があるわけじゃないのでそのまま黙る。
「……あっ！　お姉ちゃん、アレ見て！」
いきなり沈黙を破り妹が叫んだ。あたしの腕を引っ張っりながら、ある一箇所を指差している。
白い兎が一匹。
森に駆けていくのが見えた。妹がよりあたしの腕を引っ張る。
「お姉ちゃん、白兎よ！　追いかけなきゃ！！」
「え、えぇ、でも……」
ここで止めても無駄だった。はしゃいでる時の妹は周りが見えないのだ。あたしの腕を引き走り出そうとする。仕方ないから一緒に駆け出した。
白兎はもう森の茂みの中に消えている。

追いかけてあたし達はさっきとは別の森へ入っていった。

鳥の夢　おかえりアリス

おかえりアリス。
全てを知り尽くしている世界へ。
しかし、全てを忘れている世界へ。

君達は思い出すために戻ってきた。
君達は学ぶために戻ってきた。
君達は見つけるために戻ってきた。

アリス、白兎を追い、チェシャ猫を探せ。
そして見つけるのだ。
何を見つけるのか……そこまでは言えない。
だがしかし見つけなければならないのだ。

でなければ
全てに色は戻らない。
全てに託された記憶は消える。
全て……なにも残らない。

アリス、忘れてはいけない。
アリス、思い出すのだ。
アリス、知る勇気を持て。

さすれば自ずと道は開ける。

四の夢　ドードーと愉快な仲間達（前書き）

白兎を追いかけて森の中に入っていった二人。
そこで出会うのは……。

四の夢　ドードーと愉快な仲間達

果たしてどれ位歩いたんだろう？
足が痛い。
結局白兎はあれから少しも見かけないし……。
「お姉ちゃん、少し休まない？」
前を行くお姉ちゃんの腕を引っ張って止まってくれるよう頼む。
お姉ちゃんは小さくため息をついた。
「仕方ないわね」
そう言って彼女は近くの木の根に座る。ワタシも続いてその隣へ腰掛けた。
足を伸ばして一息する。歩きなれない足はやや浮腫んでいた。黙って足を揉み解していると、遠くから音が聞こえてきた。何かが走るような、そんな音。
「お姉ちゃん、この音なにかしら？」
「音？」
お姉ちゃんの方を向いて問いかけると怪訝そうな顔で聞き返された。でも、すぐに眉がピクリと跳ね上がる。どうやらお姉ちゃんも気が付いたようだ。
音はこちらに向かっていた。徐々に大きくなり迫ってくる。
ドドドドドッド
「え？」
呟いたのはワタシだったのかお姉ちゃんだったのか。でも、ワタシもお姉ちゃんも走ってきた生き物に度肝を抜かれたことは確かだわ。だって見たこと無い生き物だったんだもの。
ドジャッジャージャッジャッ
その生き物はワタシ達の前を通り過ぎる前に急ブレーキを掛けた。砂煙が一面に舞う。急いで口元を押さえたから咳き込むことはなかった。

「ごほっ、えほっ、な、何だって言うのよ！？」
煙の中、むせかえるお姉ちゃんの声が聞こえる。どうやらお姉ちゃんはもろに吸い込んじゃったようだ。
徐々に土煙は晴れていきさっきの生き物がはっきりと姿を現す。
驚いた。
さっき見たときは判らなかったけどワタシはこの生き物を知っている。ドードー鳥だ。こんな変な鳥はあの絶滅した鳥以外いない。ワタシは何回か本などでその姿を見たことがあった。
でも、少し違う。目の前にいるドードー鳥は眼鏡を掛けてピチピチのチョッキを着ていた。
「……鳥、なの？　これ？」
お姉ちゃんが気の抜けた声で呟く。ドードー鳥はお姉ちゃんの方へ向き直った。
「私は鳥と言う名前ではない！　ドードーと呼びなさい！」
やや上向いて声高に叫ぶ。しわがれた老人の声だった。お姉ちゃんは面食らったように瞬きを繰り返している。
「あの、ドードーさん。初めまして。ワタシは黒のアリスよ」
一歩前へ出て精一杯礼儀正しく名乗り頭を下げてみた。
「知っているとも！　もちろん、白のアリスも黒のアリスも知っている。決して初めましてでは無いのだよ」
「あら、でもあたしはアンタなんて知らないわよ？」
厳格な口調で言うドードーさんにお姉ちゃんは冷めた視線を投げた。それに対してドードーさんはうんうんと数回頷く。
「それは知らないのでなく忘れているのだよ。君達はこの世界の全てを知っている。だがしかし、全てを忘れてしまっているのだ」
「なによ、それ。どういうこと？」
彼は眼鏡を翼で押し上げた。お姉ちゃんが不思議そうにドードーさんの顔を覗き込んで問う。ドードーさんはワタシ達の腰の辺りの身長だから体を折らないと目線を合わせられなかった。
「ふぅむ、どこから話したら良いかね？　そうだ、アリス。君達の

質問に答えよう。博識を誇るこのドードーが」
腰に翼を押し当て胸を反らすドードーさん。ワタシとお姉ちゃんは顔を見合わせた。
「じゃあ、まずここは何処だか教えて頂戴」
先にお姉ちゃんは疑問を投げかけた。ドードーさんの眼鏡が光る。
「まだそんなことも知らないのかね。チェシャ猫は何も言わなかったのかい？」
「え、えぇ。あたし達がアリスだとか白兎を追えとかぐらいしか言ってなかったわ」
お姉ちゃんが答えると、ドードーさんは大げさとも言えるほど頭を下ろしてため息を吐いた。
「まぁ、仕方あるまい。では説明しよう。心して聞くが良い」
バサリッ、と両の翼を広げ威厳を保つかのようにおごそかに彼は言った。
ワタシはごくりと唾を飲み込みドードーさんを真っ直ぐと見る。
「ここはハートの女王様が納めるフシ・ギノ国。数年前に君達が色を奪い去った場所だ」
「ちょっと待って、その色って何のこと？」
お姉ちゃんが横槍を入れる。ドードーさんの眉間と思われる辺りに皺が寄った。
「見て判らんかね？　私は元々茶色の土に近い色をしていたのだ。がしかし、今を見よ。残念なことに、ただの灰色の鳥に成り下がっている」
片方の翼で眼鏡を押し上げ、もう片方で涙を拭うような動作をする。
色を奪った、そんな記憶は無くともなんだか罪悪感を感じる。
「あの、ドードーさん。ワタシ達、何をすればいいの？　どうしたらドードーさん達に色を返してあげられるの？」
敢えて奪ったことを否定しなかった。きっと忘れているだけ、と言われるに違いない。

それよりも、ワタシがどうしたらいいか知りたかった。
「それは二通りある。その中で私は一つを詳しく知っている」
「じゃあ、その一つを教えてください！」
ワタシは意気込んでぐっとドードーさんに顔を寄せる。彼はやや驚いたように首を後ろへ引いた。お姉ちゃんはワタシの横で肩を竦めている。
「う、うむ。良かろう。実に簡単なことだ。黒のアリスは左の手の平を。白のアリスは右の手の平を。私の上に置いてごらんなさい」
ワタシは迷わず左の手をドードーさんの翼の上に置く。お姉ちゃんは戸惑っていたけど、ワタシが視線を向けたら肩を竦めて、同じく翼に右手を置いた。
すると、ドードーさんが白く輝いた！
あんまりにも眩しくてワタシはすぐに目を閉じる。けれどその光は瞼を貫通するほどに強い。
「ほれ、いつまで目を瞑っているつもりかな？」
光が治まり、ドードーさんの声が暫く流れた沈黙を打ち破った。そっと、目を開ける。すぐに目に入ったのは茶色。艶やかな毛並み、その上に赤いチョッキ。ドードーさんの眼鏡の縁は薄い青だった。目は黒く輝いている。
「どうだね、色を取り戻した私は？　とっても素敵だろう？」
翼を腰に当てて踏ん反り返るドードーさん。
そんなドードーさんの言葉である人を思い出した。ワタシの家の近所に住むお爺さん。ドードーさんはそのお爺さんにそっくりなのだ。その人の名前も思い出してる。
ワタシは確認するようにお姉ちゃんを見た。お姉ちゃんと目が合う。彼女はこっくりと頷いた。
お姉ちゃんもワタシと同じなんだわ。
「ねぇ、ドードーさん。色を返すとあたし達の記憶は戻るの？　急にあたしあることを思い出したんだけど」
お姉ちゃんがドードーさんから手を離して腕を組みつつ言う。ド

ードーさんは深く頷いた。
「その通りだよ、アリス。色を封じてるのは君達の記憶である。故に、色を返せば必要なくなった記憶は自然と君達に戻るのだよ」
「じゃあ、あたしの名前は何に色を戻せば戻るの！？」
がしっ！
お姉ちゃんは急にドードーさんの胸倉……というよりはチョッキ？　を掴んだ。彼は苦しそうに翼をバタつかせる。茶色い羽が舞った。
「お姉ちゃん！　それじゃドードーさん喋れないわ！」
慌てて二人の間に割って入り、お姉ちゃんをドードーさんから引き剥がした。ドードーさんは肩で息をしてる。
お姉ちゃんの方はと言うと、我に返って苦笑いを浮かべていた。
「うおっほん、本当に白のアリスは変わらんのう」
「ごめんなさい。つい……。でも、どうしても知りたいのよ」
咳払い一つ。そんなドードーさんにお姉ちゃんは苦笑いを浮かべたまま頬を掻いた。
「まぁ、許してやろう。だがな、私にはその質問に答えられんのだよ」
「なんで！？」
また食って掛かりそうになるお姉ちゃんを急いで押さえた。
「私は判らないからだ。どんな記憶がどの色を封じているのか」
ドードーさんが静かに言う。お姉ちゃんは真っ直ぐドードーさんを見やって眉間に皺を寄せていた。拳をぎゅっと握り締めて問い詰めたいのを堪えてるようだ。ワタシは押さえるためにお姉ちゃんの服を強く握っていた手の力を緩めた。
「だがしかし、誰かが知っているかもしれん。訊いてみるかね？」
ドードーさんはそう言うと大きな声で嘶いた。鳥が仲間を呼ぶように。でも、すぐには何も起こらなかった。
「いったいなんなのよ？　訊くっていったい誰に？」
「アリス！」

お姉ちゃんが堪らず問いかけると、ドードーさんじゃない声が聞こえた。ころころガラス球が転がるような子供の声。ワタシとお姉ちゃんはキョロキョロと辺りを見回す。でも、何にも見当たらなかった。

「今の、誰なんだろう？」

「こっちだよ、アリス！」

頬に拳を当てて首を傾げる。間髪入れないでまたさっきの声が聞こえた。

声の主を探してまた視線を巡らす。そして、足元を見た瞬間！

「いやぁあああ！　ネズミぃぃぃぃっ！！」

大きく叫んでお姉ちゃんの後ろに隠れた。

だってだって足元にいるんだもの！　ネズミなんてテレビとか意外で見たこと無いから心底びっくりした。

「アンタねぇ……ネズミくらいでそんな悲鳴上げなくても。可愛いじゃない？」

お姉ちゃんの言葉におずおずと顔を上げてもう一度ネズミを見る。そのネズミは頭を垂れていた。もしかして傷つけちゃったかな？

「そうしょげるでない、ハツカネズミよ。黒のアリスは驚いただけだ」

「そうサ、ハツカネズミ。それよりご覧ヨ。ドードーさんの色が戻ってるヨ！」

ドードーさんの声の後にまた新しい声。よく辺りを見回したら色んな種類の鳥や小動物が集まってきていた。

「流石に疲れたわね……」

木の陰で座り込み息を吐くお姉ちゃん。ワタシは既に木に寄りかかったままへばっていた。

集まってきた生き物全員に色を返してたんだもの。いくら単純作業っていったって量が多すぎて疲れちゃったわ。

でも、助かったのは森。たった一本にふれただけで全部の木々に

色が戻った。一本一本だったら日が暮れちゃうし、体力だってもたなかっただろう。
動物達は集まって嬉しそうに飛んだり跳ねたりしている。本当に色々な動物がいた。ネズミに始まりインコ、アヒル、カニ、何て名前の生き物か判らないのまで多種多様。とてもカラフルだ。
「でも、こんだけ沢山やったのに戻ってきた記憶といえば……」
さっきよりも深いため息。お姉ちゃんが肩を落としてそういうのにワタシも同意したい気分だった。
だって、戻ってきた記憶は学校の生徒会長の名前だったり、あんまり話さないような後輩の名前だったり、近所の子供の名前だったり。テレビに出てた芸能人の名前なんてのもあったわ。
確かにどれも大切なものなんだけど……正直本当に戻って欲しい記憶は一つもなかった。
「アリス、そんなに落ち込まないで！　これでも食べて元気出してよ」
声を掛けてきたのは一番初めに現れたハツカネズミだった。ころころと赤い木の実を転がしてワタシ達の前に置く。彼の目は果実と同じく赤かった。
「あ、ありがとう」
「そうさ、アリス！　森は後十個もあるんダ。そこの住人達に色を返していけばきっと欲しい記憶が戻るヨ！」
果物を拾い上げてお礼を述べると今度は別の方向から声が飛んでくる。インコだ。その子の言葉に疲れた様子でお姉ちゃんはインコを見やった。
「後十個もあるですって？　その住人全部に一人ひとり二人で触れて色を返すの？　考えただけで頭痛くなるわ」
頭を抑え緩く被りを振るお姉ちゃん。インコは頭を垂れてそれ以上何も言わなくなってしまった。
「なら、もっと早い方法を知ってるかもしれない人に会えばいいんじゃないかしら？」

「ドードーさんでも知らないんだよ？　他に誰がいるってのさ！」
がやがやと一斉に動物達が騒ぎだす。あーだこーだとそれぞれいっぺんに話すものだから全部を聞き取るのは困難だった。
「ハートの４の森の芋虫さんは？」
誰かの一声。その後に全員の納得する「あぁ」と言う声がはもった。
「成る程。あの芋虫ならば私の知らないことも知っているかもしれないな」
ドードーさんがこくりこくりと頷く。
「ねぇ、ハートの４の森とか芋虫とかって何の話？」
お姉ちゃんが割り込んで問いかけると皆一斉に振り返った。
ちょ、ちょっと怖い。
思わず手にした果実をぎゅっと潰れない程度に握り締める。
「ハートの４の森も知らないの？」
「じゃあ、此処がダイヤの２の森ってことも知らないわね」
「アリスが前に来たときはそんな名前じゃなかったのサ！」
我先にと口々に喋り出す動物達。聞き取れたのは上の三つくらいだ。
「静粛にっ！」
ドードーさんが翼を広げて叫ぶ。
暫くの静寂。
誰も口を開かないのを確認してから、彼は一度咳払いをした。
「私がまとめて説明しよう」
沈黙の中にドードーさんの声だけが落ちる。お姉ちゃんがこくりと頷いたので、ワタシも続くように首を縦に振った。
「アリス、君達が来る直前。女王様がこの世界の衣替えをなさった」
「その女王様、っていうのは誰？」
「ハートの１２の城に住むハートの女王様だよ」
話し始めたドードーさんにお姉ちゃんが横槍を入れると間髪居れずハツカネズミが答えた。

「うむ。女王様はこの国を時計に見立て、それぞれ森を区分けして作り変えさせた。区分けした領域を……
『スペードの１』
『ダイヤの２』
『クローバーの３』
『ハートの４』
『スペードの５』
『ダイヤの６』
『クローバーの７』
『ハートの８』
『スペードの９』
『ダイヤの１０』
『クローバーの１１』
『ハートの１２』
と、新しく名前をつけていった」
成る程。だから森は後十個あるのね。だってハートの１２はお城だから数に入らないもの。
ふぅむ。とお姉ちゃんが腕を組む。こういう話し合いは基本的にお姉ちゃんがしてくれるからワタシは黙って聞いてることにした。手にした果実を服で軽く拭く。
「じゃあ、ハートの４っていうのはここの隣の隣なわけね？」
「まったくその通りだ。そこに住む芋虫を訪ねなさい」
ドードーさんの言葉にお姉ちゃんは「わかったわ」と返した。
ワタシは果物を口にする。
「ところで此処からどの方向に――」
お姉ちゃんの声が急激に遠くなった。いやお姉ちゃんの声だけじゃない。地面もどんどん離れていく。ワタシは立ち上がってなんていないのに、だ。
あまりの急な変化に頭が混乱してぼんやりとするしかなかった。
いつの間にか森が小さくなっている。白い雲をワタシの頭が突き

抜けたことが判った。
ワタシ、もしかしておっきくなってる？
そう言えば本のアリスも物を食べて大きくなったり小さくなってたりしていたわ。
アリスの本に似てる世界だとは思ったけど、ここまで同じなんて不思議よね。
ワタシは空を仰ぎ見た。白い太陽が輝いている。それから下に視線を向けた。
さっきまで居たと思われる森が半分近く黒い布に覆われている。
ワタシだ。ワタシの黒い服だ。
こんな広範囲を覆ってしまうなんて、ワタシどれだけおっきくなったの？
急に怖くなった。
一番近くに居たお姉ちゃん、ううん、他の皆も……潰されてないかしら？
ワタシこんなに大きくなっちゃって……どうしたらいいの？
ぽろぽろと涙が零れた。大きな声で叫びたかったけど出てくるのは嗚咽のみ。
「ふぇ、おね、ちゃ……ん、ぐす」
ワタシの涙は木に落下して、鳥たちが羽ばたく。あの鳥達はワタシに潰されなかったのね。
でも、お姉ちゃんは……。
考えたらもっと涙が溢れてきた。
「アリス！　アリス、そんなに泣かないデ！」
耳元で声が聞こえた。首を捻りそちらに視線を向ける。あそこにいたインコだ。
「貴方……無事だったの？」
涙を拭うこともせず、じっとインコを見ながらワタシは呟くように問いかけた。
「もちろんサ！　他の皆だって大丈夫だヨ！」

「本当！？」
胸を張って言うインコ。問い返せばこくこくと頷いて陽気に羽ばたいた。
「皆、君の涙でびしょ濡れだけどネ！」
パタパタとワタシの周りを楽しそうにインコは飛び回る。涙を拭いながら思わず噴出した。
でも、良かった。肩の力が抜ける。ほふっ、と自然に息が出た。
あら？　あれは何かしら？
落ち着いたらふと、目の端に灰色の煙を見つけた。体を折り曲げ顔をぐっと近づける。それは隣の森から上がっていた。気になって立ち上がり、更に覗き込む。森を手で掻き分けて煙の先に何があるのか確認しようとした。
「おや、アリス。やっと来てくれたんだね」
其処にあるものを認知する前に声が飛んできた。驚いて目をパシパシと瞬かせる。目の前に知っている顔がいた。ついさっき出会った人。
「帽子屋ウサギさん？」
問いかけると彼はにっこり笑った。
「アリス、少し大きくなったかい？　残念ながらそのサイズのティーカップはないんだよねぇ」
マイペースにこぽこぽとお茶を注ぎながら彼は言う。ワタシは急いで首を横に振った。木がガサガサと音を立てる。
「ワタシ、お茶を飲みに来たわけじゃないんです。えっと、その……あっ！」
注ぎ終わったお茶を飲みながら頷く帽子ウサギさん。喋りつつ彼から視線を辺りに巡らせて、あるものを見つけた。
縦長のテーブルに複数の椅子。そして取り揃えられた沢山のティーセット。その中でワタシはある一つのものを指差した。
「それ、頂けないかしら？」
帽子屋ウサギさんは飲んでいたカップを置いて、ワタシが指した

ものを見る。
「おや、お茶は要らないのにクッキーが欲しいなんて……変わってるねぇ」
彼は肩を竦めたが、すぐにクッキーの入った籠をワタシの目の前のテーブルへと移動してくれた。その籠を右手で摘み上げ左の手の平に乗せる。
「ありがとう！　帽子屋ウサギさん」
「いやいや、アリスの御役に立てたなら光栄だよ」
お礼を述べると彼は帽子を胸の位置に持ってて、頭を下げた。髪の間から生えた灰色の耳がひょこんと揺れる。それがちょっと面白くって少し笑ってしまった。
「本当にありがとう。それじゃワタシもう行かないと」
ワタシは手で笑ってる口を隠しながら言う。彼は頭を上げ、帽子を被り直した。
「そうか、残念だ。またおいで。今度はお茶を飲みね！」
柔和な笑顔。ワタシは幾度か頷き返して、それから上体を元の位置まで起こした。
今度はお姉ちゃんと一緒にお邪魔しよう！
「アリス、アリス！　クローバーの3の森で何をしてたノ？」
急に耳元にインコの声が聞こえる。インコはワタシの顔の周りをパタパタと飛び回っていた。
「これを貰ってきたのよ」
インコにも見えるように左の手を顔まで持ち上げた。その上に乗った籠の横にインコが止まる。
「クッキー？　アリス、お腹空いてたんだネ！」
「う、うーん……ちょっと違うんだけど」
苦笑いを浮かべ答えると、インコは不思議そうに首を傾けた。
何でクッキーなのか。別に食べ物なら正直なんでも良かった。
本のアリスは何か口にするたびに大きさが変わったわ。だからワタシもさっきの果実と別のものを食べれば小さくなれるかもしれな

い、って考えたの。
まぁ、これ以上おっきくなっちゃう可能性もあるんだけど……。
「アリス、何がちがうノ？」
「うん、えっと……見てればわかるわ」
うまく説明する言葉が思いつかなくてそう答えた。
左の手の平にあるクッキーを右手で一枚だけ摘む。今のワタシにはとっても小さいからちょっと難しかった。
それを口の中に放り込む。小さすぎて食べた感じが全然しなかった。
「ひゃっ！」
小さく悲鳴を上げる。急激に下に引っ張られるような感覚に襲われた。
目に映る風景が早回しの映像のように変わっていく。
何を見ているのか分からなくなる速さ。でも、それはすぐにぴたりと止まった。
「クロっ！　クロが消え……ちゃった？」
お姉ちゃんの声が上から降ってくる。此処にいることを告げようと顔を上げて驚いた。
だって、お姉ちゃんがすっごく大きくなってたんだもの！
「あ、アリス！　黒のアリスだっ！」
横手から大きな声。振り返れば白い毛の塊。赤い瞳がきらりと輝いた。
悲鳴が喉に突っかかる。相手は不思議そうに頭を傾けた。
「クロっ！」
ふわりと体が浮く。お姉ちゃんがワタシを摘み上げたのだ。ワタシはお姉ちゃんの目の高さまで持ち上げられた。
「こんなに小さくなって……。何があったっていうの？」
お姉ちゃんは不安そうに眉を寄せた。
小さくなって？
その言葉が引っかかり、今度はよく辺りを見回した。

ドードーさんはお姉ちゃんのすぐ横に立っている。彼も大きくなっていた。さっきの白い塊も確認する。それはハツカネズミだった。森も一層深くなった気がする。

ワタシは認めるしかなかった。

今度はすっごく小さくなってしまったという事を。

「ちょ、また泣かないの！　あんたが泣いたせいであたし達びしょ濡れになっちゃったんだからね！」

お姉ちゃんが慌てた声で早口に捲くし立てる。

目頭が熱くなって溢れ出そうになる涙を拭い、お姉ちゃんをまじまじと見た。

そう言えば髪が濡れている。

「だから、’コーカス・レース’をすればすぐに乾くといっとるのに」

「嫌だって言ってるでしょ。ドードー鳥と堂々巡りなレースなんて」

ため息を吐くドードーさんにお姉ちゃんは冷めた口調でびしっと言い切った。

コーカス・レースって確か同じ場所をずっとずっと走る、んだったんじゃなかったかな？

お姉ちゃんの表現は結構適切なんじゃないだろうか、と思った。

「それよりあんた、おっきくなったり小さくなったり……何だって言うの？」

「あ、あのね、お姉ちゃん。よく聞いてね？　ワタシ達、ここの食べ物食べると大きさが変わるのよ！」

怪訝そうなお姉ちゃんに向かって、右手の人差し指を立てつつ真剣に言う。お姉ちゃんの眉間の皺がより多くなった。

「嘘じゃないわ！　そう思うならお姉ちゃんも……あれを食べてみるといいわ」

ワタシはクッキーの籠を指差した。てっきり何処か知らないとこへ落としてしまったと思ってたけど、インコが持っていてくれたの。お姉ちゃんはそちらへ振り向いて頭を掻いた。まだ信じてないって

顔してる。
　ワタシを下においてインコから籠を受け取ると、クッキーを一枚取り出した。
「クッキー、ねぇ？」
「あ、お姉ちゃん！　あんまり食べないでね。ワタシ一枚でこんなに小さくなっちゃったから！」
　両手を口に添え、メガホンの代わりにしながら叫ぶ。お姉ちゃんは呆れた様子で「わかったわ」とだけ返してきて、クッキーをほんの少しかじった。
　お姉ちゃんが一瞬にして消える。
　いや、本当は消えたわけじゃない。あまりにも早く縮みすぎて消えたように見えただけだ。
「な、何よ。これ……」
　小さな呟きはすぐ真横から。お姉ちゃんはワタシと同じくらいまで縮んでいた。
「ほ～ら、ワタシの言ったとおりでしょう？」
　驚いて呆けてるお姉ちゃんの顔がちょっと面白いもんだから、笑いを堪えるため口を押さえた。でも、やっぱり笑ってるのは声に出てしまったようだ。お姉ちゃんはちょっとムッとして眉を吊り上げる。
　お姉ちゃんが何か口にしようとしたその時、インコがすぐ近くに降り立ってきた。
　二人揃ってそちらを見る。
「アリスが僕らと同じくらいになっタ！　すごいネ！　すごいネ！」
　羽をパタパタと上機嫌に動かすインコ。風が起こってワタシ達の髪がなびく。
「ね、そうだわ！　貴方、ワタシ達を背負って飛べる？」
　お姉ちゃんが手を合わせて唐突にインコに問うた。インコは首を伸ばしてお姉ちゃんの顔を覗き込む。
「一人くらいなら多分大丈夫サ！」

「本当！？　それならワタシ達をハートの４の森とやらに連れてって！」
お姉ちゃんが意気込んで言った。
そっか、鳥さんたちに運んでもらえるなら確かに早い。
森の中を歩いていくより空を飛んだほうが目的地もはっきり分かるだろうし。
「残念ながら、それは無理な相談だ」
急にドードーさんの大きな顔が目の前にぬっと現れた。びっくりして一歩後ずさる。
「なんでよ？」
お姉ちゃんは眉間に皺を刻んで睨み付けるようにドードーさんを見た。
「私達はこの森より遠く離れられない。行けて隣の森の手前までだ」
ドードーさんは体を起こし遠くを見つめた。お姉ちゃんはまだ訝しげな顔をしてるが何も言わない。
「まって、ドードーさん。それじゃあ、帽子屋ウサギさんは？　ワタシ達が初めて彼に出会ったのは多分スペードの１の森よ。でも、さっきはクローバーの３の森に居たわ」
そう、それは間違いない。大きくなった時見たクローバーの３の森は、名の通りクローバーの形をしていたんだもの。初めに見た森はスペードの形だったはず。ちなみに、今居る森はダイヤの形をしてたわ。
「クローバーの３の森に住むいかれ帽子屋も三月ウサギも狂ってるからサ！」
「女王様が怖くなんだよ。きっと」
ワタシの質問にインコとハツカネズミが答えてくれた。
「女王様がなんなの？」
「ハートの女王様が決めたことを私達は守らねばならん。さもなければ首をちょん切られてしまう」
お姉ちゃんの問いに深刻な顔をして、ドードーさんは翼を首の前

でスライドさせた。首を切られる真似だ。それを見た他の動物達は身震いし、体を寄せ合っている。
女王様ってよっぽど怖い人なのね。
「分かったわ。それじゃあ、隣の森まで連れてって頂戴。そこに居るいかれ帽子屋三月ウサギのところまで」
お姉ちゃんが勝気な笑みを浮かべ腕を組みながら言った。動物達がざわつく。
「アリス、イカレタ奴等のとこにわざわざ行かなくてモ！」
「そうだよ！　ずっと此処に居ればいい！」
「いや、連れて行こう」
ざわめきはドードーさんの一言で重い沈黙に変わった。皆の視線は全て彼に集まっている。
「アリス、君達は見つけるために戻ってきた。全てを思い出すために戻ってきた。だから私はその手助けをしたいと思う」
静かにゆっくりと彼は喋る。誰かが唾を飲む音が聞こえた。
「私の背中に乗れ。いかれ帽子屋達の所へ連れて行ってやろう」
ドードーさんが背を向け腰を地面に下ろす。嘴で乗るように合図した。お姉ちゃんは迷わず毛の掴んでドードーさんに登る。
ワタシは周りを見てから頭を下げた。
「あの、皆さん。心配してくれてありがとうございました。また来ますね」
そう述べてから急いでお姉ちゃんの後を追う。ドードーさんの毛は結構ごわごわしていた。
「ふむ。では行こうか」
ドードーさんが立ち上がる。動物達は見上げて黙ったままワタシ達を見ていた。
でも、もう一度挨拶する前にドードーさんは走り出す。
すぐに動物達の群れは見えなくなった。
「結構早いのね」
お姉ちゃんが後ろを見ながら呟く。ワタシも同じことを思った。

でも、確かどっかの言葉でドードーってノロマって意味じゃなかったかしら？
木々の合間を縫いながらあれよあれよと進んでいく彼は、ノロマなんて言葉、全然似合わない。
「ふむ。この森はそんなに深くもないからな。もうすぐ出るぞ」
ドードーさんの言葉にワタシ達は前を見た。
木々が一斉によけ、視界が広がる。短い灰色の草が風にたなびいていた。
ドードーさんは止まることなく駆けて行く。後ろを向けば森が遠ざかっていく。前からは別の森が差し迫っていた。
あれがさっき見たクローバーの3の森なことは間違いない。
「ここだな。降りるがいい」
ドードーさんが止まって脚を折りゆっくりしゃがんだ。お姉ちゃんは軽やかに飛び降りる。ワタシは怖くてゆっくりと毛を掴みながら下った。
ワタシ達は二人揃ってドードーさんの前に並ぶ。
「ありがとう。ここまで運んでくれて」
「ほんとう、助かりました」
二人でお礼を述べる。ドードーさんは目を細めた。それは笑っているようだった。
「いいや。気にすることは無い。私達はアリス、君達の道標の一つなのだ。とても小さなものだがね」
体を起こし片目を瞑ってみせるドードーさん。そんな仕草にお姉ちゃんもワタシも頬が緩んだ。
「さあ、アリス。行きなさい。君達に必要なのは知識だ。芋虫に会っても何も分からなければ、白兎を追いチェシャ猫を探すといい。もし、挫けそうになっても知る勇気を持ちなさい。さすれば道は自ずと開ける」
彼は長々と述べてから空を仰ぎ大きく嘶いた。それから、ワタシ達の反応を待たずに踵を返し駆けて行く。とても急いでる様に見え

た。

ほんの少し森から離れただけだけど女王様に怒られちゃうのかも。

そう思いながら姿が見えなくなるまで見送った。

帽の夢　やぁ、アリス

やぁ、アリス。よくきたね。

君はまだ多くを知らない。
僕達のことも君自身のことも。

知りたいと思うかな？
忘れたいと願ったのは君だけど。
今の君はそれも知らない。

僕も教えない。
誰も教えない。

だって皆知ってるからさ。
思い出して悲しむのはアリス。

君　だ　か　ら

僕達は話さない。

僕達はただの道標。
よくも悪くも道標。
道標の読み方を間違えないで。

いっそ僕と永遠にお茶会でもしようよ？
僕の時計は何時でも三時だから。

ーーーーーーーー

五の夢　三時のお茶会（前書き）

いかれ帽子屋三月ウサギに助力を頼むためクローバーの３の森に向かう二人だが……。

五の夢　三時のお茶会

「さあて、行きましょうか」
いつまでもドードーが去った方向を眺めている妹に向かって言う。振り返り小さく頷く彼女を見てからあたしは踵を返した。
森を見上げて少々うんざりする。今は普段の何倍も小さいことを思い出したからだ。森の何処にいかれ帽子屋三月ウサギがいるか分からない以上、森を散策するしかないのだが……。
どんだけ掛かるんだろ？
考えて頭が痛くなった。
どんっ！
額を押さえていると急に辺りが揺れた。風が草を押し倒す。飛ばされそうになりながら何とか堪えた。
「おっかしーなぁ。誰か僕を呼んだと思ったのだけれど」
降る声。聞き覚えがある。
「帽子屋ウサギさん！」
嬉々として妹が叫んだ。あの黒い燕尾服は間違いなく彼だった。
さっきドードーが嘶いたのは彼を呼ぶためだったのね。
妹の声にいかれ帽子屋三月ウサギは視線を落とす。
「おやおや、アリス。また来たのかい？」
あたし達に目線を合わせるためか、彼は腰を屈めた。その顔には相変わらず柔らかい笑みが浮かんでいる。
「えぇ！　今度はお姉ちゃんと一緒に来たわ」
妹が背伸びをして大きな声で答える。相手が聞き取りやすいように気を遣っているのだ。
「そうかい。そいつはいい。あぁ、でも、こんなところで立ち話も何だし僕の家へおいでよ？」
「あら、そうね！　じゃあ、今度はお茶を頂こうかしら」
弾む会話。よく分からなくてあたしは黙ってるしかなかった。

いかれ帽子屋三月ウサギがシルクハットを脱ぐ。
「さあ、アリス。これに乗って。森を歩くのは慣れてないんだろう？」
妹は頷いて先に帽子の縁へ腰掛ける。あたしもその後に続いた。鳥の上のあとは帽子の上なんて……変な感じだわ。普通じゃありえないものね。
いかれ帽子屋三月ウサギはひょいっと軽く帽子を持ち上げ被りなおした。
草地がぐんと遠くなる。妹が寄り添ってきた。あたしは帽子の先を強く握って引っ張っる。帽子は一部めくれ上がる形になった。傍目から見たら不恰好に見えるだろう。
でも、これなら下手に滑り落ちないわ。
「じゃあ、アリス。行くよ？」
彼はそれだけ言って駆け出した。半分くらいが跳ねながらの移動。軽快なそのステップは踊っているようにも見えた。
「ねぇ、お茶って何の話よ？」
帽子の端をしっかりと握ったまま妹に問う。さっきからずっと気になっていたのだ。
クローバーの3の森で彼女は一度彼に会ったようなのだけど……詳しくは全然わからない。
「あのね、さっき大きくなったとき帽子ウサギさんに会ったのよ。その時彼、お茶を勧めてくれたんだけど、ワタシ、クッキーだけ貰ってお茶を飲まなかったの」
成る程。あのクッキーはいったい何処のかと思ってたらいかれ帽子屋三月ウサギから貰ってきてたのね。
やっぱり、普通に良い人なのかしら？
実はあたし、いかれ帽子屋三月ウサギをちょっと疑ってた。
だって、ドードーやその仲間達が口々に狂ってるとか言ってるんだもの。ちょっと考えるわよね。そりゃあ。
でも、まだ気を許せるわけじゃないわ。妹を引っ張って逃げ出せ

る心構えは持っておかないと。
「ほら、アリス。ついたよ」
その声に妹から視線を前に向ける。木々の間に縦長のテーブル。灰色でチェックのテーブル掛けの上には沢山の様々な形をしたティーカップが並んでいる。いくつも種類のあるポットからはほこほこと湯気が上がり、クッキーやケーキ等のお菓子も所狭しと置かれていた。ただ全てがモノクロ。
「好きな席に座るといいよ」
彼は帽子をテーブルの上に置いてからそういった。甘い匂いが鼻腔をくすぐる。あたしはすぐ帽子から降りた。相手を見上げ口を開く。
「椅子に座ったらテーブルの上が見えなくなっちゃうわ」
「あー……成る程。アリス、君達はなんだか少し小さくなったんだね。そのサイズのカップはあったかなぁ？」
あたし達二人が降りたのを確認し、彼はもう一度帽子を被りなおす。それからマイペースに一個一個カップを手に持ってあーでもないこーでもないと呟いた。
「別に気を遣ってくれなくてもいいのにね？」
テーブルの端のほうまで行ってしまったいかれ帽子屋三月ウサギを眺めながら妹に話しかけた。
返事が無い。
振り返ると彼女はケーキの前に居た。瞳がとても輝いている。
……そういえば甘いもの大好きだったわよね。クロって。
今にもケーキに指を触れそうになっている彼女の後ろに近づき耳を引っ張った。
「いたっ！」
「まったくっ！　行儀が悪いわよ。それに食べないほうがいいんじゃない？」
すぐ耳を掴んだ手は離したけど彼女は半分涙目になってさすっている。

そんな強くはやってないつもりなんだけど……。
「うぅ、だってぇ」
「だっても何もないわよ。下手に食べ物口にしてこれ以上小さくなったらどうするつもり？」
腰に手を当て呆れて言うと、妹は言葉に詰まって黙った。それでもちらちらとケーキを見てる。
いくら好きだからって灰色のイチゴが乗ってるケーキを食べたいと思うのがよくわかんないわ。
「ケーキ、食べたきゃお食べよ。はい、カップ。何とか丁度良いくらいのが見つかったんだ」
ふっ、と大きな白い手袋に覆われた手が目の前に降りてくる。それが退いた後には小さな人形用のカップが二つ。灰色の液体が入っていて薄く湯気が上がっていた。
「なに？　これ」
「見て分からないかい？　紅茶だよ」
とてもにこやかに言ういかれ帽子屋ウサギ。胡散臭そうな表情を作って彼を見上げた。
「君達が色を奪ってしまったんだ。仕方ないことさ。大丈夫、味は変わらないよ」
あたしの態度を気にした様子もなく彼は自分のカップにお茶を注ぐ。それから一番近い椅子に腰掛けた。
「そうね、そうだったわ。じゃあ、お茶を飲む前にまず色を――っ！？」
急に後ろから強い衝撃が襲ってきた。あたしは容易に吹っ飛ぶ。すぐ何かに当たって、倒れた。背中が痛い。
「いたたたた」
妹の声。あたしは急いで身体を起こした。クロの姿を探して辺りを見回す。
まず飛び込んできたのは今自分の居る場所。驚いたことにいかれ帽子屋三月ウサギの手の上だった。どうやらうまい具合にキャッチ

してくれたらしい。
更に視線を巡らす。妹はテーブル上に座り込んでいた。普通のサイズで。
口端に白いクリームが付いてるのをあたしは見逃さない。
食べたな。あたしがいかれ帽子屋三月ウサギと話してる間に……。
「おや、アリス。大きくなったね。カップを変えなくちゃいけないな」
「えっと……ごめんなさい」
のんきないかれ帽子屋三月ウサギに対し、クロは恥ずかしそうに苦笑いを浮かべテーブルから降りた。
「あ、お、お姉ちゃんも食べたら？　大きくなれるよ？」
不機嫌そうに睨み付けてるあたしを見て妹は取り繕うように言う。あたしは表情を変えずにいかれ帽子屋三月ウサギを見やった。
「お茶もいいけど、あたし達行かなきゃいけないとこがあるの！よければそこまで連れてってくれないかしら？　変わりに貴方へ色を返してあげるわ」
強い口調で捲くし立てると彼は笑いながら首を傾げる。
正直あたしは人に頼みごとをするのが苦手だ。よく偉そうだとか、頼んでる態度じゃないとか言われてしまう。分かっているけど頼み込むってどうしても出来ない。
だから、大概交換条件を出す。そうすれば結構呑んでくれるのよね。
「いいけど……二人ともが大きくなってしまうと連れて行くのが大変だなぁ。アリス、君達は跳ぶのに慣れていないだろう？」
「えぇ、まぁ……。あたしは大きくならないわ。それでいいわね？」
普通跳びながら歩かないわよ。と言おうとしたが途中でやめた。話が拗れても困るからね。いかれ帽子屋三月ウサギはあたしと妹を見比べてから、こっくりと頷いた。
「いいよ、アリス」
「じゃあ、色を先に返してあげるわ」

あたしはいかれ帽子屋三月ウサギの手の平に右の手を付く。視線でクロに合図すると彼女は彼の肩に左手を添えた。
ドードーの時と同じように眩しい光が視界を埋める。だけどもそれは長く続かない。すぐに辺りが見えるくらいに治まった。
白い手袋。黒い服。帽子も髪も黒。耳は灰色でいかれ帽子屋三月ウサギは殆ど変わっていなかった。唯一変化を見て取れたのは橙色の肌と赤い瞳。
「わぁ、すごい！」
妹の声に振り返る。あたしも唖然とした。
長テーブルや椅子、お菓子やケーキに色が戻っているのだ。黄色のチャック模様をしたテーブルクロス。赤い熟れたイチゴを乗せたショートケーキ。渋みのある茶色をした椅子。色とりどりのティーセット。
とても鮮やかで、唐突に賑やかになったような気分になった。
「ありがとう。けど、もう一つ色を戻して欲しいものがあるんだ」
あたしをテーブルの上にそっと降ろしてから彼は立ち上がりある場所へ向かう。あたしと妹が黙って眺めていると一つのポットを持ってきた。丸くて灰色の細かい柄が入ったやや大きめなもの。
「これって元から灰色じゃないの？」
「いいや、黄色い模様が入ってるんだけど……。このポットじゃなくてこの中の子に色を返してあげて欲しいんだ」
いかれ帽子屋三月ウサギはポットをあたしの前に置いた。コトコトと蓋が音を鳴らして揺れる。ひょっこりと現れたのは毛に覆われた鼻。
ネズミ……かしら？
その鼻は匂いを嗅ぐようにヒクヒクと動いている。いかれ帽子屋三月ウサギが蓋を持ち上げた。でも、鼻より先は出てこない。
「あーぁ……また頬袋に種を詰め過ぎたんだな」
いかれ帽子屋三月ウサギが呆れたように額を押さえた。あたしの所からはポットの上を見ることが出来ないので彼の言っている意味

は分からない。妹は口を押さえて笑っていた。
「仕方があるまい～。其れが我輩の習性なのだよ」
のったりとしたくぐもった声。ポットの中から聞こえてくる。
「一度ポットの中に戻って種を吐き出しておいでよ。そうすれば頬がつっかえて出れないなんてことにはならないさ」
椅子に座りなおし背もたれに寄りかかりながらいかれ帽子屋三月ウサギは肩を竦める。彼の言葉に一度鼻は引っ込んだ。ごそごそと中で音がしている。でもすぐにピョンとそれは飛び出してきた。
白い毛並み。背中に灰色の線が三本入っている。身長は今のあたしと同じくらいだがでっぷりと太っていた。
「可愛い！　ハムスターだったのね！」
妹が嬉しそうに手を組んで黄色い声を上げた。ハムスターは彼女に振り返り髭を短い前足で撫でる。ちなみにハムスターの癖に二本足で立っていてとても偉そうだ。
「我輩はハムスターではなく眠りネズミなのである～」
言葉はとても偉そうだが、間延びした口調がものすごく抜けていて威厳を半減させている。
「そうだ！　そういえば自己紹介がまだだったね」
ぽんっと、手を叩いて今更ながらにいかれ帽子屋三月ウサギは言う。まぁ、確かに正式に自己紹介をし合った覚えは無い。
「それより先に眠りネズミに色を返すわよ？」
あたしが眠りネズミの前足の辺りに手を置いて言った。いかれ帽子屋三月ウサギは「あぁ、もちろんよろしく頼むよ」と返してきて腕を組む。妹は頷いて眠りネズミの頭の上にそっと左手を置いた。
また光が発せられる。そろそろ慣れてきたので目を細めチカチカならないようにした。
ネズミの背の模様は薄い茶色だった。彼が入っていたポットの柄はいかれ帽子屋三月ウサギが言っていたように淡い黄色。
しかし、こいつ等ってポットやらなんやらとセットなのかしら？
ドードー達のとこでは物と一緒に色が戻ることなんてなかったの

に。
「ありがとう、アリス」
眠りネズミを両手で拾い上げて肩の上に乗せながらいかれ帽子屋三月ウサギは礼を述べた。
「じゃあ、まず改めて自己紹介しようか」
「待って、あたし達急いでるのよ！　早くハートの４の森の芋虫に会いに行きたいの」
いかれ帽子屋三月ウサギの台詞に、あたしは首を横に振ってから心中を告げた。こっちとしては早く自分が何者なのか思い出したいのだ。いつまでもアリスに甘んじて居たくない。
彼は両肘を付き手を組んで、その上に顎を乗せた。その顔には不敵な笑みが浮かんでいる。
「そんなに急がなくても芋虫は逃げやしないよ。それより、君は此処で聞いていかなきゃならないことがある」
『聞いていかなきゃならないこと？』
あたしと妹の声がはもった。いかれ帽子屋三月ウサギはにっこりと笑う。眠りウサギはうごうごと髭を動かした。
「もちろんだとも。お主達が知らねばならぬことは星の数ほどもあるのだよ～」
いかれ帽子屋三月ウサギの代わりに眠りネズミが答える。あたしは目を細め値踏みするように二人をまじまじと眺めた。
「貴方達……いったい何を知ってるって言うの？」
「アリス、君が知りたいことを。でも、君が思い出したくないことを」
しん、と静まり返る。その言葉になんと返していいかわからなかった。背筋が薄ら寒い。追求することを拒むようにあたしの口は動かなかった。
「聞く気になったかな？」
その問いにあたしは妹を見やる。彼女はいかれ帽子屋三月ウサギを凝視したまま硬く口を閉ざしていた。仕方なくいかれ帽子屋三月

ウサギに視線を戻し、小さく頷いてみせる。
「うん、分かったよ。じゃあ、まず僕の紹介しよう。君達はいかれ帽子屋三月ウサギとか、帽子屋ウサギとか呼ぶけどちょっと違うんだよ？」
　話題が自己紹介に戻って何故かあたしはほっとした。好奇心はもちろん沸いて出ているけど、それを強く押さえつけるものがある。何かは分からない。
「えっと、それってどういうことですか？　いかれ帽子屋さんで、三月ウサギさんなんでしょう？」
　妹が首をかしげ不思議そうに問う。いかれ帽子屋三月ウサギはこくこくと二度ほど頷いた。
「そうさ！　白のアリス。君から見たら僕はいかれ帽子屋なんだ。けど、黒のアリス。君から見たら三月ウサギなんだよ」
　言っている意味が全然分からなくて思わず額を押さえる。妹も首を傾げたまま困ったように瞬きを繰り返していた。
「う～ん、今一分からないって顔をしてるなぁ」
「帽よ～、アリスは知らないのだろう。世界の理を。この世界の在り方を～」
　眠りネズミが難しいことを言う。帽と呼ばれたいかれ帽子屋三月ウサギは視線を上に向け考えるように頬を掻いて黙ってしまった。
「ねぇ、帽子屋ウサギさんの本当の名前は帽って言うの？」
　沈黙が堪らなかったのか妹がどうでも良いことを問う。正直、彼の本当の名前が判ったところでただ呼びやすくなる、それだけだ。
「いや、そうであってそうじゃない。そうだね、この世界の在り方を一から話さないと分からないか」
「待って！　一応、ドードーからここがフシ・ギノ国って名前で女王様が納めてるんだって話は聞いたわ」
　無駄な話を省くため、あたしは横槍を入れた。いかれ帽子屋三月ウサギ、いい加減長いから帽って呼ぼう。彼が人差し指を立てて顔の前で数回振った。

「ドードーと僕らが知っていることは違う。ドードーは博識だけど、其れはあの森の中での話。知らないことは彼にも山ほどある」
「我輩たちが知っていること、それは何故、主達が信じなければ世界は闇に覆われるのか〜。何故、取り戻した記憶の人物達に我輩達が似ているのか〜」
彼等が知っているといったことに興味が水のように湧き出た。
そう、今まであたしは考えないようにしていたが、未だにこれは夢じゃないかと疑っている。けど、なるべくそれを忘れようとしていた。でないと、また地面が開きかねない……その恐怖感が背筋を駆け上るからだ。
「それ、教えてくれるの？」
「もちろん、アリスが望むなら話して聞かせるさ。さあ、アリス。話は長くなるから座ったほうが良い」
屈託なくにっこりと笑う帽。彼の言われるままあたしはその場に腰を降ろした。
「じゃあ、まず、この世界が暗闇の覆われてしまう条件は知ってるかな？」
「あたし達がこの世界の存在を信じなかった時、じゃないの？」
問われて答えると眠りネズミが髭を弄りながら頷いた。質問を投げてきたのは帽なのにも関わらず。
「そう、アリス。君達が世界の存在を否定した時だ。何故、その時全てが闇に消えるのか。決して世界が消えるわけじゃあないんだよ。僕らも世界もすぐ其処にある。けど、君達が見ないのさ」
「見ないなんて、そんなことできるの？　自然に風景は目に入ってくるものだわ」
よく分からない帽の説明に、妹が極当たり前のことを言う。見ないなんてそんなことは目を瞑らない限りできない。そこにある物は見たくないものでも目に飛び込んでくるのだ。
「いいや、出来るよ。見ないから存在しない。存在しないから見えない。それに僕等は実際のところちゃんと形のあるものじゃないん

だ」
「どういうこと？」
やっぱり意味が理解できず問い返す。
「この世界が具体的に存在するにはアリス。君が必要なんだ」
「そう、アリスの記憶が我輩達に形を与えるのだ～」
思わず眉を顰める。ドードーの言葉通り狂ってるんじゃないか、そう思えた。
ちらりと妹を見やれば、キラキラと目が輝いている。完璧に信じてるようだった。
「君達が思い描いた人物が僕らに形を与える。分かり易く例を挙げよう。さっきの話に戻る節もあるけど僕は、白のアリス。君がいかれ帽子屋に近いイメージを抱いた人物の姿をしてる。記憶が戻ってるから分かるだろう？」
確かに、そうだ。彼から戻ってきた記憶は近所に居たハムスターを飼っているお兄さんのもの。昔はよくハムスターを見に遊びに行かさせてもらっていた。その人に帽はよく似ている。ちなみに、お兄さんが飼っていたハムスターは眠りネズミそのものだ。模様まで少したりともずれていない。
「ドードー達もそうだったわね。人間の姿じゃなかったけど、雰囲気が戻った記憶の人物に似ていたわ」
「理解していただけたようで光栄だよ。でも、僕はドードー達程簡単じゃない。だって、白のアリスがいかれ帽子屋とイメージした彼は、黒のアリス。君がイメージした三月ウサギと同一人物だったのさ」
そこで妹がぽんと手を叩く。そして、自信満々な表情を浮かべた。
「成る程、だから帽さんはいかれ帽子屋であり、三月ウサギなのね！」
「そう、その通り！　ちなみに帽って言うのは一個前のアリスが呼んでたあだ名さ」
「一個前って何よ？」

うんうん、と嬉しそうに頷く帽の言葉にすかさず突っ込みを入れる。ちなみに眠りネズミは帽の肩の上でこっくりこっくりと船を漕ぎ出していた。
「君達が来る前の話さ。アリスは世界に形を与える存在。形を与える者がアリスと呼ばれる」
「じゃあ、アリスは沢山居るってこと？」
今度疑問を口にしたのは妹。帽は肩で丸まった眠りネズミを横目で見てから、考えるように視線を余所へ向けた。
「そうとも言えない。今のアリスは君達だけさ。形を与えなくなればアリスじゃなくなる。まぁ、二人のアリスって異例だから君達が初めてきたときは騒ぎになったけどね。さて、そろそろこんな話には飽きてきたかな？」
眠りネズミを肩から下ろし膝の上で撫でながら、彼はあたし達を交互に見つつ言った。
「う、ううん！　そんなことはないわ」
「そうかい？　でも残念ながら僕達が話せるのはこんなものなんだ」
妹の反応にくすっと悪戯っぽく笑って彼は肩を竦めて見せる。
帽の話から分かったこと、それは何だか信じられなくて、信じたら頭可笑しいんじゃないか、と言われそうなこと。この世界に形を与えてるのはあたし達で、あたし達みたいのを総称してアリスと呼ぶらしい。本当に夢っぽい。そう考えたけどすぐ頭を振って忘れようとした。
「あ、じゃあ、一つ聞きたいんですけど、ワタシにとってのいかれ帽子屋さんって存在するの？」
妹の声がふっと耳に届く。結構考え込んでいたと思ったがそうでもないらしかった。
「もちろんだよ。でも彼はちょっと出かけてる。時間君を探しにね」
ずずっと紅茶をこともなさげに啜り彼は頷く。紅茶からはもう湯気が消えていた。きっともう冷めているのだろう。近くにあったあの小さいカップに触ってみたが熱は殆ど逃げていた。

「時間君？」
「時間君は時間君さ。それ以外の何者でもない。さて……と」
妹が言葉を繰り返して不思議そうに問うが、帽は説明になってない答えを返す。からん、と空いたカップを置いて、ポットに眠りネズミを詰め始めた。
「眠りネズミは眠ってしまったことだし……。そろそろ、行こうか？　アリス」
眠りネズミを詰め終えると蓋をして立ち上がり、妹に手を差し出す。その手をとって妹も椅子から立った。それから帽はあたしの目の前に甲を下にして手を置いた。その上にそっと乗ると、ゆっくりエレベーターのように持ち上がる。さっきまで眠りネズミがいた肩の上に置かれたので、落ちないように帽の服の襟を強く掴んだ。
「行くよ」
その掛け声とともに上から強い重力が掛かる。でもすぐにふわりとした浮遊感に変わった。前回よりはジャンプ力が弱いのか、低いところで止まる。けど、森をあっさりと飛びぬけた。
さあて、次の森は芋虫らしいけどどんなのかしらね？

虫の夢　あら、アリス

あら、アリス。よく来たわね？
ふわりふわりと煙のように記憶は曖昧なものよ。
それを捕まえる事は相当に困難だわ。
貴方が欲しいと願う記憶はそれに輪を掛け手に入れるのが難しいの。
わざわざ思い出す必要は無いのよ？
思い出したら訪れる幸せもある。
でも、崩れる幸せもあるのよ。

けれどもし、無理にでも記憶の紐を辿ろうというのなら……。

女王様に気をつけて。

彼女はアリス、貴方の記憶が戻ることを喜ばない。
彼女だけはアリス、どうあっても邪魔をする。
彼女はアリス、貴方にとって一番の味方で一番の敵。

お気をつけなさい、アリス。
全ては煙のように曖昧で掴みどころがないものよ。
自分の気持ちだけは煙にまかれないようにね。

六の夢　煙の語り部（前書き）

いかれ帽子屋三月ウサギこと帽に連れられてやっとのことでハートの４の森に着いたアリスだったが……。

六の夢　煙の語り部

「全く信じらんないっ！　何で木に引っかかるのよ！」
「あはは、あんまり下を確認しないで落ちたからなぁ」
お姉ちゃんが苛立った口調で叫ぶ。帽さんは悪びれた風もなく軽快に笑った。
「でも、どうするの？　降りなくちゃ芋虫さんを探せないわ」
ワタシが問うと帽さんはワタシを抱いてないほうの手で頬を掻いた。う～ん、と唸り考えているようだ。
「チョット！　アンタ達ナンナノヨ！」
急に真横から甲高い声。振り返ると灰色の小さな鳥が木に止まっていた。
「わぁ、可愛い」
「サテハ蛇ネ！　アタシノカワイイ卵ヲ奪イニ来タノネ！」
かわいくってついつい触ろうと手を伸ばしてみる。だけど、小鳥は目を尖らせて鋭く叫んだ。そしていきなり飛び上がると……。
「いたっ、ちょっ、やめっ！」
「ウルサイ！　蛇ナンカドッカイッチャヘ！」
鋭い嘴で襲ってきたのだ！　たまったもんじゃない。慌てて振り払おうと両手をばたつかせた。
「ちょっと、クロ！　そんな暴れたら落ち――っ」
お姉ちゃんが全部言い終わらないうちに、ふわりと落下特有の浮遊感を感じる。バキバキと枝の折れる騒音が耳元でした。ドンッと、鈍い衝撃。そして暫くの静寂。
「ちょっと、二人とも大丈夫？」
静けさを初めに破ったのはお姉ちゃんの声。ワタシは強く瞑った瞼をそっと持ち上げた。目の前に小さなお姉ちゃんを見つけてほっと安堵の息を吐く。それから上体を起こして気が付いた。帽さんを下敷きにしてたことに。慌てて退いて帽さんを抱き起こす。

「だ、大丈夫ですか！？」
「う～ん……。アリス、ありがとう。僕は平気だよ。それより、怪我はないかい？」
　彼は額を押さえてから、頭を左右に軽く振りすぐに立ち上がった。そして、いつものように口元へ笑みを浮かべてワタシ達二人を交互に見る。
「平気よ。これっくらい」
「大丈夫です。帽さんが庇ってくれたおかげで助かりました」
　ワタシ達の言葉を聞くと笑みを満面に広げて一度頷き「良かったよ」と彼は言った。
「何が良かったのかね。全く、あんた等のせいで昼飯を食い損なったじゃないか」
　シューッと隙間風のような音とともに低い声が膝元から聞こえた。見て思わず固まる。
　長い体をくねらせて地を這い、黒い舌をちろちろと覗かせているその姿はまさしく……。
「へびいいいいいいっ！！」
　頭の中で認知するとともに大きな声で叫んだ。帽さんは長い耳を二つに折って、それを更に手で押さえている。お姉ちゃんも耳を塞いでいた。
「そんな大きな声出さなくても見たまんま蛇さね」
　細長い体を起こしてフンッとご機嫌斜めに鼻？　を鳴らす。ワタシは帽さんの後ろに隠れてその蛇の様子を伺った。
「そうね。蛇だわ。貴方此処に住んでるの？」
「そうさ、この森の住人だよ。アリス。ところでおいらの昼飯どうしてくれるんだい？　あんた等のせいで鳥が警戒して卵が獲れやしないよ」
　蛇が尻尾を地面に叩きつけながらチロチロと舌を揺らす。お姉ちゃんは腰に手を当て蛇を睨み付けていた。
「そうだねぇ。クッキーでも食べるかい？」

帽さんが蛇の前にしゃがむ。そして徐に帽子を持ち上げて中から缶を取り出した。その様子を蛇はじっと黙って見ている。缶は蛇の正面に置かれた。
「帽子屋、気持ちはありがたいが……おいらはクッキーなんかより卵が好きだ。後は、食べれてもそこのアリスぐらいさ」
蛇がお姉ちゃんを見て舌なめずりをするもんだから、慌ててお姉ちゃんを拾い上げて蛇から遠ざける。帽さんは可笑しそうに口元を押さえ笑った。
「あっはっはっは。そんなこと言ってるとアリスが色を戻してくれなくなってしまうよ？」
「おいら、色より卵が欲しいね。もちろん、アリスより食べるなら卵が好きだよ。だからそんなに怒らないでおくれ、黒のアリス」
ワタシの目を見ながらたじたじと蛇は言う。帽さんは更に可笑しそうに声を立てた笑った。
「そうよ、クロ。冗談を真に受けるもんじゃないわ。ねぇ、それより！　貴方。芋虫を知らない？」
お姉ちゃんの言葉に思わず口を尖らせる。蛇は肉食だもの。ネズミも食べるんだから小さな人間を食べてもおかしくないわ。それに、あの顔、冗談言ってる感じじゃなかったもん！
まだ睨み付けていると蛇は居心地が悪そうに頭を低く地面につけた。
「知ってるよ。教えるから睨み付けるのやめておくれ」
「あはははは、滅多なことは言わない方が身のためだったね」
帽さんは笑いながらクッキーの缶を帽子の中にしまう。流石にそろそろ可哀相に思えてきて睨むのをやめた。
そ、そんなに怖かったかなぁ？
でも、昔から怒るとお姉ちゃんより怖いとか、お姉ちゃんのことになると人が変わるとかよく言われる。
もちろん、そんな自覚は毛頭も無いのだけど。
「ありがとう。その芋虫が何処にいるか教えてくれない？　アタシ

達、会いたいの」
「ふぅん、奇特だね。あの人に会いたいなんてさ。ま、いいや。あの人に会いたいなら聞いてごらん。煙に主人は何処か、ってね」
ワタシとお姉ちゃんは目を合わせる。いまいち言っている意味が分からなかった。ここの世界じゃ煙も喋るのかしら？
「じゃあ、おいらはもう行くよ。卵の獲り方を考えなきゃ腹が減って仕方ないね」
「行かせておあげ、アリス」
するりと踵を返す蛇。それを引きとめようとするワタシ達を、いち早く帽さんは言葉で止めた。蛇は体を器用にくねらせ茂みの中へと消えていく。
「ちょっと、何考えて……」
お姉ちゃんが言葉を途中で止めた。帽さんの手元を見たからだと直ぐに理解する。
「煙ってのは多分、これじゃないかな？」
彼の手には白いぼやけたモノが絡まっていた。いや、正しくは掴んでいる……みたい？
「煙って掴める物なの？」
「現に掴んでいるけど？」
お姉ちゃんの問いにすぐさま帽さんは答えた。煙を引っ張りワタシ達の前に差し出す。そっと指先で突っついてみた。ぐにっ、と柔らかいゴムのような感触。指先で摘んでみる。その白くぼやけたモノはワタシの指についてきた。
「すっごぉおい！　面白いわ、お姉ちゃん！」
摘んだままもう片方の手に乗せたお姉ちゃんの目の前へ引っ張った。お姉ちゃんが胡散臭げに眉を寄せつつ、煙に触る。お姉ちゃんはペタペタと数回触ってから首を捻った。
「変なの。煙じゃないみたい」
「どっからどう見たって煙だよ、アリス。さあ、早速主人の居場所を教えてもらおうじゃないか」

そう、帽さんが言った瞬間に凄い勢いで手が引っ張られた。よく見れば煙がワタシの腕に、お姉ちゃんの体にしっかりと巻きついている。あまりのスピードにワタシさえ宙に浮いていた。

とふん、と柔らかい衝撃。ゴムのようなその感触はさっきの煙と同じものだった。

お姉ちゃんと帽さんを探して辺りを見回す。白い煙が視界を遮っていて何があるのかよくわからない。

「お姉ちゃん！　帽さんっ！」

大きく叫んだ。でも、響きもしないし、何も返ってこない。不安になって立ち上がった。とても足場が悪くふらふらとして早く進めない。怖くて涙が滲み出てきた。

ひとりぼっりはとても心細いし一番怖い。

もう一度二人の名を呼ぼうとして、近くに人影があることに気が付いた。急いで駆け寄る。黒い影でしかなかったそれは徐々に形を成していった。

「あら……いらっしゃい。よく来たわね。アリス」

その人影が喋る。両口端を軟く押し上げ、手にした何かをくるくると回した。

「あの、貴方は？」

「煙の主。煙の語り部。人はそう呼ぶわ」

手にしたものを口に咥え、でもすぐ外してふぅっと、白い息を吐く。

煙の根源はこの人？

疑問を浮かべながらよく観察すると、彼女が手にしているのは水煙草だと言う事が分かった。写真とか絵とかで見たことはある。でも実物を目にしたのは初めてですぐにそれとは判らなかったのだ。

「アリス、私に用があるんじゃなくて？」

すらりと伸びた足を組み替えて彼女は言う。チャイナドレスのようにスリットが入った服。ただ腰から布は三枚に分かれててとても

長い。それに袖から肩に掛けての布も下に垂れとても長かった。布には細かい模様が刺繍されている。その模様は何処かで見たことがあるような気がした。
「あの、貴方、もしかして芋虫さんですか？」
「そうね、つい最近までは」
くすり、と妖しく口元を歪め、また煙管を咥える。「最近？」と問えば、上に向かって煙を吐き出しワタシを手招きした。それに応じて近くまで歩み寄る。
正面に立つと、彼女がとても小さいことが分かった。今のお姉ちゃんぐらいの大きさだ。
目線を会わす為しゃがもうかとも思ったが、彼女が座っている煙はワタシの目の前までふわふわと浮かんできた。
「また暫くすれば幼虫に戻るわ。私は絶えず繰り返すのよ。子供から大人への歩み」
視線が同じ高さになると、彼女は静かな声でさっきの答えを口にする。でも、それの意味はよく分からなかった。
「うんと、えっと、じゃあ、芋虫さんではないの？」
「今は蝶、よ。成虫になると名前が変わるの」
そこで思い当たった。彼女の服の模様はアゲハチョウの羽の模様と酷似している。
そっか、芋虫さんは蛹になって蝶に羽化したのね。
ちょっとほっとした。実は芋虫さんとまともに喋れる自信は無かったの。正直虫は全般的に苦手。特にあの足がたくさんあってウニョウニョしてるのなんて見たくも無い！　帽さんみたく人間に近い姿ならいいなぁ、って思ってたぐらい。
「それでアリス。用は何？」
「あの、実は聞きたいことがあって……」
問われてもごもごと答えながら辺りを見回した。やはりお姉ちゃん達は何処にも見当たらない。
「気にしなくても貴方の連れはもう一人が相手をしてるわ」

「もう一人、煙の主が居るの？　お姉ちゃんは今近くに居るの？」
ワタシが身を乗り出して聞くと、蝶さんは眉尻を下げて苦笑いを浮かべた。
「やはり白のアリスが居ないと落ち着かないようね。仕方ないわ」
そう言うと彼女は煙を今までよりずっと多く吐き出した。それがワタシの体に纏わりつく。ふわりと煙に持ち上げられた。そして、また引っ張られれ凄い速さで移動する。あまりの速さに何が何だかよく分からなくなった。
少ししてその動きは急に止まる。けれどやはり煙に覆われた世界からは抜け出なかった。
「クロっ！」
お姉ちゃんの声が後方から飛んでくる。煙を体からはずして急いで振り返った。帽さんが初めに目に入って、その肩にお姉ちゃんが居るのを見つける。二人の元にすぐさま駆け寄った。
「お姉ちゃん！　帽さんっ！」
「やぁ、アリス。一人で何処へ行ってしまったのかと思ったよ」
にっこりと毎度のように笑顔を浮かべて、帽さんは肩からお姉ちゃんを降ろしワタシの手に乗せた。ワタシの手に移動するとお姉ちゃんは腰に手を当てキッと眉を吊り上げる。
「まったく、心配させないでよね！」
お姉ちゃんが怒った。でも、ワタシの頬は安心して思わず緩んでしまう。
「さてさて、感動の再会はそれくらいにしてちょうだい」
「そーよ！　あたい達にある用を早く済ませちゃってよ！」
一つはあの蝶さんの声。でももう一つに聞き覚えが無い。声のほうへ振り返って思わず固まってしまった。
「あぁ、ごめんなさい。でも、貴方誰よ？」
お姉ちゃんが蝶さんを見やり訝しげに問う。ワタシは一歩後退った。
「あら？　この子から聞いてない？　蝶よ。貴方達が探していた煙

の主の片割れよ」
「ちょっと、そこのあんた！　何遠ざかってんのよ！？」
蝶さんがお姉ちゃんの質問に答えてる間、そろりそろりと後退してたワタシ。でも、後退る原因に見つかって怒鳴られてしまった。
だってだって！　まんま芋虫なんだもんっ！
アゲハチョウの幼虫そのまんまで人語話してるのよ！？
正直ワタシには耐えられない。お姉ちゃんが何で平気なのか不思議でしょうがないわ！
「前に私が幼虫だった時もそうだったわね。黒のアリス」
蝶さんが苦笑いを浮かべ芋虫を手で静止する。ワタシも苦笑いを返すしかなかった。
「ちょっと、クロ。苦手なのは知ってるけど離れたら話が出来ないわ」
お姉ちゃんが振り返り腕を組んで困ったように言った。ワタシは絶えず苦笑いを浮かべ続ける。帽さんがひょいっとお姉ちゃんを摘み上げ、ワタシの頭をくしゃりと撫でた。
「とりあえず、見えない位置に居たらいいよ」
帽さんの言葉に苦笑いがとれる。見上げると、彼は優しく笑い返してくれた。
「ありがと、帽。じゃあ、話を進めましょうか？」
「えぇ、そうね」
お姉ちゃんが仕切りなおすように言う。蝶さんがゆっくりと頷いた。
そんなやり取りを横目にワタシは帽さんの後ろへ移動する。お姉ちゃんと蝶さんがギリギリ見えて、芋虫さんが見えない位置を探し、そこに落ち着いた。
「あたし達、どこに色を返せばどの記憶を手に入れられるか知りたいの。貴方達が何か知らないかと思って、訪ねてきたのよ」
お姉ちゃんが目的を説明すると、蝶さんは横を見る。多分、芋虫さんと顔を見合わせてるんだ。

「関係のあることは知ってるよ。でも、核心部分は知らないよ」
「いいわ！　知ってることを教えて」
芋虫さんの声。お姉ちゃんは身を乗り出してそれに答えた。蝶さんが煙管を加え一息置く。
「いいわ。私が説明してあげる」
ふわりと煙を吐き出して彼女はワタシ達を順に見てから言った。お姉ちゃんも頷いたのでワタシも一度首を縦に振る。
「簡単なことよ。アリス。全ては女王様が知っている。女王様はあらゆることを知っているわ。この世界の何一つ分からないことは無いのよ」
「ドードー達はそんなこと言ってなかったわ」
ゆっくりと話し始めた蝶さんの言葉にお姉ちゃんが疑問を投げかける。でも、蝶さんは嫌な顔せず、逆ににっこりと笑った。
「彼等は知らないだけよ。６の森からこちら側の住人はあまり女王様に謁見することはできないの。知っているのは多分、私達と、そこのいかれ屋さんぐらいね」
一斉に皆の視線が帽さんに集まる。それに対して彼は、ははっと小さく笑った。
「そりゃあ、まぁ、昔はあちら側だったからね。ちょっと、とある理由で追放されたのさ」
「とある理由？」
興味をそそられ言葉の一部を反復して問う。帽さんは振り返りワタシに一度視線を向けて、困ったように笑いながら頬を掻いた。
「言ったら多分、月に怒られるから……内緒」
頬を掻いてた指を口元に運び悪戯っぽい笑みに切り替えて言う帽さん。でも、そう言われるとますます気になっちゃうわよね。それに『月』って誰かしら？
「そこが内緒、なのは構わないけど、何で女王様のこと言わなかったの？」
ワタシがもう一度追求するより早く、お姉ちゃんが眉を顰め問い

詰めた。口調がやや荒い。そんな中で内緒な部分が気になるとは到底言い出せないわけで……。
「それは、僕に対しての質問に無かったから。それに、一気に沢山説明しても理解しきれないだろう？　後、話すのを忘れていた、っていうのもあるね」
　さらりとこともなさげに言う帽さん。お姉ちゃんは拳を硬く握っている。最後の一言は余計だと思った。何ていうか火に油注いでるような……。
「はいはい、じゃれ合うのはそれぐらいになさいね？」
　そこで蝶さんが割ってはいる。お姉ちゃんが拳を解いて蝶さんに体を向けた。上手い具合に気が逸れたみたい。帽さんは笑いながら肩を小さく竦める。
「ところで、アリス。貴方達、私の話を聞いて女王様に会いに行く気になったかしら？」
「えぇ、もちろんよ」
　蝶さんはそのまま問いを口にした。お姉ちゃんがすぐに答える。ワタシはただ黙っていた。
「そう、言うと思ったわ。でも、女王様は貴方達の願いを容易く聞き入れてはくれないでしょうね」
「何故？」
　そのまま蝶さんはふっと笑って言葉とともに煙を吐き出した。煙はハートの形を作り、そして直ぐ空中へと消えていく。お姉ちゃんは訝しげに眉間に皺を刻む。
「何故か？　それはとても簡単なことよ」
　そこで一度言葉を切って彼女は目を細めた。
「女王様は、アリス。貴方が記憶を取り戻すことを望まない。決して喜ばない」
　一言一言ゆっくりと噛み締めるように言葉を紡ぐ。ワタシは彼女の言葉を心の中で反復した。
　望まない。

喜ばない。
何故かは分からないけれどそれが当たり前のように思える。女王様を知らないはずなのに彼女をとてもよく知っている気分になった。
「彼女はどうあろうとも邪魔をするわ。たとえ永久に自分の色が戻らなくても、ね」
蝶さんの続けられた言葉に身体が震えた。
ワタシは確実に女王様について何かを知っている。でも、思い出せない。ううん、思い出したくないみたいだ。
「そ、そう」
お姉ちゃんの声のトーンが落ちている。やや戸惑った響きも感じられた。きっと同じ感覚に襲われてるに違いない。
「何、気落ちしてんのよ？　さっきまでの元気は何処いったんだか」
さっきまで黙っていた芋虫が急に喋った。お姉ちゃんがそちらを振り返る。
「べ、別に気落ちしてたわけじゃないわよ！　どうやったら口を割らせられるか考えてただけだわ」
ふんっと、腕を組み胸を張ってお姉ちゃんがいつもの強い口調で言う。蝶さんが口元を抑え笑っていた。
「あっはっはは、白のアリスらしいね」
帽さんも陽気に両の口端を吊り上げ笑った。空気が軽くなってさっきの雰囲気が消える。ほっ、と肩の力が抜けた。
「さあ、女王様に会う方法を教えてちょうだい。彼女のところまで案内してくれるほうが早くて助かるけど、方法を教えてくれるだけでもいいわ」
「そうね。案内してあげたいのは山々なのだけれど、無理な話だわ。いかれ屋さんも同じでしょう？」
お姉ちゃんの問いに、蝶さんは眉尻を下げ苦笑いを浮かべる。それから帽さんへ視線を投げた。帽さんはその視線にこっくりと首を縦に動かす。
「うん、そうだね。僕等、１の森から５の森の住人は女王様の許可

が無くっちゃ６の森を通れない。けど、女王様の城へ行くには絶対に６の森を通過しなくちゃならないんだ」
「そうなの？　でも、許可がいるならあたし達も通れないかもしれないわね」
お姉ちゃんが考えるように首を捻った。それに対し蝶さんが頭を振る。
「大丈夫よ、アリス。アリスなら許可は要らないわ。貴方はこの世界を自由に動き回れるのよ」
「分かったらさっさと行っちゃいなさいよね！」
蝶さんと芋虫さんが交互に言う。芋虫さんの言葉にワタシの顔は苦笑いに変わった。あんまりワタシ達、芋虫さんに好かれてないみたい。まぁ、そりゃあ、ワタシが悪いのは分かってるけど……。
「あ、そういえば貴方達に色、返してないわね」
お姉ちゃんの唐突に口にした言葉にワタシの心臓が飛び上がった。色を返すってことは、すなわち触るってことで……。
その話題にならず出ていけそうでちょっとほっとしてたのにぃっ！
思わず想像して泣きたくなった。芋虫なんて生まれてこの方触ったことがない。
「いいわよ、要らない！　どうせ、触れないんだから！」
「こらこら、そんな言い方しちゃ駄目よ。アリス、気にしないでね？　私達色がなくても大丈夫よ。だから安心して行きなさい」
ふんっと、ひねたような言い方の芋虫さん。何だか罪悪感をヒシヒシと感じる。
「ご、ごめんなさい！　蝶に羽化したらまた色を返しに会いに来ますから！」
「その時は私が幼虫だわ」
帽さんの影から慌てて述べた謝罪に蝶さんが笑った。芋虫さんはふんっと、鼻を鳴らしただけ。
「それってどういうこと？」
興味をそそられたのかお姉ちゃんが不思議そうに蝶さんを眺め問

う。
「あら、簡単なことよ。彼女が成虫になるころ私は一度死ぬわ。そして彼女が産んだ卵から幼虫として孵るの。私達は永久に繰り返すのよ。子供から大人への歩みを、ね」
蝶さんが煙を吐き出す。それは言葉に合わせ蝶の形を成し、一度散って、卵のようなになったかと思うと芋虫のような形へ変化した。そして蝶に戻り、また散る。
「すご〜いっ！　それどうやってるの？」
感心して思わず手を叩いた。彼女はクスリ、と小さく笑んで「企業秘密よ」とだけ述べる。まじまじと水煙草を眺めてみたけど何か特殊なところがあるのかなんて判らなかった。
「さ、それより、行くんでしょう？　この森の上まで煙で飛ばしてあげるわ。６の森まで運んであげたいのは山々だけど煙は私からあんまり遠くに離れられないの」
話が一段落したと判断したのか蝶さんが話題を変える。申し訳なさそうな口調に急いで首を横へ振った。正直、その気持ちだけで嬉しい。
「でも、いかれ屋さん。貴方の脚力をもってしたなら、５の森を飛びぬけて６の森の前まで行くことができるわよね？　この森の天辺からなら」
蝶さんが口元を緩く吊り上げ、細めた視線を帽さんに投げた。どこか挑戦的だ。
「もちろん、出来ない事はないさ。でも、残念なことに僕の愛用の傘は今壊れててね。着地に失敗してしまうかもしれなんだ」
「それなら、この子の煙で傘を作ってもらうといいわ」
帽さんから返ってきた答えに蝶さんはすぐ切り返す。彼女の視線は芋虫さんが居るあたりに向けられていた。
「彼女の煙なら遠く離れようとほんの暫くは消えないし、いいわよね？」
「いいわよ。餞別にくれてやるわよ」

蝶さんが煙管を芋虫さんに手渡した。ちょっとだけあの沢山ある短い足が見える。
けど、煙管を手にしてすぐ帽さんの影に引っ込んだ。
そして、直後、白いものがひょっこり顔を出す。何だか風船に空気を入れてるようなそんな感じの膨らみ方でどんどん大きくなった。
あっという間に煙の傘は完成する。ちゃんと帽さんの大きさに合わせられた傘だ。
「とっても、素敵な傘だね。ありがとう」
手にとってクルクルと回してみたり掲げてみたりしてから、帽さんは微笑んで礼を述べる。
「礼なんて要らないよ。それより、アリス。アンタ達はこれでも持っていきな！」
変わらず怒っているような口調で芋虫さんは答えた。この場合は多分、照れてるんだと思う。ちょっとカワイイなぁ、とか思ってたら急に上から何か落ちてきた。
反射的に手で受ける。
「キノコ？」
お姉ちゃんが呟いた。そう、ワタシの手の中に納まっているのは正しくキノコ。
もしかして……。
キノコから顔を上げ振り返れば、お姉ちゃんの目の前にまったく同じキノコが横たわっていた。
「あら、いつの間にそのキノコ採ってきたの？」
「さあね。それより準備は出来たんでしょ？　早くやってちょうだいよ！」
いつまでも不機嫌そうな口調で話す芋虫さんに蝶さんはおかしそうにクスクスと笑った。
「相変わらず素直でないんだから……。まぁ、いいわ。じゃあ、アリス。お別れね」
「ちょ――っ」

ちょっと待って！　と言おうとした瞬間足元が盛大に揺れる。言葉は途中で喉の奥へ押し戻された。帽さんが手早くワタシを抱える。
「ちょっとっ！　このキノコ何なのよ！？」
お姉ちゃんが大きな声で叫んだ。キノコはしっかりと抱えている。そこでやっと初めてワタシは芋虫さんと目？　が合った。
「片側なら大きくなるし、反対側なら小さくなるよ」
それだけ言うとくるりとそっぽを向く。彼女の姿はもうそんなに気持ち悪く思えなかった。
彼女達がどんどんと遠退き小さくなっていく。ワタシ達の足元の煙だけ上に盛り上がって行っているのだ。
「ありがとーございましたーっ！」
見えなくなる前に大きく叫んだ。蝶さんが笑った気がした。芋虫さんがこっちを向いたように見えた。でも、もう遠すぎて小さくて正確なことは判らなかった。
煙を抜け、黒い葉を茂らした木々の間を通過する。更にそこも突き抜けて白い日差しが眩しい空の下へと出た。
眼下にハートの形をした森が広がっている。
帽さんが膝を曲げて飛ぶ準備をする。
ふわり、と、煙の足場から体が離れた。
ハート型の森の上を飛び、野原を越える。帽さんは真横に飛んだのだけど徐々に落ちてきていた。スペード型の森を飛び越した辺りであの煙の傘を掲げる。
一瞬引くような衝撃があって、その後は何だか宙ぶらりんになっている感覚がした。
ふわりふわりとゆっくり降下していく。今までの落下とは全然違った。
「わぁ……傘でこんな風になるんだぁ」
「うん、傘があるととっても着地が安全なんだよ」
ワタシが小さく漏らした呟きに帽さんは弾んだ声で答えた。お姉ちゃんが帽さんの手の上で眉を寄せ首を捻る。何だか納得いかない

って感じが伝わってきた。
思わず笑いそうになるのを堪える。お姉ちゃんは変なとこで現実主義なんだから。
ここで、ワタシ達の常識がろくすっぽ通じないのは今更なのにね。
「ところでこのキノコってほんと、何なのかしら？」
「片側なら大きくなるし、反対側なら小さくなる。って芋虫さん、言ってたよね？」
お姉ちゃんは傘のことを諦めたのかキノコに視線を落とし呟いた。ワタシは芋虫さんの言葉を一言ずつ思い出しながら口に出した。
「片側ってどこよ？　円形のキノコに片側も反対側もあったもんじゃないじゃない」
不機嫌そうにお姉ちゃんが口を尖らす。ワタシと帽さんは顔を見合わせた。ワタシはキノコの片側がどっちだか判る。だって、本のアリスもお姉ちゃんみたく悩んでいたもの。
「分からないなら、勝手に決めちゃえばいいんだよ」
帽さんがいつまでも頭を唸らせているお姉ちゃんに笑いながら助言する。ワタシもこくこく頷いた。
お姉ちゃんは眉間に皺をより強く寄せワタシ達を見たが、何も言わずキノコの笠の一片を摘んで引き千切る。そしてそれを一口かじった。
「あ、アリス。こんなとこで大きくなったら――っ」
ぐんっ！
帽さんの言葉終わらないうちに落下速度が上がった。見るとお姉ちゃんがワタシと同じ大きさに戻っている。流石に傘も三人分の重さには耐えられないようだ。
「仕方ないな。アリス、傘を持っててくれないか？」
帽さんは悠長に傘をワタシ達二人の手に握らせる。地面は後少しってとこまで迫っていた。
この落下スピードで地面に着いたらきっと痛いじゃすまないと思う。またちゃんと着地できないのかなぁ。

「絶対に放しちゃ駄目だよ？」
ふと、今までの着地のことを思い出してると、帽さんがにっこり笑って傘とワタシ達から手を離した。驚いてただ見送る。
ふわり、とワタシ達の落下速度が和らいだ。帽さんとの距離が離れていく。
帽さんが怪我しちゃう！
そう思った。目を瞑りかける。けど、予想に反して彼は軽く舞い降りるように地面へ着地した。拍子抜けして力が抜ける。
ワタシ達は帽さんの後を追うように、ふわりふわりとゆっくり地面へ到達した。
「やあ、アリス。怪我はないかい？」
帽さんは何事も無かったかのように笑って言う。お姉ちゃんは呆れたように息を吐いた。
「それはこっちのセリフでしょ？　無茶しないでよ」
「無茶はしてないよ。あれ位の高さなら傘が無くても大丈夫って知っていたのさ。それよりほら、ダイヤの6の森に着いたよ」
お姉ちゃんの言葉をさらりと流して、帽さんは親指を立て後ろを指す。そこには鬱蒼と黒い森が広がっていた。今まで見たどの森より黒い。やや不安にさせるような雰囲気を纏っていた。
「それじゃあ、アリス。僕はここまでだ。一緒に居れた時間はすごく楽しかったよ」
森から帽さんへ視線を戻す。既に目頭が熱くなっていた。お別れなのはとても寂しい。
「あの……」
「本当、ありがとう。助かったわ」
頭を下げるものの言葉がつっかえて出ない。お姉ちゃんがワタシの続きを口にしてくれた。お姉ちゃんの手がワタシの頭に置かれる。泣きそうで顔を上げられないのを察してくれたんだ。
「お役に立てて光栄だよ、アリス。またいつでもお茶を飲みにおいで。待ってるから」

声が耳に届く。今、顔が見えないからあれだけど、きっと変わらず彼は笑ってるんだろう。
「えぇ、またお邪魔するわ。眠りネズミによろしくね」
お姉ちゃんが受け答えをする。その声は至って普通だ。お姉ちゃんは寂しくなんてないのかな？
「あぁ、伝えておくよ。それじゃあ、またね」
帽さんの声がまたして、お姉ちゃんの手のほかにもう一つの温もりがワタシの頭に触れる。涙腺が緩んで更に顔を上げられなくなった。
そして風がすぐ横を駆け抜ける。一人分の影が地面から消えていた。
「ほら、もう行っちゃったから顔上げたら？」
お姉ちゃんに言われて、上体を起こす。目の辺りを袖で強く拭った。
「あんたって涙もろいんだから」
小さく呟いてから、お姉ちゃんはワタシの手を握る。そして優しく引いて歩き出した。引かれるままにワタシは着いていく。
「また会いに行けばいいでしょう」
お姉ちゃんの言葉に声なく幾度か頷いた。お姉ちゃんが口元に小さく笑みを浮かべる。でもそのまま喋らないで無言のままワタシ達は６の森へと足を踏み入れた。

骨の夢　待ってたよ、アリス

待ってたよ、アリス。
君が来るのをボク等はずっとずっとずっと待ってたんだ。

幾つもの夜を踊り続けた。
君が色を奪ったその日からも、止まることなく踊っていたんだ。
でも誰一人、満足できない。

灰色の火じゃ虚しくて
鳴る音さえも渇き切り
闇は色褪せ、光は消え去り

ただボク等は君を待つため踊り続けた。

さあ、アリス。ボク等の炎に色を灯して。
さあ、アリス。闇を濃くして。
さあ、アリス。歌い踊り続けよう。

君に返った記憶をもう一度消すために。
ずっとずっと踊ろうよ。

女王様もそれをお望み。
色も戻って君の記憶が消えるのが一番に望ましい。

だからアリス。忘れるまでボク等と踊ろう。

大丈夫、歌えば気分は晴れやかさ。
大丈夫、踊れば胸は弾んで体は軽い。

時間なんか忘れて歌い踊ろう。

大丈夫、骨になっても踊り続けられるよ。

心配なんて何も要らない。

七の夢　歌う骨踊る骨（前書き）

帽と別れ６の森の奥へと進むアリス。
しかし、今までの森とは何処か違う……。

七の夢　歌う骨踊る骨

薄暗い森の中を妹の手を引いてゆっくり歩く。６の森は今までのどの森とも違っていた。木々には黒い蔦が巻きつき、光は鬱蒼とした草木に遮られている。そして気味の悪い雰囲気が絶えず直ぐ傍に横たわっているのだ。

「何か魔女の森みたいね」

クロはぎゅっと握った手に力を込めて呟いた。あたしは黙ったまま歩みを進める。なんて返していいか分からないからだ。魔女の森っていうイメージがあたしには上手く想像できない。だって、そういうのに興味なかったから。

まぁ、薄気味悪いってことは何となく伝わってきたけど。

「ん？」

キラリ、と木々の間に何かが光った。気になってそちらへ向かう。徐々に何かが見えてきた。

「……お墓？」

妹がごくりと唾を飲み込んで呟く。そう、やや開けた場所に蔦が絡み合って廃れたような墓場があったのだ。不気味さが肥大していく。

「待ってたよ、アリス」

澄んだ声が辺りに響いた。驚いてあたしも妹もビクッと体を震わす。

声の主は古びた墓の一つに腰掛けていた。ぐるりと大きすぎる目が少し細められる。幼い少年だ。けど、纏っている雰囲気はどこか異様。

先の尖った長い捻られた帽子を被り、服は半袖に短パン。短い髪は幾つかの三つ編みが垂れていた。

「あなた、だあれ？」

あたしの後ろから妹が問いかける。少年は両の口端を吊り上げた。

「ボクは歌骨。この森から先へ通すか通さないか判断を下すのが役目」
何処か歌うような弾んだ口調。でも、それ以上は喋らずに墓の上から垂らした足をぶらぶらと揺らしている。あたし達が何か言うのを待っているようだった。
「ふぅん、じゃあ、貴方に許可を取ればこの森の向こうへ行かせてくれるのね？」
「うん。けど、アリス。今の君達を通してはあげない」
問えばすぐに返ってくる答え。より一層、少年の口端は釣りあがる。あたしは眉を顰め相手を睨み付けた。
「ねぇ、どうして通してくれないの？」
「ボク等は君が来るのをずっとずっとずっと待っていたから」
妹があたしの後ろから不思議そうに問い掛ける。と、少年は細めていた目を見開いた。気持ち悪いくらい大きな目はあたし達を凝視している。
「ただボク等は君を待つために踊り続けたんだよ」
「，ボク等，って、貴方一人しか居ないじゃない」
辺りをぐるりと確認してから、警戒を含んだ声色で矛盾を指摘する。
遮らないとそのままわけのわからないことを言い続けそうだった。
「まだ、皆眠ってるのさ。でも、アリス。君の為にいつもより早く起こしてあげる」
また再度、彼は目を細める。そこで少年の手に白い何かが握られていることに気がついた。彼は口元にそれを近づける。
笛だ。白く長い横笛。
音が奏でられた。高い音だけど耳障りでなく、むしろ心地いい。
この笛の音で何が起こるのか、あたしには想像できなかった。
「きゃっ！」
妹が小さく悲鳴を上げる。その理由は訊かなくても判った。

だって、あたしの足に冷たい感触が纏わりついているんだから！
ゴツゴツとしたその感触の主を確認する。背筋に冷たいものがすごいスピードで駆け上がった。
だって、骨よ！？　人の手の骨があたしの足首掴んでるのよ！
流石のあたしでもこれは正直怖い。体が強張って動けなくなった。
笛の音は楽しそうに絶えず響いている。
「――――――っ！」
声にならない悲鳴を上げた。足首を強く引っ張られ転倒する。妹の震える手があたしの服から外れた。あたしをその場に止めるものも無く、すごい勢いで引きずられる。クロも同じように足を掴まれ引きずられているのが見えた。
少年が座る墓石の正面で骨の手は離れ動きも止まる。妹はすぐ隣に居た。
上体を起こし妹を庇うように手を広げてから視線を巡らせる。辺りには無数の骸骨が土から這い上がってきていた。
叫ぼうとしても引き攣った喉からは何も発せられない。
奏でられていた音が止んだ。
「アリス、そんなに怖がらなくても平気だよ。皆君を歓迎している」
「怖がってないわ。　ただ驚いただけよ」
くっと歯を食いしばって声が震えないようにしながら低い声で言い返す。周りの骸骨達がカタカタと歯を鳴らした。
「あの、この骸骨さん達、良い骸骨さんなの？」
妹があたしの後ろから恐る恐る口を開いた。相変わらずこの子の思考は何処かおかしい。骸骨に良いも悪いもない気がする。でも、その抜けた台詞のおかげで震えが止まった。
「もちろん、アリス。ボク等は君が大好きだから、君にとっては良い骸骨だよ」
にっこり笑う歌骨。妹が後ろで安堵の息を吐いた。あたしは黙ったまま彼を睨み付ける。
「さあ、アリス。君にまた出会えたことを祝って宴を開こう！　夜

通し踊り歌い続ける、宴をね」
「ちょっと、待って！　あたし達急いでるの！」
墓石の上に立って両手を広げ骸骨達を見下ろして少年はよく通る声を張り上げた。骸骨達は一斉にカタカタと音を立て、慌てて止めようと叫んだあたしの言葉はその騒音にかき消される。
少年が笛に口を当てた。音が零れる。その音色に合わせるように骸骨達が各々に動き出した。
歯をカタカタ鳴らしたり、くるくると回転したり、左右に激しく揺れていたり、統一感はほぼ皆無。好きなように踊っている、そんな感じだ。
「ねぇ、お姉ちゃん。何だか楽しそうね」
後ろから妹の弾んだ声。視線を向ければ案の定、彼女の瞳は輝いていた。
とても理解できない。あたしにはただ不気味な光景にしか見えないわ。
眉を寄せ毒吐きたい気持ちを抑えてたら、耳に奇妙な音が届いた。
……歌？
そう、いつの間にか誰かが笛の音に合わせ歌っている。誰なのか、それは判らない。
声は段々とはっきりしてきた。

――君が来るのをボク等はずっとずっとずっと待ってたんだ。

幾つもの夜を踊り続けた。
でも誰一人、満足できない。

灰色の火じゃ虚しくて
鳴る音さえも渇き切り
闇は色褪せ、光は消え去り

ただボク等は君を待つため踊り続けた――

何処か切ないような響き。声のトーンはやや低く、でも透明感のあるとても綺麗な歌声だった。声の主が気になって視線を巡らす。例の少年と目が合った。

あたしは立ち上がり、スカートについた汚れを払うと少年へ向かって一歩踏み出す。明らかに歌声は彼の笛から流れていた。音色とともにまた歌が繰り返されているから聞き違えてるわけじゃないことが確認できる。

「お願い、あたしの話を聞いて。今すぐ踊りも笛も歌も止めて頂戴」

墓石に手を突いて背伸びをしながら、なるべく少年に近づいて言った。あたしの声が届いたらしく彼は口から笛を外す。音も歌も止んだ。骸骨達もぴたりと動くのをやめる。

「アリス、ボク等の歌も踊りも気に食わなかったの？　せっかく骨笛もはりきっていたのに」

すとんっ、とその場に腰を下ろし、また足をぶらりと墓石の上から垂れさせて、彼はあたしの顔を覗き込んできた。

「骨笛？　あ、別に気に入らないとかそうじゃないの」

思わず先に気になった言葉が口に出た。慌てて左右に首を振る。少年はにんまりと笑って笛をあたしの目の前に両手で差し出した。

「骨笛はこの子だよ。骨達の中で一番歌が上手いのさ」

「その笛、骨でできてるのね。でも、骨って歌うものなの？」

急に真横で声がする。びっくりして振り返るといつの間にか妹がそこに居た。墓石に両肘を付きその上に顎を乗せ、歌骨を見上げている。

「もちろん！　なんだ、アリスは骨が歌うことも知らなかったの？」

少年はくすくすとおかしそうに肩を揺らしながら笑う。妹が考えるように首を捻った。

「なんかの昔話にあった気がするんだけど……。どうだったかなぁ？」

妹は呟くが、あたしにはそんな話の思い当たりもない。肩を竦めて見せると妹は考えるのを止めて歌骨に視線を戻した。
「ねぇ、でも、何で周りの骸骨さんたちは骨笛さんと違って歌わないの？」
「ふふ、不思議に思う？　骨はね、楽器にすると歌うことができるのさ。音が出るとそれが生者に声として伝わる。ねぇ、そうだよね。皆！」
問われて彼は楽しそうに説明する。そして、歌骨の問い掛けに今まで黙っていた骸骨たちがカタカタと音を鳴らした。肯定しているみたいだ。
「そうなの。ところで、話は変わるけど……どうしたらあたし達、この森を通り抜けられるのか教えて欲しいわ」
当初の目的を思い出し、会話に脈絡が無いのは承知の上で訊いてみた。歌骨は妹から視線をあたしに移して、笑んだままの顔を傾ける。
「骨笛が歌っていたじゃないか。ボク達の願いをずっとずっと骨笛は歌い続ける。骨笛の歌はいつもボク等の思い」
彼の言葉に彼とは反対の方向へ首を傾ける。あの歌の内容はとても抽象的だった。それに全部聞こえてたわけじゃない。でも、何となく察しはついた。
「色を、返せばいいの？」
「その通り！」
大きく頷き声を張り上げる少年。骸骨達が一斉にカタカタと鳴り始めた。今までで一番騒がしい。思わず手で耳を塞いだ。
「でも、待って。女王様はそれを望んでいないんじゃないのかしら？」
騒音が止むのを待ってから妹が問い掛ける。歌骨は「あぁ」と忘れてたことを思い出したような呟きを漏らした。
「うん、確かにそうだね。でも、ボク等は女王様に，アリスへ記憶を返しちゃいけない，なんて言われてない。ボク等が女王様から受

けた命令はこの森の審判だけ。それ以外は好きにしていいのさ」
笛をくりくりと回し、半分笑いが混じった口調で彼は言う。
完全な屁理屈だと思った。でも、都合がいい。色を返せば通してくれるわけだから、ね。
「えぇ、わかったわ。それじゃあ、色を返してあげる。その代わりちゃんと通してよね？」
右の手を相手に向かい差し出しながら念を押すように言う。歌骨はこっくりと頷いてあたしの手をとった。妹が遅れて左手を出す。その手も彼は掴んだ。
例の眩い光。その後には頬を紅葉させた歌骨の姿。そしてその周り、いや墓場全体に赤と青の炎が舞うように揺ら揺らと浮かんでいた。
「わぁ……やっと戻ってきたんだね。ボク等の明かり」
歌骨が頬を緩ませて呟く。骸骨達がまたカタカタと鳴った。でも、あたしにはそれがとても遠く聞こえる。
手にはじっとりと……汗。
胸の鼓動はどくどくと何処までも早くなっていく。
頭が痛い。
「いやぁぁあああっ！」
妹の声が、全ての音を遮った。緩慢な動きでクロの方を振り返る。倒れて意識を失っていた。
何故だかは分かっている。

記憶のせいだ。

ぎゅっと、あたしは強く拳を作った。カタカタと体全体が震える。あたしも今すぐ妹のように気を失ってしまいたかった。

お墓。
幼い自分。

手を引く母。
今までの記憶と違う、気持ち悪いものを伴ったそれは確実に脳裏に甦ってくる。
思い出したくない。
おもいだしたくない。
オモイダシタクナイ。
体全体が拒否してる。必死に思い出すことを食い止めようとしてる。
――アリス。
声がすぐ傍で聞こえた気がした。
「アリスっ！」
気のせいかと思って目を瞑りかけた瞬間、今度ははっきりと聞こえた。それが誰だか直感的に分かった。
チェシャ猫。
あの、白い服を着た少年。
「アリス、忘れるんだ。色をまた封印してしまえばいい。今思い出すには、その記憶は早すぎる」
声に懸命さが感じられた。声のするほうへゆっくりと視線を向ける。あの、白い服から垣間見える無表情が居た。
色を封印って……どうやって？
「ねぇ、チェシャ猫。ボク等の邪魔をする気なの？」
チェシャ猫が口を開きかけて歌骨の声に振り返る。彼の声は酷く低く怒気を孕んでるように思えた。
「そういうことになる。俺達はアリスを守る義務があるからな」
知らない声がチェシャ猫の代わりに答える。倒れているクロのす

ぐ横に真っ黒い何かが立っていた。成人男性ぐらいの背の高さ。ただチェシャ猫と同じく耳と目の付いたフードを目深に被っている。
「そう言うと思ったけど……。せっかく戻った色をまた失うなんてごめんだね！　ボク等はキミ達の邪魔をする」
目を大きく見開いて、不敵な笑みを浮かべる。彼は骨笛を口に押し当てた。
甲高い笛の音が響く。痛い頭に一層激痛が走った。足が折れ、膝が地面と触れ合う。
骸骨達が一斉に此方へ迫ってきていた。
「アリス。強く願って。忘れたい、と。そうすれば記憶は君から離れる」
耳障りな笛の音と早い鼓動の音の中でチェシャ猫の声がはっきりと頭に響く。深くは考えず声の言うとおり強く願った。

忘れたい。
オモイダシタクナイ。
わすれたい。
おもいだしたくない。
ワスレタイ。
思い出したく……ないっ！

何回も何回も同じ言葉を心の中で唱える。すると徐々に体から力が抜けていった。鼓動は少しずつ正常な刻みに近づき、頭痛は和らいでいった。
それとともに奇妙な光景を目にする。歌骨の肌が石のような灰色に侵食されていっているのだ。
驚いたように笛の音がぴたりと止まる。既に灰色は体の八割を染めていた。骨達は静止し、辺りには沈黙が下りる。
不気味だった。ただ全員が立ち尽くし黙っている。
暫くして歌骨がこちらを振り返った。彼の目は今までのどれより

も見開かれ血走っている。
チェシャ猫があたしの手を強く握った。次の瞬間――
「走って、アリスっ！」
チェシャ猫が大きく叫ぶ。強い力で手を引っ張られた。この小さな体の何処にこんな力があるんだろう、と不思議に感じる程に。
あたしは、そのまま引っ張られて一緒に走る。音がまた奏でられ始めた。
足が何かに引っかかりその場に倒れこむ。足元に目をやると、そこにあるのは手。骨の手だ。またそれがしっかりとあたしの足首を掴んでいる。それをすぐさまチェシャ猫が尻尾で叩いた。手は外れ、するすると地中に戻っていく。
「……仕方ない。地面を歩いたら捕まってしまうよ。アリス、しっかり僕に捕まっていて！」
チェシャ猫の声に焦りを感じられた。そして、急に体が浮く。チェシャ猫があたしを持ち上げ抱えた。正直頭が混乱する。
こんな小さい子に普通どう考えたってあたしは持ち上げられないわ。
でも、そんなあたしをよそにチェシャ猫は軽やかにあたしを持ったまま跳躍した。着いた先は太い木の枝。帽程じゃないけどチェシャ猫もすごいジャンプ力である。改めて常識でモノを考えちゃいけないことを思い知らされた。
少し、落ち着いてきたあたしはチェシャ猫にしがみ付きながら木の下を見る。
笛を吹くのをやめた歌骨がこちらを見ていた。骸骨達はその場に倒れぴくりとも動かない。そして最後に、妹が倒れていた場所に目をやる。誰も何も居なかった。
忽然と其処から彼女は消えていたのだ。もっとよく見ようと身を乗り出そうとした。
「駄目だよ、アリス。落ちてしまうよ」
けど、チェシャ猫に注意される。あたしは彼を振り返った。くり

くりとした飾りの目と、視線が合う。妙な気分だ。
「妹は、クロはどうしたのよ？　どこに行っちゃったの？　捕まったの？」
けど、それを気にしてる余裕はない。あたしは早口で質問を捲くし立てた。チェシャ猫は訊いているのかいないのか視線を地面へ下ろす。
「心配しなくても大丈夫。黒のチェシャ猫がついてるから。詳しくは後で話すよ。それより此処を離れよう」
またこちらを向いて一通り告げると、こちらの返事も待たず別の木の枝へ飛び移った。それをすごい速さで繰り返す。ぐんぐんとあの墓場が離れていく。
けど、微かにあの骨笛の音が耳に届いた。
急にチェシャ猫が動きを止める。そして、いきなりあたしを放り投げた。びっくりして瞬きを繰り返し彼を凝視する。チェシャ猫に何か黒いものが巻きついていることに気がついた。
蔦？　そうだ、木々に絡み付いていたあの蔦だ！
それが、木の幹を這いチェシャ猫に絡みつく。その数は増えていくばかり。
チェシャ猫が蔦を払うように手を振るった。蔦はざっくりと幾つもに裂け、だらりと力なく木の枝に垂れ下がる。どうやったのかあたしには今一分からなかった。
自分に絡みつく蔦を全て裂いてからチェシャ猫はスッと姿を消す。
ちょ、あたし放り投げっぱなし！？
慌てて後ろを振り返ると地面はすぐ其処だった。叫んでやろうと思ったが頬が引きつり声が出ない。
目を瞑った瞬間、かくん、と何かにつかまれる衝撃。落下がとまった。うっすら目を開けるとチェシャ猫の顔。彼はあたしを残して何処かに行ってしまったわけじゃなかったらしい。
「アリス、まだ、彼等は諦めてないみたいだ。急いで森を抜けよう」
ぴくぴくと耳を動かしながら今来た方角を見据えるチェシャ猫。

あたしも同じ方角へ視線をやり耳を澄ませた。やはり笛の音が微かに届いてくる。それに合わせ蔦がにじり寄ってきていることも確認できた。

「それがいいみたいね」

あたしが小さく頷いて答えると、チェシャ猫はあたしを一度地面に立たせた。そして背を向ける。

「乗って。僕の首にしっかり手を回して、絶対に離したらいけないよ」

背を向けたまま振り返らずに彼は言う。言われるままあたしはチェシャ猫の首に手を回した。

途端、ぐっと前のめりになる。強い風が顔に当たり横へ避けていく。

チェシャ猫は腰を曲げ四本足で走り出していた。本物の猫のようなしなやかさで木々の間をすり抜けていく。時折、蔦が幾つにも纏まって四方八方から迫ってきたが、チェシャ猫はいとも簡単にそれらをかわして見せた。

森の中を風と同化して走る。正直、チェシャ猫の首に捕まっているのが辛かった。首を絞めてしまっていないかと不安になって彼の顔を覗き込むが、相変わらずの無表情。全然大丈夫なようだ。

木々が一瞬にして姿を消す。チェシャ猫が止まった。あたしは首を曲げて後方を見やる。蔦が一定の場所で行進を止めていた。木々が無くなる森と草原の境目で。

あたしはゆっくりとチェシャ猫の背中から降りた。辺りは森を抜けたというのに薄暗い。空には太陽でなく月が顔を出していた。日がいつの間にか暮れていたのだ。

「アリス、もう大丈夫だよ。６の森から歌骨達は出られない」

「そう、みたいね」

チェシャ猫が立ち上がり服を叩きながら淡々と言った。あたしは蔦から目を離して彼に視線を向け緩く頷く。

「アリス、ここからあっちの方角に行くとクローバーの７の森があ

る」
「ちょっと待ちなさい」
遠くを指差すチェシャ猫の言葉をあたしはすぐさま制止する。そして不機嫌そうな表情を作り彼の顔を覗き込んだ。何故か一歩後退するチェシャ猫。
「何？」
「アンタ、またテキトーに説明して居なくなるつもり？」
しっかりと逃げないように相手の腕を掴んで問う。ぐるりとフードの飾り目が回った。そして、チェシャ猫は黙って答えない。
「アンタ、こんな飾りで感情表現してないで顔でしなさいよね」
「いたいっ！」
あたしがその飾り目を突っつくとチェシャ猫は服の毛を逆立てて飛び上がった。ちなみに触った第一感想は、ぐにゃりとして気持ち悪い、だ。なんかグミのちょっと硬いものを触った感じ。
「アリス、目を突くのはやめてよ。すごく痛い」
「目ぇ？」
あたしに片手を掴まれたまましゃがみ込んでぐったりしたように首を振る彼。よく分からなくて呆れ返りながら相手の言葉の一部を反復した。
「言おう言おうと思ってたけどアリス。これは飾りじゃない。僕の本物の目なんだよ」
立ち上がり真っ直ぐとこちらに視線を向け彼は言う。
そう言われて良く見ると何か引っかかるものがある。フードの開いたとこがにやけたような口、大きな目、耳、フード全体が大きな猫の顔のようだった。更に観察していると例の飾り目に白いものが被る。
ま、瞬き？
思わず一歩後退した。相手の腕から手を離しかけたけど、そこは何とか堪える。
しかし、何か気持ち悪いし納得いかない。どういう構造になって

るのか中を見てみたい気分になったが、無意味なような気もして考えるのを止めた。
「まぁ、いいわ。それより……あたし、アンタに沢山訊きたい事があるの。まず、黒のチェシャ猫って何？　クロは何処へ行ったの？」
きゅっ、と相手の腕を掴む力が自然と強くなった。チェシャ猫は尻尾をくゆらせ真っ直ぐと大きな瞳をあたしの目に合わせる。
「黒のアリスには黒のチェシャ猫が居るんだよ。チェシャ猫はアリスと一対一の関係だから」
「なんで？」
「それは言えない」
相手の台詞に疑問を問い掛ければ、ぴしゃり、っと即効で答えが返ってきた。正直意味が分からない。けど、追求したところでチェシャ猫はあたしが理解できる答え方をしてくれないだろう。
「じゃあ、それはいいわ。クロはどこ？」
「黒のアリスは黒のチェシャ猫が連れて行ったよ。もし、彼女に会いたいならハートの１２の城を目指すのが一番早い」
肩を竦めてから一番聞きたいことを問う。チェシャ猫は後ろを振り返り眺めながら淡々と言った。
ハートの１２の城って確か、この国を治める女王が住んでいるところよね？
でも、何で其処に行くのが一番手っ取り早いかしら。
「チェシャ猫はアリスを女王の元に連れて行く」
顔をこちらへ向けなおして、ぽつり、と呟くチェシャ猫。なんで、とか問うのは愚問な気がした。
「なら、アンタもあたしを其処へ連れてくことを望むのね？　上等だわ。案内して頂戴」
「アリス、僕は……」
にやりと口端を吊り上げて勝気な笑みを浮かべてみせる。チェシャ猫は耳を垂らし困ったようにもごもごと何かしら言った。最後のほうは聞き取れやしない。

「案内、してくれるわよね？」
いつもはしないような満面の笑顔を形作ると、彼は大きな目を回してだらりと肩を垂れた。そして出るため息。
「……分かったよ、アリス。君の望みに僕は逆らえない」
その言葉を聞いて、あたしは相手の腕を離す。もう逃げる心配はなさそうだからだ。
「まず、７の森に入ろう。城には全ての森を通過しなくちゃ辿り着けない」
チェシャ猫は背を向けて次の森を指し示す。
よし、行ってやろうじゃないの！
自分に気合を入れるため、拳を握り心の中で叫んでから足を一歩踏み出した。

月の夢　やぁ、アリス

やぁ、アリス。
こんなとこで何してんの？
自分で忘れてったものを拾いにきたとか？

別に遅くないよ。
けど、拾ってもう一度捨てる、なんてしないで欲しいな。

そしたらアリス。
あんたはいつまでも繰り返す。
そしたらアリス。
あんたはいつまでも夢の中。
そしたらアリス。
あんたはいつまでもアレの手の上。
知らないままに踊り続ける。

オレ達と同じようにいつまでもいつまでも繰り返す。
同じこと。変わらないこと。
抜けられなくなる輪。

永久に繰り返す、オレ達の仲間になりたいなら止めないけど？
それが嫌なら必死に拾い集めなきゃ。

あんたの捨てた全てのモノを
元の場所に納めて。

八の夢　月の探しモノ（前書き）

もう一人のアリスと逸れてしまった白のアリスは、彼女に会うため白のチェシャ猫とハートの１２の城を目指す。
一方、ダイヤの６の森で気を失ったまま黒のチェシャ猫ともに姿を消したアリスは……。

八の夢　月の探しモノ

お墓？
それは誰の？
とてもとても大切な人。
それは

……誰？

分からない、思い出したくない。
大切な誰かの……。
「リス……ア……アリスっ！」
「きゃっ！」
急に耳に届いた声。驚いて反射的に小さな悲鳴を上げてしまった。
鼓動は激しく思考が定まらない。目の前に大きなギョロリとした目があった。
「アリス、目が覚めたんだな？」
「チェシャ……猫さん？」
意識はまだ混濁しているけど、聞き覚えのある声に相手の名を呼ぶ。彼は小さく頷いた。そこでやっと頭がはっきりしてくる。
ワタシは、初めて彼の容姿を目の当たりにした。大きな目、初めて出会ったときは暗闇でそれしか見えなかったんだもの。その目の下に、にんまりとした口、その中にもう一つ人の顔が入っていた。見様によっては変わったフードを被った青年。全身に真っ黒い服を纏い、ワタシの肩に掛けられた手さえも黒い手袋に覆われている。目と、その顔だけが白く浮き出ているようだった。
けど、別にあんまり違和感を感じなかった。　むしろ何処か懐かしい感じがした。
「アリス、大丈夫か？　ぼんやりとして……」

「あ、うん！　大丈夫よ。安心して、チェシャ猫さん。ちょっとまだ寝ぼけてただけ」
暫く彼を観察してたら、気が抜けてると勘違いされたみたい。笑って誤魔化してから、辺りを見回した。
そうだ、ワタシはお姉ちゃんと骸骨さん達に色を返して……。
それ以降の記憶が無い。
激しい頭痛に襲われたことは覚えてる。言い知れない不安を感じたのも。けど、その後どうしたのか、何かとても嫌なことがあったような気がするのに何も思い出せない。
「ワタシ……どうしちゃったの？」
「気を失っていたんだ。あそこに居たのでは危ないから此処まで運んできた」
チェシャ猫さんがワタシの肩から手を離し、立ち上がってからゆっくりと言った。さっき見回したときに気がついたけど此処は６の森とは違う森の中。あの暗い雰囲気も蔦もなくなっているから、同じなはず無い。
「ありがとう。助けてくれたのね。でも……お姉ちゃんは？」
「二人のアリスが一緒に居るのは危険だと判断して引き離した」
返ってきた言葉に勢いよく立ち上がって彼の顔を正面から睨み付けた。
「どういうこと？　お姉ちゃんをどこへやったの！」
「アリス、落ち着いてくれ。白のアリスには白のチェシャ猫がついている。心配はない」
ワタシの剣幕に、彼はたじろぐことも目を逸らすこともせず淡々と言った。その様子にワタシの怒気は一瞬で萎む。
「お姉ちゃんは大丈夫なのね。けど、何処へ行ったの？　一緒に居たら危険ってどういうこと？」
黙ったままのチェシャ猫さんを見つめ、矢継ぎ早に疑問を口にすると不安が押し寄せてきて涙が滲んだ。お姉ちゃんが居ないのはとっても心細い。

「本当は二人で少しずつ記憶を取り戻してもらうつもりだった。けど、アリス。あんた達は歌骨の記憶ですら耐えられなかった」
説明を変わらぬ口調でゆっくり続けながら、そっとワタシの頭に彼は手を置いた。その温もりは少し気持ちを落ち着かせてくれる。
目尻に溜まった涙を拭った。
「あの森以降の記憶は、アリス、あんたに深く関わっているモノばかりだ。下手に記憶を取り戻すとあんた達は……」
「ちょっと待って、チェシャ猫さん。貴方、誰にどの記憶が封印されてるのか知ってるの？」
身を乗り出し、思わず相手の言葉を途中で遮る。彼はワタシの問いに視線を逸らして余所を見た。
「チェシャ猫さん？　知っているなら教えて。誰に色を返せばいいのか」
「無理さ、アリス。チェシャ猫は答えられない」
もう一度同じ内容の言葉を繰り返したら、チェシャ猫さんとは別の方向から声が飛んできた。声の主の居場所はチェシャ猫さんが向けた視線の先。
そこには黒いシルクハットに同じく黒の燕尾服を着ている少年が勝気な笑みを浮かべて立っていた。帽子の横にちょこんとはみ出した灰色の長い獣の耳が生えている。
服装は帽さんにそっくりだけど身長は低くワタシの肩ぐらいだ。
「チェシャ猫は知っているけど喋れない。それはルール違反だから」
「貴方、だあれ？」
腰に片手を当て楽しそうに言う少年にワタシは首を傾けた。チェシャ猫は黙ったままじっと少年を見ている。
「オレは、三月ウサギでいかれ帽子屋。ややっこしいし、繋げて呼ぶと長いから月でいいよ」
「あら、じゃあ、貴方が帽さんの言ってたワタシにとってのいかれ帽子屋さんなのね！」
ワタシは嬉しくなって手を叩き、はしゃいで彼に近づいた。

「ご名答！　アリスは、帽に一度会ってるんだね」
帽子を取ってくるりと手で回してから月さんは頷く。
「えぇ、とてもお世話になったわ」
「それより、三月。あんた此処で何をしてるんだ？　クローバーの３の森に居るはずだろう？　此処はスペードの５の森だ」
ワタシが更に話を続けようとするより先に、黙っていたチェシャ猫さんが口を開いた。月さんの目がワタシからチェシャ猫さんに移る。
「少しばかり探しモノを、ね」
「何を探しているの？」
帽子を軽やかに投げて頭の上に乗せる月さん。彼の探してるものが気になって間髪居れず問い掛けた。
「アリス、オレは時間君を捜してるんだよ。親愛なる友」
ふっ、と彼の表情に影が差した。さっきの楽しそうな様子とはうって変わってとても寂しそうだ。
「時間？　確か彼はハートの１２の城に居るはずだ。帽子屋と三月、あんた等と喧嘩して女王様の下に行ったと聞いた」
「違うっ！　喧嘩なんかしてないんだっ！」
だんっ、と言う音とともに目の前から月さんが消えた。激しい憤った声に振り返るとチェシャ猫さんの襟首を引っつかみ食って掛からんばかりの勢いの彼が目に入る。身長差は跳ね上がることでカバーしていた。けれど、いつまでも浮いていられないみたいで、月さんはすぐ手を離して地面へ足を着ける。
「……アレは女王が流した嘘なんだ」
小さな呟き。さっきまでの勢いは何処へやら、月さんは頭を、耳を垂らした。
「あの、月さん。じゃあ、本当は何があったの？」
二人にそっと近づく。月さんの瞳を腰を屈めて覗き込んだ。彼は少し戸惑ったように視線を漂わせる。けれど、すぐに真っ直ぐとワタシの目を見返した。

「オレと帽がまだ、あっちに居た頃の話さ。女王様が開いた大演奏会。そこじゃ誰もが歌わなくちゃならなかった。仕方なくオレも歌ったんだ。でも、英語の歌でさ。歌詞をうっかり忘れちゃって……」
ふぅ、っと息を吐いて肩を竦め一息置く月さん。チェシャ猫さんもワタシも黙って彼の話を聞いていた。
「適当に歌って見せたら、女王様は凄い剣幕で怒ってこう言った。『この者は時間を殺そうとしている！　ひっ捕らえ首を切れ！』ってね。オレには何のことだかさっぱりわからない。弁解の余地も無いままこっち側に追いやられ、時間君とも離れ離れにされちゃったんだよ」
話し終わると月さんは途中でついた溜息よりももっと深い溜息を吐いた。彼が理不尽でならない。
「でも、いったいどんな歌を歌ったの？」
「んー、それは……『キラキラ光るこうもりさん』って言ったかなぁ」
そう言えば、本のアリスでそんな歌があったことを思い出す。キラキラ星の替え歌で、面白い注釈を読んだことがあるからよく覚えてるわ。
そう、確かその歌は、あまりに歌詞を変えすぎて、字余り、字足らずになり歌そのものの調子を狂わせてしまっていた。
女王様が「Ｈｅ' ｓ　ｍｕｒｄｅｒｉｎｇ　ｔｈｅ　ｔｉｍｅ（彼は時間を殺している。）」と言ったのは、「調子（ｔｉｍｅ）」を「だいなしにする（ｍｕｒｄｅｒ）」という意味と、「時間（ｔｉｍｅ）」を「殺す（ｍｕｒｄｅｒ）」という二つの意味が折り重なっているからだって書いてあったわ。
「ねぇ、いっそ此処でもう一度歌ってみてよ。聴きたいわ」
好奇心に操られるまま口を開く。だって、どれだけ調子が外れているのか気になるんだもの。
「うーん。オレ、本当に適当に歌ってたんだ。だからそん時のでたらめな歌詞なんて覚えてないよ」

「今も、でたらめでいいの！　歌ってくれたら女王様がなんで怒り出したのか理由が分かるかもしれないわ」
本当はもう分かってることなんだけど、敢えてそれは言わずに歌うよう促す。ワタシの言葉にたじたじとしながらも腕を組み、彼は視線を地面に向けた。どうやら迷ってるみたい。少しして、月さんはワタシを真っ直ぐ見て、こっくりと頷いた。
「じゃあ、少しだけだからな。原因が分かったら教えてくれよ」
じっ、と確認するような視線。ワタシが小さく頷き返すと月さんは視線を余所へ向け、息を大きく吸い込んだ。
「きらきら〜りとぅるばっどぅ〜」
「ちょ、え……」
思わず口からはみ出た声に、すぐ月さんは歌うのを止める。いや、だって、あんまりにも予想から外れてたんだもの。ワタシは何も言えずただ其処に突っ立ていた。月さんも黙ってワタシを見ている。
「『きらきら』は英語じゃない。和訳の歌詞の一部だ。『きら』が『ｋｉｌｌ』に聞こえたんじゃないか？」
チェシャ猫さんが横から口を出した。月さんは彼を振り返り眉を寄せる。でも、チェシャ猫さんの言い分は、ちょっと無理があるような気がした。でも、そんなワタシの考えは余所に話は進む。
「ありえないことじゃないだろう？　適当に歌ってたんだからきっと、女王様の耳には何処かの歌詞が『ｋｉｌｌ　ｔｉｍｅ』に聞こえたんだろうさ」
肩を竦め小さく鼻を鳴らすチェシャ猫さん。彼のフードの方の口の両端がぐぐっと上がった。その仕草は相手を馬鹿にしているように見える。
月さんは顔を赤くして鋭い視線でチェシャ猫さんを睨み付けた。
「そうかもしれない……けど、オレはあんたに原因を探って欲しいなんて頼んでないんだよ！　相変わらず、人を馬鹿にしたような言い方しやがって！」
「いいや、別に普通に話してるさ。しかし、そう思うのはあんたが

自分のしたことを馬鹿だと認識してるせいだ」
「ちょ、ちょっと、二人とも喧嘩は駄目よ！」
双方で睨み合う二人の間に急いで割って入った。チェシャ猫さんの様子はあんまり変わりなかったけど、中間地点で火花が飛び散ってたんだもの。
二人の視線がワタシに向いたから、お姉ちゃんの真似をして眉間に皺を寄せた。
「すまない、アリス」
チェシャ猫さんはすぐに短くそう言った。でも、月さんは腕を組んで口を尖らせそっぽを向く。
「そいつが先に突っかかってきたんだ。オレは悪くない」
拗ねたような言い方。見た目と同じく言動も子供っぽい。何だか少し可愛いと思う反面、どう扱えばいいか分からなかった。だって、小さい子の相手なんてあんまりしたことないんだもの。
「そう言うことばかり言ってるから帽子屋に子供扱いされるんだ」
「なんだと！？」
ワタシが何か言う前に、また喧嘩を売るチェシャ猫さん。さっき謝ったばかりなのに、反省の色がてんで感じられない。
「もういい。せっかく１２の城までの抜け道を教えてやろうと思ったけど、やめたやめた！」
「何だって？」
ついに背中まで向けて完全に拗ねた様子を見せる月さん。けれど、彼の言葉にチェシャ猫さんが様子を変えた。
「何、知りたいの？」
少しだけ振り向き月さんは言う。顔はまだ不機嫌そうだ。
「あぁ。６の森の通過が困難になった以上、別の道があるなら是非知りたい」
チェシャ猫さんがこくりと頷き答えると、彼は表情を変えて笑みを刻み、体ごと振り返った。
「なら、さっきのこと謝ってもらおう。そしたら教えてあげるよ」

腕を組み直して胸を反り、笑みをより深くする月さん。よっぽどご立腹だったみたい。
「あぁ、よく分からないが、悪かったな」
「よく分からないってどういう意味さ」
チェシャ猫さんは何の抵抗もなくすぐ謝った。でも、言葉にやや問題がある。そこに食って掛かる月さん。このまま二人に任せて放っておいたらずっとエンドレスで終わらない気がした。
「月さん、一応謝ってるんだし寛大にこれぐらいで許してあげたらどうかしら？　それにワタシも、１２の城までの抜け道、知りたいわ」
チェシャ猫さんが更に何か言おうとしたのを手で制して、ワタシは急いで弁護に回った。月さんは考えるように視線を巡らす。
「アリスがそう言うなら……許してあげるよ。寛大に」
こっくりと頷き、月さんは満足そうに笑む。その時、チェシャ猫さんの耳がピクリと動いた。けど、彼は何も言わない。言い返すのを押し留まったみたいだ。
「それで、１２の城の抜け道だけど……ちょっぴり危険を伴うかもしれない。あ、でも、今の６の森を通過するよりは全然大丈夫なんだけど」
「もったいぶってないで早く話せ」
真剣な表情でワタシの目の前まで近づき月さんは話を始める。前口上の長さに対してチェシャ猫さんが茶々をいれた。月さんはチェシャ猫さんを振り返り眉間に皺を寄せる。
「焦らなくても抜け道は逃げたりしないよ。まぁ、手っ取り早く話すとジョーカーの１３の塔を通るのさ」
「まさかっ！」
渋い顔を悪戯っぽい笑みに変え、チェシャ猫さんの方を向いたまま月さんは楽しそうに言った。チェシャ猫さんは目をより大きく見開いて、尻尾をピンと逆立てている。驚いてる、のかな？
「ぶっ、あはははっ！　アンタのそんな驚いた顔、はじめて見たよ

！　でもさ、いいと思わないか？」
「いや、しかし、あそこは……」
　お腹を抱え一通り爆笑してから、月さんは目尻にたまった涙を拭い、チェシャ猫さんに問い掛けた。けど、チェシャ猫さんは戸惑ったように言葉を濁す。
「ねぇ、ちょっと待って。そのジョーカーの１３の塔って何なの？」
　話から置いてけぼりにされていたワタシは、この気にまず根底にあるモノの説明を求める。月さんはこちらを振り向いてぽんっと、手を叩いた。
「そっか、アリスは知らないんだ？　えっとさ、まず１２の森と城が時計を模して円形に並んでるのは知ってる？」
　問われて少し考えてから首を縦にする。確か、ドードーさんが似たようなことを言ってたわ。
「そう？　まぁ、それでね、その円形の中心に聳え立ってるのがジョーカーの１３の塔なんだ」
「だが、そこの住人が厄介だ。大人しく通してくれるとは到底思えない」
　月さんが弾んだ声で説明するのと相反するようにチェシャ猫は沈んだ声で言う。しかし、月さんは首を横に振って得意げに片口端を吊り上げた。
「いいや、奴等に見つかんなきゃ大丈夫さ」
「見つからない道を見つけたとでも言うのか？」
　月さんがさも楽しげに発した言葉に、チェシャ猫さんは勢い込んで一歩踏み出す。ちなみにワタシはまた話についていけてない。塔の住人さんてどんな人なのかしら？
「ご名答！　まぁ、見つかりにくい。が正しいけどね。それに、万が一見つかってもアリスが居る」
　急に二人の視線がワタシに向いた。どうしていいか分からず、首を傾ける。
「あの、ワタシが何か役に立つの？」

「もちろんさ！　アリスならきっと奴等も頼みを聞いてくれると思うね」
　ぴょんと軽く跳ねてワタシの鼻先に人差し指をつけて、自信満々に月さんは言った。そんな彼をチェシャ猫さんが襟を掴んでワタシから自分に顔を向けさせる。身長差のせいで月さんは地面に足がついていない。
「あいつ等がどう出るか、確定的な事は言えないはずだ。アリスの頼みを聞かない可能性も十分ある。そんな危険な目にアリスを合わせるつもりはない」
「だから、見つかった時の最終手段だって！　そんな心配しなくてもいいと思うけどな」
　チェシャ猫さんは淡々言いながら、しかし不愉快そうに尻尾を揺らす。それに対して月さんは頭の後ろに手を回して組み、気楽な笑みを浮かべたままこともなさげに言葉を返した。
「ねぇ、二人とも。そんなに塔の住人さんって怖い人なの？」
　二人の会話を聞いていてふと疑問に思ったことを口にする。二人は一度ワタシを見てからすぐに、双方で顔を見合わせた。
「怖いと言うか、厄介なんだよね。普通に塔に入るなら、住人が出した問題を解かなくっちゃならない。しかも、挑戦して間違えたらその場で食べられちゃう！　だからまず、誰も塔には近づかないのさ。女王様もね」
　今だ襟首を持たれ、ぶらぶらと揺れながら月さんは肩を竦める。
　確かに答えを間違ったら食べられちゃうなんて怖いわね。出来ることなら行きたくない。
ちろり、とチェシャ猫さんを見やる。あの大きい目と視線がかち合った。
「あの、どうしても塔を通っていかなきゃならないの？　１２の城に何かあるの？」
「アリス、あんたは１２の城へ行かなくちゃならない。それに、そこへ向かえば白のアリスにも会える」

チェシャ猫さんが付け加えるように言った後半の言葉に怖いのも何もかも頭から吹っ飛んだ。ぐっ、と一歩彼の方に身を乗り出す。それに驚いたのかちょっぴりビクッと身を震わせて、チェシャ猫さんは月さんの襟から手を離した。月さんがボテッと落ちる。

けど、ワタシは今、それを気にしてなんかいられない。

「本当？」

勢い込んで更にもう一歩前進し、叫ぶように確認を仰いだ。彼は一歩後退してこっくりと頷く。

「あぁ。白のチェシャ猫もアリスをハートの１２の城へ導くだろう。だから、そこまで行けばもう一度会える筈だ」

彼の言葉に自然と頬が緩んだ。嬉しくなって手を合わせて胸元でぎゅっと強く握る。

お姉ちゃんに会える！　それはワタシにとってすごく心強いこと。ちょっとくらいの怖さなら乗り越えられそうな気がした。

「んじゃ、話は決まり、かな？」

パンパン、とズボンを叩きながら立ち上がり、ワタシの顔を覗き込んで笑みを浮かべながら首を傾げる月さんに、ワタシは一度首を縦に振った。

「よーし、それなら早速……塔へ出発しよう！」

「何だ、あんたも行くのか？　道を教えてくれるだけでいいんだぞ」

ぐっ、と片手に拳を作ってそれを天高く掲げた月さんに、チェシャ猫さんは冷たく言い放つ。このままだとまた険悪な雰囲気が再来しかねない。

なんで、こんなに突っかかるのかしら？

「道は複雑で口じゃ説明できないよ。それにオレだって城に用があるのさ！」

むっとした顔でチェシャ猫さんを振り返り、ややつっけんどんに言う月さん。

「用ってなに？」

ワタシはすぐさま会話に割って入り、気を逸らさせた。月さんは

こちらに顔を向け表情を緩める。
「初めに話しただろう？　オレは時間君を探してるって。彼は今、女王様の城に囚われてるんだよ。それを助けに行くんだ！」
喋りながら月さんは段々と熱が入り声が大きくなっていく。いつの間にか両手が拳に変わっていた。
友達のために危険を冒して助けにいこうなんて、なんて偉いんだろう。
ワタシは月さんの拳を両の手で覆った。
「そうだったのね……。一緒に行きましょう、月さん。ワタシも何か手伝えるなら手伝うわ！」
「アリス……ありがとう！」
少しはにかんで、でも嬉しそうに笑顔を浮かべる月さん。一方、チェシャ猫さんは会話に混じらず彼の横で肩を竦めていた。
「あら、チェシャ猫さんは不満なの？」
月さんから手を離し、黙ったままのチェシャ猫さんの瞳を覗き込む。彼は緩く頭を振った。
「いいや。アリス、あんたの好きにしたらいい」
「ありがとう。チェシャ猫さん」
彼の言葉に笑顔を向けてお礼を述べると、彼は大きな瞳を微かに細める。その仕草に何か感じるものがあって、自分の意図とは関係なく急に表情が強張った。
「どうかしたの？　アリス」
月さんがワタシの服を引き、眉を顰めて訝しげにワタシの顔を見上げている。慌てて首を勢いよく左右に振る。
「何でもないわ！　それより、早く塔に向かいましょう！」
「アリス、塔までの道知ってるの？」
誤魔化すように急いで歩を進めようとした矢先、月さんの言葉でストップを掛けられた。
塔は森達に囲まれた中心に立っている……けど、どっちの方向に行けば中心にたどり着けるかワタシに分かるわけがない。

「森の周りを流れてる川を辿ればいい」
「下るの？　それとも上るの？」
チェシャ猫さんが間髪入れず説明を口にする。けど、ちょっと答えとして足りないものがあったからワタシは問い直す。すると彼は不思議そうに首を横へと傾けた。
「上るも下るもないよ、アリス。フシ・ギノ国の川は塔から流れてきて塔へ帰っていくんだ。森や城を一周してね」
そんなチェシャ猫さんを見て月さんが彼の代わりに答える。けど、その回答は突飛でワタシの想像力を越えていた。
「そ、そうなの？　よくわからないけど、まず川まで行かないとね」
「そうだよ、アリス！　とにかく森を抜けよう。見ればアリスだってきっとよく分かるさ！」
はしゃぐように両手を広げ満面の笑みを浮かべる月さん。つられてワタシの口元にも笑みが零れた。その時、チェシャ猫さんがワタシの腕を引く。そのまま彼は何も言わず、やや屈んで掴んだワタシの腕を自分の首に掛けた。そして膝の後ろを持ち上げる。所謂お姫様抱っこだ。
「よし、行こう」
ワタシが口を開くより早く、その言葉が耳に届き、次いで上へ飛び立つような重圧感が襲ってきた。落ちそうな気がしてチェシャ猫さんの首にしがみ付く。黒い服には毛が生えていて結構ふかふかしてた。
黒い木々が後ろへ走っていく。正しくはチェシャ猫さんがワタシを抱えたまま枝から枝へ凄いスピードで飛び移ってるのだけど、ワタシには木々の方が動いてるように見えた。風が頬に当たり髪をなびかせてる。
そしてあっという間に森の出口へ辿り着いた。すっ、とゆっくり丁寧にチェシャ猫さんはワタシを下ろす。
良かった。ちょっと恥ずかしかったのよね。
両の手で頬を押さえながら視線を巡らす。幾度か見たあの草原が

相変わらず広がっていた。しかし、月さんの姿が見当たらない。
途中ではぐれちゃったのかな？
そう思った矢先、上から声が振ってきた。
「早かったね！　アリス！」
その声に反応して上を向くより早く、彼が目の前に降ってきた。ストッと軽快に地面へ着地する。
「あんたが遅かっただけだろう」
「ちょっと勢いよく飛びすぎただけさ。それよりアリス！　アレが塔に続く川だよ！」
チェシャ猫さんの言葉にちょっとむくれた顔をしたが、すぐに屈託のない笑顔を浮かべ、月さんは遠くを指さした。
その方角を見てからワタシは首を捻る。だってただただ白い草原が広がってるようにしか見えないんだもの。
「んー、今は草の色と同じだから分かりにくいかな？　空から見れば境目がはっきりしてるのが分かるんだけど……。まぁ、近くへ行けば分かるよ！」
ワタシの様子を見て考えるように腕を組む月さん。けど、すぐさま目を輝かせワタシの手を取り走り出した。ワタシは戸惑いながらも引っ張られるまま彼の後についていく。
少し行ったところで風景の微かな違いに気がついた。
初めは草が動いてるのかと思った。でも、違う。
もっとも近くまで行ってやっとその正体が分かった。
白い水が流れてる。月さんから手を離し、近づいて掬ってみると、それは透明の水。どうやら底が見えないほど深いみたい。
でもそれだけじゃない。近づいて気がついたことはもう一つ。川は丁度真ん中で流れが逆になっていた。
横にじゃなくて縦。同じ川の中に上りも下りも存在してる。とても不思議な光景に幾度も瞬きを繰り返した。
「どうだい？　アリス。上りも下りもないだろ？」
そんなワタシの後ろで腰に手を当てて何処か得意げに言う月さん。

ワタシは振り返りこっくりと頷いた。チェシャ猫さんが彼の隣に立つ。
「これをあちらの方向へ辿っていくんだ」
そして森とは反対の方向を指差した。川の先は地平線に飲み込まれ何があるか見ることはできない。
「よし、行きましょう」
言いながら胸の前でくっと手を握る。二人がこっくり首を縦に振った。
「でも、アリス。歩いていくにはとても遠いよ？」
ワタシが一歩踏み出すと同時に月さんが口を開く。そこで立ち止まり頬を掻きながら考えているみたく見えるように視線を泳がす。もう一度お姫様抱っこは恥ずかしいので嫌だった。
「俺がアリスを連れて行く。それでいいだろう？」
「え、チェシャ猫ばかりずるいよ。今度はオレが連れて行きたいな」
ワタシの思いはなんのその、チェシャ猫さんはさっきと同じ方法を取るつもりらしい。けど、それに対し月さんが口を尖らせた。
確かに今までのことから考えたら二人のどちらかに連れてってもらえれば早いんだろうけど……。
睨み合う二人に困ってたじたじとしていると、突如足首に違和感を感じた。濡れた冷たいものが触れた感触。それが何かを確かめる前に強く引っ張られる。
「きゃっ！」
ワタシの小さな悲鳴にチェシャ猫さんと月さんが振り返った。けど、彼等が行動を起こすより早くワタシの体は水の中に飲み込まれる。大きく息を吸ったつもりが水を大量に飲んでしまった。
足は未だに川の奥へと強い力で引っ張られている。外そうともがくけど、どうにもならなかった。
苦しくて意識が朦朧としてくる。
ワタシ、どうなっちゃうの？
泣きたくなって、無意識にお姉ちゃんを呼ぼうとして、また水を

大量に胃に送ってしまった。助けを求めようにも出来なくて、苦しくて細かいことは考えられない。そして、意識はあっさりと暗闇の中に落ちた。

易の夢　あぁ、アリス

あぁ、アリス。
君の中の真実は未だ見つからナイママ。
そっと扉を開く手助けをしてあげたいのは山々ダケド。

オイラ、アノ人には逆らえナイ。

真実を伝えるのがオイラの役目。
けど、アノ人はまだそれを望まナイ。
だから真実はまだ闇の中。

真実を伝える時、アリス。もう一度オイラ、アンタの前に現れるヨ。
けど、アリス。アンタは真実を拒否することも出来ル。
そしたらオイラ役目はなくなっちゃうけど。

アリス、アンタが幸せなら構わナイ。
オイラ永久に、真実の扉の鍵を飲み込んだままで居ヨウ。

アリス、アンタの好きなように。

九の夢　白兎の家（前書き）

塔を目指そうとしていた矢先、何かに足を引っ張られ川の中へ引きずり込まれた黒のアリス。

一方、ハートの１２の城を目指し、７の森に向かった白のアリスは……。

九の夢　白兎の家

今までの中で一番深くない森だった。入って十歩程度行った所で木が無くなり、その先には畑。そして、その中心には白い小さな家が一つ。

「誰か、住んでるの？」

白い家に指を向けてチェシャ猫に問うと、彼は軽く頷く。

「白い兎が一匹」

そう短く言って躊躇無くスタスタと家の方へ歩き出した。あたしは迷ったけどその後に続く。

住んでるのが歌骨みたいなわけわかんない性格の相手だったら嫌だな。と思ったけど、その場に留まっててもしかたない。

近づくにつれて、家が思ったより小さくないことに気がついた。可愛らしい二階建ての洋風な家。クロが居たら喜びそうな外装だ。

その家の扉の前に人影を見つけた。家と同じく真っ白の服。いや、髪も肌も全て白い。白い家の壁に同化してたから初めは気がつかなかったんだわ。

「いらっしゃい、アリス。待っていたわ」

あたし達が目の前まで来ると、相手は可愛らしい声で挨拶した。両の手を白い大きなスカートの前で組み、首を微かに傾ける。その動作で頭に結んだリボンが揺れた。それは上に向かい、尖っていてまるで兎の耳のよう。

「白のチェシャ猫も、お久しぶりね」

「そうかもね。白兎」

あたしから視線をチェシャ猫に下ろして笑顔で彼女は告げる。チェシャ猫はそれにそっけなく答えた。

「白兎？」

しかし、チェシャ猫が呼んだ相手の名前が引っかかりあたしは反復する。それに対し少女はまたあたしに視線を戻し、こっくりと小

さく頷いた。
「そうよ、アリス。貴方が追いかけるべき兎よ。まぁ、でも、立ち話も何だから家の中へどうぞ」
彼女は手を口元に当てクスリ、と意味ありげな笑みを形作る。それからすぐに顔を逸らして扉のノブに手をかけた。扉が開き、手でどうぞ、と促される。チェシャ猫はまた迷うことなく家の中へ入っていった。仕方なしに後へ続いてあたしも足を踏み入れる。
なに、これ？
思わず唖然とする。家の中は何もかも真っ白だった。目が眩み、やや頭痛もする。後ろで扉が閉まる音が聞こえた。
「どうぞ、こちらへ」
促す声。先頭に立ち、白兎はあたし達を案内する。チェシャ猫は黙ったまま彼女の後ろについていく。あたしは必然的に最後尾になった。
そして全員が黙ったまま短い廊下を歩く。
真っ白い真っ白いリビングへ通された。白いテーブルにテーブル掛け。白いティーセット。白いカーテン。白い壁。何もかもが白い。あたしの今着てる服もチェシャ猫も白いもんだからその空間には全く色が無いように感じた。あるのは境界線の黒とあたしの肌の色、それと黒い髪のみ。
「どうぞ、お掛けになって」
白い椅子を二つ引いて、彼女は座るよう進めた。促されあたしもチェシャ猫もその椅子に腰掛ける。
彼女は三個のカップにお茶を注ぎそれぞれの前に置いた。その飲み物も白い。何なのか興味を引かれたが問う気にはなれなかった。彼女は、あたし達と向かい合う位置にある椅子に腰を下ろす。
「どうぞ、アリス。ロイヤルミルクティーはお好きかしら？」
白兎はまるで私の考えを読み取ったかのように出したお茶の答えを口にし、にっこり微笑んだ。しかし、ミルクティーにしても白すぎる気がする。もうちょっと灰色でも良いような……。

ちょっと、飲みたいと思えなかったので紅茶には手を触れず、落とした視線を彼女に戻す。
「ありがとう。嫌いじゃないわ。でも、あたし、貴方が何なのかとても気になっているの。白兎って、散々チェシャ猫が追えって言ってたやつでしょう？」
「白兎は、アリス。唯一、君達の世界とを行き来できることが許されている」
聞きたいことを遠まわしにはせずに、ずばっと訊いたら答えは横から返ってきた。チェシャ猫は紅茶に手をつけず白兎から視線を外さずに話す。
「だから、この世界にくるにはアリス。白兎を追ってこないと入れない。それに、この世界から出るなら白兎を追わなくちゃならない」
「そうよ、アリス。だから白兎を追えってチェシャ猫は言ったのよ」
チェシャ猫の言葉を途中で引継ぎ、まるで日常会話をするような口調で白兎は言った。
「なら、貴方に頼めばこのへんちくりんな世界から元の場所に戻れるのね？」
期待に胸膨らまし問うたあたしの言葉に、白兎はカップを口元へ運び、まっすぐあたしの目を見据えて微笑んだ。
「今すぐ、帰りたい？　アリス」
ゆっくりと一言一言が響くように聞こえた。
「……いいえ」
少し戸惑ったけど、はっきりと否定を口にする。
だって……。
「クロを見つけてから二人で帰るわ」
クロを一人こんなとこに置いてなんていけない。
あたしの答えに、白兎は笑みを湛えたまま立ち上がった。
何をするのだろう？
不思議に思って黙って見ていたら奥へ引っ込んでしまった。よく分からず、戸惑ってチェシャ猫を見やる。彼は何も喋らずに紅茶を

スプーンで掻き回していた。その動作はちょっと部外者面みたいで腹が立つ。何か言ってやろうと口を開きかけたら行き成りチェシャ猫は振り返った。

「アリス、白兎の言葉にあまり惑わされてはならないよ」

「え？」

その呟きにも似た言葉の意図が掴みきれず、小さく声を漏らしたがチェシャ猫は何事もなかったかのようにカップへ視線を返してしまった。

追求しようかとも思ったがそこに丁度白兎が戻ってくる。手には大きなトレー。その上に料理の載った皿が並べられている。それはどれも白い。あたしは思わず眉を寄せた。

「アリス。これからまた人捜し何て大変ね。少しここで休んでいくといいわ。疲れてるでしょう？　ご飯でも食べてからだって遅くはないわ。ねぇ、チェシャ猫？」

「そうだね」

けど返って来たのはマイペースな一言。チェシャ猫も小さく頷いて同意を示した。あたしはテーブルの上に置いた手と手を強く握り合わせる。いつもならクロを捜すのに急いでるからと即断ってしまうのだけど、この時は何故か、食べていかなくてはならない気になった。

「分かった。頂くわ」

あたしが短くそれだけ述べると白兎は嬉しそうに微笑む。そして、それぞれの前にトレーから料理を降ろした。白いスープに、白い……多分クリーム和えのスパゲッティー。湯気が微かに立ち、食欲をそそるいい香りがした。

「どうぞ、召し上がれ」

フォークとスプーンを料理の脇に添えてから自分の席に戻り、食べるよう進める白兎。あたしは素直に頷きフォークを手に取った。何故か少しも彼女に逆らう気が起きないのだ。ちょっと変な気持ちになりつつも、クルクルとスパゲッティーをフォークに巻きつける。

口に運ぼうとして隣のチェシャ猫が微動だにしてないことに気がついた。
「食べないの？」
「食べたいのは山々だけど……。僕は熱いものが食べられないんだよ」
そう言って今更紅茶を啜る彼。成る程、猫だけに猫舌なわけね。
「そういえば、そうだったわね。ごめんなさい、忘れていたわ」
白兎が口元を押さえながら、ふふっ、と小さく笑う。チェシャ猫は「別に」とだけ答えて空になったカップをテーブルに戻した。
「ところで、アリス。黒のアリスを捜しにどこまで行くつもりなの？」
「ハートの１２の城までよ」
問われたので答えてからスパゲッティーを口に入れる。ほんわりとクリームの味が口の中に広がった。美味しい。
そう言えば此処に来てから今までクッキーぐらいしか食べてなかったな。まぁ、仕方ないか。だって、何かしら食べるとあたし……。
そこまで思い出してはっとする。
そうだ、あたし、モノ食べちゃいけなかったんだ！
しかし、今更後悔しても遅かった。既に椅子は潰れて床が遠のいていく。頭が天井に当たった。
間違いなくあたし、巨大化してる！
メキメキと木の軋む音。食器の割れる音や、何か壊れるような音もした。けど、まだまだあたしの体は大きくなる。終いには手が足が部屋に入りきらなくて窓や戸からはみ出た。
「あらあら、大きくなったわね。アリス」
窓の外からのんびりとした白兎の声。いつの間にやら部屋から脱出していたみたいだ。何とか成長も止まったものの、窮屈で動けない。下手に動くと建物が軋んで壊れそうだ。
「どうしようかしら？　困ったわ。ねぇ、チェシャ猫？」
「さあね」

「うわぁぁああっ！　化け物ダっ！」
どう聞いても困ったようには聞こえない口調で呟く白兎。それに対するチェシャ猫の返答は急な叫び声で掻き消された。
「あら、ビル。帰ってきていたの。おかえりなさい」
「しゅ、主人！　白兎の主人！　あの化け物は何ダ！？」
どうやら新しい声は白兎の知り合いらしい。慌てた様子でやや声高だが男性のようだ。
「あれは、化け物じゃなくて……」
「化け物メ！　オイラが煙で燻り出してヤル！」
白兎が説明しようとする言葉を遮って、彼は大きく叫ぶ。そして、何か走ってくる音。
「あらあら、ビルってば意気込んじゃって」
白兎の声。いや、そんな暢気なこといってないで止めてよ。
「相変わらず、早とちりだね。白トカゲは」
それに合わせるようなチェシャ猫の発言。二人ともまったく止める気がないらしい。
「化け物覚悟ーっ！」
と、二人の会話に気をとられていたら、ビルの声が上から降ってきた。窓の隙間から梯子が見える。そんなのさっきは無かったから多分立てかけて、それを上ったんだ。
「ちょ、ちょっと待ちなさい！　あたしは化け物なんかじゃっえほっごほっ」
叫びかけて咽かえる。暖炉から灰色の煙が立ち上っていた。それをもろに吸い込んでしまったのだ。咽かえりすぎて涙が出る。
この～っ！　後で覚えてなさいよっ！
そんな闘志を胸に秘めつつも咽かえる以外何も出来ない。煙は更に室内へ侵食してくる。
何か喋ろうにも口を開くと煙を吸い込んでしまい、苦しくって言葉なんか吐き出せない。
「アリス、キノコを」

半ば混乱気味になっているあたしの耳にチェシャ猫の声が届く。窓の外とかそんな遠いところじゃなくてすぐ真横から。
「きゃあぁあああっえほごほっ！」
振り返った瞬間あたしは大きく悲鳴を上げて、それから盛大に咽かえった。
何故かって？
だって、視線を向けた先にはチェシャ猫が……首だけ横たわってんのよ！　突然じゃなくてもびっくりするわ！
「アリス、あんまり喋らない方がいいよ。煙を吸い込んだアリス。君は大変そうだ」
いつもと何も変わらぬ口調で抜けたことを言うチェシャ猫。
そんなの言われなくたって分かってるわよ！
目尻に溜まった涙も拭えず、あたしは心の中で盛大に叫んだ。でも、それが相手に聞こえてるわけもない。
「アリス、大丈夫。僕はアリス。君の心が聞こえる」
チェシャ猫が心の中で呟いた一言に答える。そういえば……そうだったわね。あたしはうっかり出会った当初のことを忘れていた。
「それよりも、アリス。キノコを食べて」
今までのことを思い出しながら、あたし何してるんだろ？　と、ちょっと感傷に浸りかけていたらチェシャ猫が催促するように言葉を放つ。
キノコ？
「芋虫がくれた、あのキノコ」
心の中で問うとすぐに答えが返ってきた。そう言えば、芋虫がくれたキノコ、片側を食べると大きくなって、反対側を食べたら小さくなるのよね。一度使ってからは左のポケットに入れっぱなしだわ。
けど、何故チェシャ猫がそのことを知っているのか不思議だった。チェシャ猫はあの時その場に居なかったはずなのに。
「アリス、僕は君の行ったことを全て知っている。知っている必要がある。けど、アリス。今はそんな話よりキノコを食べた方がいい。

燻製にされてしまうよ？」
　さらりと言ってのけるチェシャ猫。そんなチェシャ猫の言葉に追求したい部分は結構ある。けど、確かにそれは後回しにした方が良さそうだ。煙は段々と視界を埋めていた。
　あたしは急いで左のポケットに手を伸ばそうとして、はっとする。右の手は窓からはみ出し、左の手は窮屈に折り曲がっていた。用意に動かすことは出来ない。そう、両手がまるっきり使えない状態なのだ。
　ど、どうしよう？
「仕方がないからアリス。僕がとってあげるよ」
　あたしの心の呟きにそう答えて、チェシャ猫はひょこひょこと顎で這うように動き出した。
　物凄く異様であんまり見ていたくはない。
　第一、何で首だけなのよ。体はどうしたって言うんだか……。
「うん、口だけでも良かったのだけどアリスが怖がるといけないと思って。でも、体までだと狭すぎて入れないんだ」
　チェシャ猫が這うのを止めてわざわざまた、あたしの心の呟きに答える。成る程、ね。部屋はあたしの体で大半埋まってるんだから仕方ないといえば仕方ない。
　しかし、その頭だけで這って此処まできたのだろうか？　全然、気がつかなかったけど。
「猫は神出鬼没なんだよ。アリス」
　その呟きとともにチェシャ猫の頭が一瞬にして消えた。そしてすぐ、左ポケットの辺りに白い丸い物。頭だ。頭がそこまで瞬時に移動したんだ。更に何もないところへ手まで生えてくる。それがポケットの中からキノコを引っ張り出した。
　その光景にあまり驚いていない自分が居る。どうやら流石にそろそろ、異様な光景には慣れてきたらしい。ちょっと嫌だけど。
「はい、アリス」
　あたしの目の前へふよふよと空中を漂う手がキノコを持ってやっ

てきた。
ありがとう……。掛けてないほうを千切って口の中へ放り投げてくれないかしら。
溜息を小さく吐きながら、あたしは相手に心の中で話しかける。チェシャ猫の生首はポケットの辺りに転がったまま目をくりくりと動かした。
了解の合図らしい。
空中にもう一個手首から先の手だけが現れ、キノコの笠を引き千切る。それをあたしの口に放り投げた。キノコの欠片は外れることなく口の中へ吸い込まれる。小さすぎて味も何もなかった。
けど、飲み込んだ瞬間。どくんっと大きく心臓が鳴った。
ぐんぐんと天井が壁が遠くなっていく。その急激な変化には眩暈さえした。
縮みきるその前に白い何かがあたしを拾い上げる。チェシャ猫だ。今度はちゃんと全身がある。あたしは彼の手の平のサイズまで小さくなっていた。チェシャ猫はあたしを掴んだまま窓から飛び出す。
「あら、チェシャ猫。いつの間に中に？」
白兎の呑気な声。チェシャ猫は彼女の前に軽やかに着地した。あたしは、煙がないその場所で大きく息を吸い込む。空気が美味しく感じた。
「ついさっき、アリスを助けに」
「そのアリスはどこ？　見当たらないけれど」
チェシャ猫が答えると、また間髪居れず聞き返す白兎。チェシャ猫は黙ってあたしを握り締めたまま、白兎の目の前へ差し出した。
「あら、アリス。随分と小さく……」
「主人ーっ！　白兎の主人！　見て下サイ！　化け物を燻って家から追い出したヨ！」
白兎が何か言いかけた直後、後方から大きな声が飛んでくる。三人同時に振り返った。
そこには白いつなぎを着た白い二足歩行のトカゲがこちらへと駆

けてきていた。彼は煤まみれでやや全身が黒っぽくなっている。
こいつが、あたしを燻製にしようとした奴ねっ！
あたしはトカゲをきっと睨み付ける。しかし、彼はあたしに気がつかず、白兎の前で止まり、誇らしげに笑顔を浮かべた。白兎は手を組み、じっとトカゲを見つめる。
「ビル、貴方が必死になってくれたのはとても嬉しいわ。でも……」
途中で言葉を切ってあたしと、それから家を見た。そして視線を戻し、続ける。
「あんなことしたら家が煤だらけよ」
「それどころじゃないでしょ！　あたし、そいつのせいで死に掛けたんだから！」
家の心配しかしていない白兎の発言に、あたしは声を荒げた。三人の視線があたしに集中する。トカゲは驚いたように大きな目をより見開いた。
「下手したら二酸化炭素中毒、ううん、一酸化炭素中毒だってありえたんだから！」
「ニサ、イッサ？　美味しいモノ？」
「アリス、それは何かしら？」
あたしが憤ったまま更に続けた言葉に、トカゲと白兎が困惑げに首を捻る。
まさか、この人達……知らないの？
でも、ここは常識はずれなことばかり起こるし、おかしくはないかもしれない。
そう思ったら何だかどっと疲れた。チェシャ猫の手の中で脱力し頭を垂れる。
「ごめんなさい、アリス。ビルは良かれと思ってしてことなの。できることなら許してあげて欲しいのだけど」
そのあたしの行動を勘違いしてか、白兎があたしに視線を合わせて懇願してきた。
あたしは首を緩く左右に振り「もう、いいわ」とだけ返す。白兎

の肩に入っていた力が抜けたのが見て取れた。
「良かったわね、ビル。アリスは怒っていないそうよ」
「アリス！　コンナに小さいのがアリス！？　前に会った時は同じくらいダッタ！」
白兎がトカゲに振り返り嬉しそうな声で告げると、彼は驚いたように仰け反った。
「それに、さっきまで君が燻製にしようとしてたモンスターもアリスだよ」
そこへ追い討ちをかけるかのようなチェシャ猫の一言。トカゲのビルは更に仰け反り、困惑が激しいのか目をくりくりと回す。
「ビル。アリスはね、自分の大きさを自在に変えることが出来るのよ」
白兎が少し考えてから分かりやすい説明を口にする。ビルはそれで納得したのか、あたしを見て大きく頷いた。けど、何かこう間違っている。しかし、説明し直すのも面倒なので、あたしは静かに黙っていた。
「さて、アリス。ビルが大変申し訳ないことをしたわ。お詫びといっては何だけど、私に貴方の道案内をさせて頂けないかしら？」
白兎があたしに向き直って丁寧に頭を下げる。その申し出にあたしはどう答えて良いのか分からなくてチェシャ猫と視線を合わす。チェシャ猫はこっくりと頷いた。
「そうか。白兎ほど早くアリスを導けるものはいない」
「どういうこと？」
「私と一緒なら、全部の森を通らなくてもハートの１２の城までいける。そういうことよ、アリス」
ぽつり、と呟くように言ったチェシャ猫の言葉にすぐあたしは問い返す。それに白兎がチェシャ猫の代わりに答えた。
「それならオイラもお役に立てル！　１２の城なんてあっと言う間！」
「本当？　それなら是非お願いしたいところだけど……」

喜びながらひょこひょこと跳ねるビル。彼の言葉に期待が膨らみ白兎に確認の言葉を投げる。彼女は首を縦に振った。
「もちろんよ。でも、アリス。一つお願いがあるの。寄り道してもいいかしら？」
「寄り道？」
言葉の一部をオウム返しに口にすると、彼女はもう一度小さく頷いた。
「えぇ。ダイヤの１０の森の屋敷に住む公爵夫人を女王様の下にお連れしなくてはならないの」
成る程。彼女にも城へ行く用事があるわけね。どっちがついでかは分からないけど、何度も同じ場所を行き来したくない気持ちは判る。
「それは、時間が掛かるの？」
だから、譲れない点に対しての質問だけしてみる。彼女は笑顔を浮かべて緩く頭を横に振った。
「いいえ。全部の森を通過して行くより断然早いわ」
「なら、全然構わないわよ。案内、よろしく頼むわね」
「ヨシ！　じゃあ、早速扉を開けヨウ！　主人」
あたしの言葉が終わると同時に、ビルが白兎の腕を引っ張り、張り切ったように言う。白兎はそれに対し、笑みを張り付かせたままビルの前に手をかざした。
「ビル、１０の森まで私達歩いていくわ。公爵夫人に話もつけなくてはならないの。少し時間が掛かるから、貴方は家の中を掃除してから追いかけてきて頂戴」
そして、彼女は人差し指だけを残してたたみ、ビルの鼻を緩くツン、と突く。ビルはたじたじとした様子で小さく頷いた。
「話はついたかい？　白兎」
「えぇ、チェシャ猫。大丈夫よ。行きましょうか、アリス」
チェシャ猫が頃合を見計らって白兎に声をかける。彼女は振り返りチェシャ猫に笑いかけてから、あたしの小さな手を摘むように掴

んだ。あたしはそれに頷いて「えぇ」と、答えを返す。
「白兎、アリスは僕が連れて行く」
「あら、そう？　チェシャ猫も一緒なのね。なら、遅れずについてきて下さいな」
チェシャ猫があたしから白兎の手を退けて、淡々と言い放つ。
何か実はあまりチェシャ猫って白兎のこと好きじゃないんじゃないだろうか？
そう思わせる行動。しかし、白兎はそれに気分を害した様子はなく、笑みを浮かべたまま応答した。
「じゃあ、ビル。行ってくるわ。なるべく早く追いついて頂戴」
「モチロン！　主人、気をつけテ。掃除が終わったら１０の森に向かうヨ」
白兎が家に視線を向けて和やかに言う。ビルは大きく頷くと、すぐに家の中へと引っ込んでいった。
「では、行きましょうか」
そういうと同時に彼女は軽やかなステップで家とは反対の方向へ歩き出す。が、しかし、その次の瞬間には彼女の姿自体が消えていた。
「アリス、しっかりと掴まって」
困惑するあたしをチェシャ猫は自分の頭の上に乗せる。それから体勢を低くして四つん這いになった。
それから、すごい風圧。吹っ飛ばされそうになって慌てて耳にしがみ付いた。
多分、凄いスピードで白兎を追っているんだろう。
１０の森まであたしがしがみ付いていられるか……それが疑問だけれど、何とか次のステップに行けそうね。
この世界から出る方法もあるみたいだし、早くクロを見つけなくちゃ！

魚の夢　よくきたな、アリス

よくきたな、アリス。
だかしかし、アリス。
お前はまだ此処に来るには早すぎたようだ。

まだ、お前は全てを取り戻していない。
まだ、行くべき場所がある。
まだ、思い出すことがある。

まだ、出口を探すには早いのだ。
アリス、お前が望むなら出口は消えるだろう。
だが、アリス、よく考えろ。

己が何をしたいのかを。

アリス……。

全てを知らぬうちに
全てを決めぬうちに
この塔へ来てはならなかったのだ。

アリス、私達全てのものはお前の幸せを望む。
しかし、アリス。唯一人だけそうではない。
気をつけろ、アリス。
唯一人のその者は既に動き出している。

アリス、城へ行け。
そして知るのだ。

全てのことを。

十の夢　地底を泳ぐ者（前書き）

新たな事実を知り、順調に１２の城へ向かう白のアリス。
しかし、水の中に引き込まれてしまった黒のアリスはというと……。

十の夢　地底を泳ぐ者

冷たい水滴が頬に当たる。頭が痛い。何も分からない。ただ、ぼんやりしながらうっすらと目を開けた。

ワタシはどうしてたのかな？

意識が混濁から抜け出してきて、自分自身に問い掛ける。薄暗い石造りの天井を眺めながら考えた。

そうだ、ワタシは１３の塔に行こうとして……川に……。

そこまで思い出して、がばっと上体を起こす。

「ここ……どこ？」

不安げな自分の声が小さく開いた口から漏れた。

ぴちょん、ぴちょん、と水の滴る音。天井の石と石の間を伝い、同じく石でできた地面へ落ちていく。今まで見たことのない場所だった。硬い灰色の石の壁で四角い部屋のようになっている。小説とかで出てくる牢屋を連想させられた。

背筋がぞくりとして、寒い。ワタシの服が濡れている事に気がついた。

「チェシャ猫さん？　月さん？」

ワタシは急に怖くなって、さっきまで一緒だった二人の名前を呼ぶ。けど、ワタシの声はただ響くだけで、どこからも応答は返ってこなかった。

心細さが恐怖を増幅させる。

「どこ……行っちゃったの？」

ぎゅっと濡れた服のスカートを握り締め、震える声を絞り出す。泣き出せば助けがくるかな、と漠然と思った。その時、ふと、水の滴る以外の音を耳が捉えた。何か濡れた布みたいなものを引きずる音。

ワタシは不安で身を硬くする。その音の正体が分からないから。その音を出している相手が、よく知った人物であることを願った。

音が近づいてくる。
四角く区切られた壁の向こう側まできたのが分かった。影が見える。そして、白い……足。人間の、だけれど子供のもののように小さい。
「誰？」
その足のサイズに見覚えがなくて、ずりながら後退し、掠れた声でようやくそれだけ問えた。ぴくり、とその足が震える。
「アリス……目が覚めた」
そのまま相手は動かないで喋った。聞いたことのない声だ。何か口の中に入ってるのかもごもごとはっきりしない感がある。
「貴方、誰なの？」
それ以上何も言わないし、動かない相手に、ワタシはもう一度同じ質問を投げかける。すっ、と足が引っ込んだ。そしてまた、あの引きずるような音。今度は離れていく。程なくして、また水の滴る音しか聞こえなくなった。
何が何だか分からなかったけど、どっと体の力が抜ける。
今のは誰だったのかしら？
ただ、ワタシが目覚めたことを確認してから何処かへ行ってしまった。
それは、何故？
自問自答する。でも、何かを呼びに行ったか、取りに行ったか……ワタシの頭じゃそれぐらいしか想像できなかった。
ここで待ってれば戻ってきてその何かが分かる。けど、怖かった。話に出てくるこういう場面じゃ大抵良い事はない。人を食べる怪物が出てきたり、変な拷問器具で痛い目に合わされたりするのが大半だ。
じんわりと手に冷たい汗が滲む。ワタシはよろつく足で立ち上がった。怖くてこんなところには居られない。
チェシャ猫さんや月さんを見つけなくっちゃ。
そう、心の中で呟いて壁伝いに歩き出す。服がすごく重かった。

濡れたままだからだ。水を吸っていつもの倍ぐらいの重さになってる。
神経を尖らせて耳を澄ませながら歩いた。いつ、あの誰かが戻ってくるかもわからない。
四角い部屋みたいなところ抜け出してやたらに入り組んだ通路を進む。怖くて泣き出したいのを堪えていた。泣き出してしまったらあの誰かに居場所が分かっちゃうから。
できることならお姉ちゃんに迎えに来て欲しかった。でも、それは無理。お姉ちゃんはきっと、今ワタシがこんなところに居るなんて知らない。
お姉ちゃんから絶対に離れちゃいけなかったんだ。
そう強く思う。そして、その言葉が何故か何度も頭の中で繰り返された。
ワタシは足を止める。不思議な気持ちになっていた。お姉ちゃんと離れてしまった今、お姉ちゃんがこのまま何処か遠くへ行ってしまいそうな、そんな感じ。
そう思ったら心臓の鼓動がトクトクと早くなった。そして、ぼんやり何かを思い出してくる。
引き止めることが出来ないワタシ。
ずっと一緒に居たのに。
ずっと離さなかったのに。

離れていった。

お姉ちゃんが手の届かないところへ。
それは戻らない。
取り戻せない。
取り戻したい。
「アリスっ！」
急に聞き覚えのあるワタシを呼ぶ声が耳に届いた。はっとなって

顔を上げる。ワタシは知らぬうちにへたり込んでいた。胸元の服を強く掴んでいた手の力が緩む。心臓の音も徐々に落ち着いていった。
「アリス、捜したんだよ！　やっとみつけた！」
「月……さん」
駆け寄ってくる相手の姿を見て、安堵の溜息とともに彼の名を口にした。彼はワタシの目の前で立ち止まり、ワタシの顔を覗き込んでくる。ワタシは力なくだけれども笑ってみせた。
「疲れているみたいだね。大丈夫？」
そう言って月さんはワタシの頬についた短い髪を横へ退ける。ワタシは口を開かず小さく頷いた。さっき思い出しかけていた何かは、もう奥へ引っ込んでしまっている。とても気になった。すごく突っかかるものを感じたから。でも、思い出してはいけないと、ワタシの何かが警告を鳴らす。
その時、あの布を引きずるような音が耳に届いた。体が強張る。ワタシは座り込んだまま月さんの服を強く握った。
「アリス？」
月さんは不思議そうに首を傾ける。ワタシは近づいてくる音の方を黙って凝視していた。月さんがワタシの視線を辿り遠くを見やる。彼の長い灰色の兎の耳がぴくぴくと動いた。
「あぁ、アリス。あれは……」
――っ！
途中から月さんの言葉が聞こえなくなった。代わりに自分の息を呑む音が頭に響く。
布を引きずるような音とともに通路から姿を現した異様なイキモノに思考回路は真っ白になった。
それは魚。まさしくそのもの。ずんぐりと人並みに大きくて、胸ヒレの部分から腕が、腹ヒレと尻ヒレの中間辺りの両脇に足が生えていた。その足は小さく子供のもののよう。あの四角いところで見かけたのはこれだと確信できた。体の色は灰色で鱗が光っている。
そして、ソレは人間の服を着ていた。月さんが着ているものと

同じような黒い服。でも、ズボンはなくて上着だけ。しかも、サイズが合っていないのかズリズリと引きずっていて、その擦れた部分はほつれ、ボロボロになっていた。
月さんが魚に向かい何か言っている。でも、何を言っているのか全く分からない。パニックになっているのか外の音が一切聞こえなくなっていた。
魚が止まることなく近づいてくる。多分、ワタシは叫んだんだと思う。怖かったから。
近づかないでって。
月さんがワタシの肩を掴む。口が動いてるのが見えた。でも、何を言ってるのか分からなくて、夢中で彼の手を払い退ける。月さんは驚いた様子でまじまじとワタシを眺めた。
その様子が、胸の奥の何かを呼び覚ます。
ワタシを見ないで！
ワタシじゃないの、お姉ちゃんを見て！
ワタシはいいの！
お姉ちゃんが、お姉ちゃんがっ
「アリス、落ち着け。大丈夫だ」
ふと、頭の中に届く聞き慣れた声。安堵感で全身の力が抜ける。恐怖も一緒に何処かへ行ってしまった。気がつけば両肩に黒い手袋。後ろからワタシを支えるようにして彼が居た。
「チェシャ猫！　アリスは、どうしちゃったんだ？　まるでオレの言ってることを理解してくれないんだよ！」
月さんが、ワタシの後の彼に困った様子で問い掛ける。その声が水のようにすっと体に滲みこんだ。そこでやっと音まで戻っていることに気づく。徐々に意識が落ち着いて、冷静に思考回路を巡らせることができるようになってきた。
「チェシャ猫さん、月さん……。良かった。無事だったのね」
チェシャ猫さんが月さんに答えを返すより早く、ワタシは小さな呟きを漏らした。二人の視線がワタシに集まる。

「アリス……。落ち着いたみたいだな。来たことのない場所に一人で混乱したんだろう」
彼のフードの方の口端がニヤニヤと大幅に釣りあがる。喜んでいるようだ。彼は後半を月さんに向かって告げた。月さんも一息吐き出し胸を撫で下ろす。
「みたいだね。アリス、心配要らないよ。ここは危険なとこじゃない。ちょっと陰気で暗いけど、ね」
「そうなの？　ワタシ、無理やり水の中に引き込まれたから怖くて……。ねぇ、ワタシを川から引っ張ったのって何なの？　それはどうしたの？」
話しているうちに段々あの時の恐怖が甦って早口になる。それに対し、チェシャ猫さんが「大丈夫だ」と囁いて、優しくワタシの頭をポンポンと叩いた。月さんがとある方を指差す。
「ちょっと、せっかちな彼等がね。アリスを早くお迎えしたくてオレが説明する前に君を無理やり招待したんだ」
月さんの指の先には例の魚。魚人、と表現する方が正しいかもしれない。それはワタシから隠れるように壁に半身を埋めていた。伺うように大きく丸い瞳はずっとこちらを向いている。
「でも、大丈夫！　オレが言い聞かせておいたからさ！　怖がらなくたって大丈夫だよ」
胸を逸らしながら月さんは、とん、と胸を叩く。その姿が妙に頼もしく、そしてちょっと可愛く思えた。ワタシは頷き、ゆっくりと立ち上がる。いつまでも、チェシャ猫さんに寄りかかっているわけにもいかないから。
「ありがとう、月さん。でも、何であの人達はワタシを此処へ招待したがったの？」
「それは……」
「アリス、ここ通って、１２の城、行く」
魚人さんを眺めながら問うと、月さんはもったいぶるようにそこで言葉を止めた。しかし、魚人さんがゴボゴボと月さんの言葉の続

きと思われる内容を口にする。
「ちょっと！　オレが言おうと思ったのにっ！」
「アリス、不安、除く。早く、私達の、長、会う」
月さんが憤慨して、ひょんっと一跳ね魚人さんの前に立ち唇をひん曲げる。しかし、魚人さんは抑揚のない片言言葉でそれに答えた。それはどうにもかみ合っていないように聞こえる。
「ちぇ、これだから誰かしらに仕えてる生き物は融通が効かない上に、話が通じなくて困るよ」
月さんは呆れた様子で溜息とともに肩を竦めた。チェシャ猫さんがワタシの横に立ち、魚人さんの方を見据える。
「いや、奴の言うことは尤もだ。アリスの不安を取り除いて、早く執事達の長に会わせる必要がある」
チェシャ猫さんのその言葉に月さんは口を尖らせながら振り返った。それでも、特に文句を言うでもなく、頷き同意の意を示す。そんな二人を魚人さんは交互に一瞥すると急にワタシに向かって無造作にドスドスと近寄ってきた。思わず身を引いてしまう。
「アリス、行く。早く」
そういって胸の辺りにぴったり押し付けていたワタシの手首をサッ、と掴んだ。
ぬるり、とした感触。全身が一瞬にして総毛立つ。釣り上げたばかりの魚を無用心に鷲掴みしたような、そんな感覚。いや、掴んでる方がまだマシ。だって、自分の意思で掴んでるならすぐにでも手を離せるもの。その感触からすぐ逃げ出せるんだから。けど、今はその感触に手首を掴まれている。逃げ出したいのに逃げさせない。
ワタシは無意識のうちに腕を大きく振っていた。しかし、思った以上に相手は力が強い。全然抜け出せる気配はない。
「アリス、暴れる、いけない」
片言の言葉が耳に届く。どこか嗜めるような雰囲気がかもし出されていた。しかし、ワタシはそれどころじゃない。
ただ、気持ち悪い。という思いだけが先走っていた。

「放してやってくれないか。アリスは俺が連れて行く」
チェシャ猫さんの声。それと同時に手首から悪寒が剥がれた。チェシャ猫さんが魚人さんの白い小さな手首を持っている。ワタシはほっとして小さく息を吐き出した。
「なら、いい。アリス、ついて来る」
すっと、チェシャ猫さんの手から自分の手を引いて魚人さんは踵を返した。月さんがワタシの隣までやってくる。
「アリス、どうしちゃったのさ？　たかだか腕を引っ張られたぐらいで、すごい怯えた表情しちゃってさ」
「月さん……。ごめんなさい。ワタシ、あまり魚が好きじゃないの」
「あんまり？」
不思議そうにワタシの顔を覗き込んで問う月さん。ワタシは歯切れの悪い口調で答えた。チェシャ猫さんが隣で小さく呟く。しかし、彼の言うとおり「あんまり」というレベルではなかった。芋虫よりは平気だけどあんまり見たくなし、ましてや触れるのなんか絶対に嫌。あの人間の子供みたいな白い手が何で魚のヌメヌメした感触と同じだったのか不思議だけど、考えると感触を思い出して気持ち悪いので深く考えるのはやめた。
けど、何故、チェシャ猫さんはワタシが魚を嫌いなこと、知ってるんだろう？
訊いて見たくなって彼を見上げた。それと同時に腕を引かれる。
「行こう、アリス。見えなくなる」
その声に質問を飲み込んで、チェシャ猫さんの視線の先を見た。魚人さんが既に角を曲がろうとしている。
「本当だ！　行くとなったら早いんだからさ。見失ったら、迷ってしまうよ。アリス！　此処はすごく入り組んでるんだ」
慌てて月さんはそう捲くし立てると飛ぶように駆け出した。ワタシも釣られるように足を一歩出す。けど、すぐにチェシャ猫さんがワタシを片手で持ち上げた。そのまま背中に乗せて駆け出す。
「ちょ、チェシャ猫さんっ！」

「アリスの足では追いつけない」
ワタシが叫ぶように相手の名を呼ぶと、彼は淡々とそう返してきた。でも、魚人さんはすぐ其処に迫っている。月さん既に追いついて、隣を歩いていた。どうみたって魚人さんの動作はワタシと同じくらいかそれ以下にしか見えない。
急に魚人さんが跳ね上がった。通路の脇に横たわる黒い水の中へ飛び込むための動作だったみたい。
ポチャン、と小さな音。水は通路に沿うようにどこまでも入り組んで広がっている。まるで用水路のようだと思った。
ふっ、と水面に魚の頭のヒレだけが露出する。それがすごいスピードで動き始めた。月さんもチェシャ猫さんも迷わずそれを追いかける。
確かにこのスピードじゃいくら頑張って走っても追いつけないわ。
それから、しばらく入り組んだ通路を右へ左へ魚人さんを追いかけ進んだ。
その間に、チェシャ猫さんは他の誰にも聞こえないぐらいの声で、呟くようにワタシへ告げた。
「アリス。ここは、アリス。あんたの記憶の根底にとても近い場所だ。ちょっとした刺激が記憶を震えさす。だけど、アリス。まだ思い出すには早い。長の話をちゃんと聞いてやってくれ」
それに「どういうこと？」と問い返しても彼はそれ以上何も話してくれなかった。
辿り着いたのは四角い部屋のような開けた場所。部屋の中央あたりに四角く水が流れ込んでいる窪みがある。そこで、水の通路は終わっていた。
魚人さんが濡れた体を黒い水の中から引き上げる。ぴちゃぴちゃと水が垂れ、肌はヌラリと輝いていた。魚人さんはそのまま振り返りもせずに歩き出す。その先には上に登るための階段。
チェシャ猫さんはワタシを下ろす気配もなく、そのまま魚人さんの後に続く。そしてワタシ達の後ろへは月さんが回った。

階段は暗く、どこまでも続くような気がする。でも、そんなにしない内にやや灰色の柔らかい明かりが見えてきた。そんなにと言ってもワタシが歩いて登っていたら疾うにばててていたと思う程の距離。
全員黙ってただひたすらに登る。光は太陽のように階段の一番上から降り注いでいた。
明かりが放たれている場所の正面に立つ。光が強すぎて近づくまで分からなかったけれど大きな扉があり、それが左右に開いていた。その先は光に満ちた四角い部屋。その部屋の中は水路に囲まれ壁に掛けられた無数の何かが煌々と輝いている。
魚人さんが急に両手両足を揃え、背筋を伸ばした。
「長！　アリス、きた！」
そう高らかと宣言するように叫ぶ。それから何故かこくりと頷くような動作をして、水路の中へ飛び込んでしまった。
チェシャ猫さんがワタシを背中から下ろす。月さんは前へ進み出た。光の中、目を凝らすと、奥の方に誰かが居る。大きな椅子に座っているように見えた。
「さあ、執事長。アリスを連れてきたよ。これで、１２の城まで案内をしてもらえるかな？」
月さんが両手を広げ大げさな口調で言う。影が動いた。立ち上がったみたい。そしてこちらへ近づいてくる。徐々に見えてくる姿に小さく息を呑んだ。
相手は黒の燕尾服を着ている。月さんや帽さんとはほんの少しデザインが違うけれどほぼ同じもの。
影の相手もまた魚だった。でも、さっきの魚人さんとは明らかに違う。すらりとした手足、体。燕尾服も見事に着こなし、白い手袋までつけている。人間により近い姿。しかし、顔の皮膚はのっぺりと魚の鱗で出来ていて、耳や、頭のてっぺんにヒレが生えている。
相手は月さんを通り越してワタシの目の前までやってきた。怖くなってチェシャ猫さんの服を強く掴む。
相手はゆっくりと礼儀正しく頭を下げた。ワタシは固まったまま

それを凝視し動かない。誰かが何かしら喋ってくれるのを待った。
「よくきたな、アリス」
低い男性の声がこだまする。それは目の前の執事長と呼ばれた魚人さんの声だった。初めの魚人さんの喋り方とは違いゴボゴボとくぐもった様な響きはない。
「だかしかし、アリス。お前はまだ此処に来るには早すぎたようだ」
彼はそのまま言葉を続けた。しかし、何故、彼がそう言ったのかワタシには分からない。
此処が何なのかワタシは殆ど知らないわけで。だから、何故、早すぎるのかも想像すらできない。
反応に困って黙っていると彼はワタシからチェシャ猫さんへ顔を向けた。
「チェシャ猫殿。何も話してはいないのか？」
「少し。だけれど、俺はもとより、多くを語れない」
チェシャ猫さんが淡々と答えると執事長さんは月さんの方を振り返る。月さんは暇そうに両手を頭の後ろで組んで口を曲げ、こちらを眺めていた。執事長さんが問う前に月さんは口を開く。
「オレは説明ってあんまり得意じゃないんだ。それに、君達ほど詳しいわけじゃない」
後ろで組んでいた手を解き、わざとらしいぐらいに肩を竦めて見せる。そんな月さんの言動に気分を悪くした様子もなく、執事長さんはまたワタシに向き直った。それから一歩ワタシに近づく。
「なれば仕方ない。アリス、私が説明しよう」
ワタシは少々後退りながら激しく首を縦に振った。あんまり近づいてきて欲しくないからだ。
「いいか？　アリス。此処は世界の中心、スペードの１３の塔の真下なのだ」
ワタシの気持ちを察してか否か、彼は、一歩下がり腕を組んで気難しそうな声色で話を始めた。その言葉にワタシは最初の目的に地着いていたことを知る。

「此処は水の溜まり場で、全ての森、城を囲う川はここから繋がっている。川の出発点であり終点であり交わる場所なのだ。そして、此処から……と、その話の前に、私達、執事の種族の話をしなければなるまいな」

「執事、の種族？」

ワタシはあまりの違和感に思わず小さく呟く。執事長さんが口を閉じワタシをじっと鋭い瞳で凝視してきた。慌てて左右に頭を振る。話の腰を折ったことで怒っていないか、すごく不安になった。

でも、執事って確か、役職名のはずよね？　種族ってどういうことかしら？

「話を続けるぞ？　我々はこの世界の主に仕える者だ。そして、全てのモノの監視を担う。川はその為に世界の中心である塔から全ての森や城に延びているのだ。そう、此処から私達は川を移動する」

世界の、主ってハートの女王様かしら？

そう訊いてみたかったけれど、また顔を近づけられたら嫌だからワタシは口を硬く閉ざしていた。

彼が言いたいのは要するに、この塔から流れる川は森と城全てに繋がっているということだと思う。けど、それじゃあ、何でワタシが此処にくるのが早すぎたのか、と言う説明にはならない。

「さて、先程までの話で分かるように此処は世界の中心だ。アリス、実は此処で全ての記憶を取り戻せる。何故かと言えば、全てが繋がっているからだ」

「えぇ！」

執事長さんから告げられた言葉に思わず大きな叫びに似た声をあげる。それを知るにはあまりに唐突過ぎた。

「だがしかし、その為にはもう一人のアリスの力が必要であり、また、この世界の理を知っていなければならない」

ワタシがあまりの驚きに放心して何も言えないことを察してか彼は話を続ける。たくさん質問したいが、それは口をついてくれない。黙って、そのまま聞くことになった。

「理とはすなわち真実。それはまだ、アリス、お前が取り戻していないもの。そしてアリス、お前の決断に不可欠なもの。アリス、お前は全てを知らぬうちに、全てを決めぬうちに、この塔へ来てはならなかったのだ」
真剣な語り方。しかし、どこか怒気を含んでいるような強い口調。そして、視線はいつの間にか天井に向けられている。ワタシは怖くなってチェシャ猫さんの後ろに隠れるように身を引いた。
「執事長、そう熱くなるな。アリスが、驚いて怯えている」
チェシャ猫さんの言葉に、はっとした様子でこちらに視線を下ろす執事長さん。口元に拳を添え、咳払い一つした。
「すまない。しかし、アリス。それは本当なのだ。アリス、お前は城へ行く必要がある」
「大丈夫さ、執事長。先に言ったろ？　オレ達はアリスと１２の城に行くために此処に来たって」
何処か懸念するように言う執事長さん。それに月さんは陽気な口調で横槍をいれた。チェシャ猫さんも月さんの言葉に同意を示し、こっくりと頷く。その二人の反応に執事長さんは小さく息を吐いた。
「そうであったな」
「あはは、忘れてたの？　執事長てば、もう歳なんじゃない？」
溜息と共に漏れた静かな呟き。そこへ月さんはふざけた口調で失礼な茶々を入れる。でも、執事長さんは怒る様子もなく、むしろ緩かな笑みを口元に刻んだ。
「そういうことを言っているならばお前だけ此処に置いていくぞ？」
「ちょっ！　待ってよ、冗談だって！」
さらりと、執事長さんの口をついた言葉に月さんは大慌てで跳ね上がる。それを横目で見ながら執事長さんは口元押さえ笑いを堪えてるような様子で「冗談だ」と返した。ワタシも釣られて微かに吹き出す。肩の力が抜けて気が楽になった。チェシャ猫さんは尻尾を燻らせ黙っている。けれど、フードの端がヒクヒクと伸びたり縮んだりしてた。多分、彼も笑ってるんだと思う。

「アリス。もう何か訊きたいことはないか？」
笑いが一段落つき収まると、チェシャ猫さんがにんまりフードをワタシに向け問いを口にした。急に訊かれても何も思いつかない。さっきまで聞き手一方だったしね。それに、ハートの１２の城へ行くっていう目的は何も変わっていないもの。それだけ分かってれば今は十分だった。
首を横に振り意思を伝えると、チェシャ猫さんは視線を執事長さんへ移動する。
「私は……そうだな。最後に一つ、忠告をしておこう。アリス」
少し考えるように視線を落としたけど、執事長さんはすぐワタシを真っ直ぐと見据えた。ワタシは小さく首を縦に振る。
「いいか？　アリス。私達全てのものはお前の幸せを望む。それを覚えておいて欲しい。しかし、アリス。唯一人だけそうではない者が存在するのだ。それが何者かは私達は誰一人言えない。だが、アリス。気をつけろ。唯一人のその者は既に動き出している」
「それは、言い過ぎだ」
段々と口調が勢いづいてくる執事長さん。そこにチェシャ猫さんの冷たい声が割って入った。その声色は威嚇している猫を想像させる。執事長さんは髪もないのに掻き揚げるような仕草をして、ゆっくりとため息を吐き出した。
「すまない。アリス、今の言葉は深く考えないでくれ。とにも気をつけて欲しい。それが言いたかっただけなのだ」
落ち着かないような様子で執事長さんは告げ、ワタシの答えを聞かず背を向ける。それから、彼は服の袖から小さな鈴を取り出し左右に揺らした。軽いチリン、チリンという音が部屋に木霊する。
次の瞬間、静かだった部屋を囲う水に波紋が立つ。そして、四隅から初めに見た魚人さんと全く同じ姿の生き物が現れた。身を硬くしてチェシャ猫さんに引っ付く。
「彼等に案内させよう。乗り心地は悪くないはずだ」
乗り？

思わず頬を引きつらせて問いかけようとした。けど、それより早くワタシの身体は持ち上げられる。手の平にぬるっとした感触。
「いやぁあああっ！！」
そこでワタシはほぼ無意識に触れたものを突き飛ばしていた。壁に何か柔らかいものがあたったような鈍い音。恐る恐る確認すると、魚人さんが一匹、水の中に沈んでいくところだった。更に、全員の驚きを隠していない視線がワタシに四方から突き刺さる。
「ご、ご、ごめんなさい！　ワタシ、ぬ、ヌルヌルしてるもの苦手なのっ！」
居た堪れなくたって、両の手を頬に当てながら賢明に弁護する。恥ずかしくて、途中から口はもごもごとあまり動かなくなっていた。もう、自分でも何を言ってるか良くわからない。
「分かっていたことだ、アリス。あんたは俺が運ぶ。心配は要らないし、気に病むこともない」
チェシャ猫さんがワタシの肩にポン、と手を置いた。そして、冷静な一言。他の全員がその言葉に同意するように頭を縦に振る。
「あ、ありがとう」
「さ、んじゃ、話もまとまったことだし、さっさと行こうぜ！」
ワタシが小さな声で礼を述べると、それを掻き消すように月さんの声。彼は既に一匹の魚人さんに跨り始めていた。チェシャ猫さんがワタシを持ち上げて背中に乗せる。それから、空いている魚人さん一匹の上へ軽やかに飛び乗った。
「じゃあ、執事長。行って来るよ！」
「世話になった」
月さんとチェシャ猫さんが二人合わせて執事長さんに声を掛ける。彼は緩やかな笑みを称えたまま静かにこっくり頷いた。
「あぁ、すべき事をしっかりとな」
そう、執事長さんから答えが返ってくると同時に、乗り物となっている魚人さんたちが動き出す。水の中へ勢いよく飛び込んだ。ワタシは執事長さんに声を掛けようと思って口を開いてたから水を思

いっきり飲み込む。苦しくてチェシャ猫さんの肩に掴まっている力が緩んだ。
このままずっと水の中を進むの？
そんな不安が頭を過ぎった瞬間、空気が肺へ飛び込んできた。急過ぎて思わず咽返る。
「アリス、大丈夫？」
「え、えぇ。……大丈夫、落ち着いたわ。それより、水に潜る時は言ってくれないとワタシ水飲み込んじゃうんだけど」
月さんの声が前方から飛んできた。ワタシは深呼吸し落ち着いてからゆっくりと答える。そうすると彼は自分が乗っている魚人さんに顔を寄せ、なにやらごにょごにょと話し出した。そして、暫くしてからこちらを振り返る。
「大丈夫だって、アリス！　もう、潜る必要のないところを通るってさ！」
その言葉にほっ、と息を吐いた。潜らないならそっちのほうがいい。水の中は息も出来ないし、服もびしょ濡れになるもの。
スカートを片手で何とか絞りながら月さんに「ありがとう」とお礼の言葉を述べた。彼はウィンクを一つ投げて寄越す。そしてまた前方に顔を戻すと、そのまま乗っている魚人さんとの会話に興じ始めた。チェシャ猫さんはワタシを背中に乗せたまま振り向きもせずだんまり。
１２の城に着くまでちょっと退屈そうね。でも、ちょうど良いから少し休んじゃおうかな。
そう思いながら重い瞼を擦り、欠伸を噛み殺す。睡魔は静かに歩み寄ってきていた。

豚の夢　ね、ね、アリス

ね、ね、アリス。
アリスはぼくを食べにきたって本当？
お母様がね、いつも言っていたんだ。
アリスが来たらぼくは丸焼きにされてお皿の上に乗せられちゃうんだって。

でもね、アリス。
それが、アリスの、お母様の、喜びならぼくはとても嬉しい。

だからアリス、早く来て。
だからアリス、きみを待ち焦がれる。
だからアリス、ぼくを食べて。

それは、お母様の最大の望みだから。
それは、生まれたことを望まれないぼくの最大の願いだから。
それが唯一ぼくのお母様を喜ばせる方法だから。
アリス、どうかお願い。

ぼくを食べて。

十一の夢　公爵夫人の屋敷（前書き）

スペードの１３の塔の地下を通りハートの１２の城に向かう黒のアリス。

一方、ダイヤの１０の森へ白のチェシャ猫、白兎と共に向かった白のアリスは……。

十一の夢　公爵夫人の屋敷

「まったく。何でこんなことになるのかしら……」
鬱蒼と茂る草を掻き分ける手と足を止め、深い溜息と共に肩を落とす。今、あたしは森の中で一人だ。近くにチェシャ猫も白兎も居ない。何故か、その答えはすごく簡単。
あたしはチェシャ猫の上から移動中に落下した。ただ、それだけ。
それから、チェシャ猫も白兎もあたしが落ちたことに気がつかなかった。ほんと、それだけよ。
何でもっとしっかり掴まっておかなかったんだろう。とか、何でチェシャ猫も白兎も気がついてくんないのよ！　とか、今考えてたって仕方ない。
起こったことは戻せないんだし、考えたところでイライラするだけ。落ちた時に怪我をしなかっただけマシと思うしかない。
「あれー？　ちっさいアリスだぁ」
頭を振り、さあ！　いざ、二人が去った方向へ進みなおそう！
と意気込んだ瞬間、幼い子供特有の甲高い声と共にふわりと体が空中に浮いた。背中のリボンの辺りを摘み上げられたようで、あたしの体はだらりと二つ折りになる。そして、あたしの視界を大きな薄い灰色が埋めた。
あたしは初め、それが豚か何かの動物だと思った。けど、そうじゃない。相手はでっぷり太った幼い子供だった。今まで会った誰よりも幼い。しかし、今まで会った誰よりも肥えている。
「親の顔が見てみたいわ」
思ったことがついポロッと口から小さな音となり零れた。相手は無いとしか思えない首を小さく捻る。
「アリス、お母様に会いにきたの？」
「い、いいえ。そういうわけじゃないのよ。それより、貴方、誰？　あたしを知ってるみたいだけど」

相手の勘違いを柔らかく否定して、でも詳しくは述べず話を別の方向へ逸らす。相手にわざわざさっきのは悪態です、何て告げられるわけないし。

そうこう考えている間、相手は灰色の大きな目であたしをじっと覗き込んでいる。黙って返答を待った。

「ぼくは、アリス。ぼくはコウシャクフジンノムスコ。アリス、きみのことはだれだか知ってるよ。ぼく、お母様に写真を見せてもらったことがあるんだ」

にこにこと人懐っこい無邪気な笑顔を浮かべて相手は言う。今度はあたしの方が相手をじっと眺める番だった。白い短く丁寧に切りそろえられた髪が笑い揺れる体に合わせ動く。着ている服はどっかヨーロッパの貴族あたりが着てそうなちょっと派手な模様が入った物だ。

「そう、なの。公爵夫人の息子さんなのね」

確認するように反復して、ふと、引っかかるものを感じる。公爵夫人、って何処かで聞いたような……。

「ね、ね、アリス。アリスはぼくを食べにきたって本当？」

あたしが何処でその名前を聞いたのか思い出そうとしてると、子供は弾んだ声で無邪気に問い掛けてきた。しかし、その内容に度肝を抜かれ唖然とする。何か、自分の耳がおかしいのかと思った。

「お母様がね、いつも言っていたんだ。アリスが来たらぼくは丸焼きにされてお皿の上に乗せられちゃうんだって」

相手は顰めっ面したあたしなど無視して心底嬉しそうに続ける。どうやらさっきのは聞き間違えなんかじゃなかったようだ。頭痛がしてふつふつと、そんな物騒なことを吹き込んでいる母親に怒りが沸いてきた。

「貴方のお母さん、おかしいわ！　あたし、人間なんて食べないわよ！」

勢い余って当り散らすように目の前の子供めがけ叫ぶ。相手の笑顔は一瞬にして引きつったものに変わった。そして突如襲う浮遊感。

幼子は驚いた拍子にあたしを掴んでいた手を離してしまったらしい。
小さく悲鳴を上げる。すぐ上に引き上げられる衝撃が加わった。相手が地面に着く前に掴みなおしたのだ。
「アリス、ごめんなさい。大丈夫？」
「え、えぇ。まぁね」
摘んだ手と逆の手の上にあたしを下ろして、おろおろとしながら小さい声で問い掛けてくる相手。あたしは一度だけ頷き、言葉を返した。
「それより！　変なこと言ってる貴方のお母さんはどこ？」
相手の手の上ですくっと立ち上がり、拳を握って身を乗り出す。子供は目を何回も瞬かせながら、その厚い唇を開いた。
「お屋敷に居るよ。お母様はアリス。アリスが来るのをずっと待っているんだもん」
もごもごと言いながら体を丸めるように縮こまらせる。あたしの剣幕に怯えているようだった。
「あたしを待つ？　貴方、だって、自分の息子を食べると思っている人間を待つなんて……。どう考えてもおかしいわ」
「おかしくないよ。お母様は早くアリスと一緒にぼくを食べたいんだもの」
理解が出来なくて、ついついキツイ口調になった。相手は身をあたしから引き離すようにしながら目をぐりぐりと回し、でも素直に答える。
「なにそれ？　信じられない！」
今まで出した中で一番大きな声を上げた。びくり、と相手の体全体が震える。しかし、そんなことに構ってなんて居られない。この世界全部が全部おかしくて狂ってるとは思ってたけど、自分の子供を食べたがるなんて一番どうかしてるわ！
「もういい、わかった！　あたしを貴方のお母さんのところへ連れて行きなさい！　説教の一つも言ってやるわ」
もうあたしの剣幕に何も言えなくなった相手に対し、あたしは更

に捲くし立てた。
だって、黙ってなんかいられない。例え相手が狂った食人鬼だって、自分の子供くらい大切にするべきよ。生まれてくることを望まれても生まれてこれない子供だって居るんだから。
そう、あたしの……。
「あたしの？」
途中で自分で考えが分からなくなって一個前の台詞を声を出して繰り返す。あたしの何がそうだったのか、思い出せない。
「どうしたの？　アリス」
子供が顎に手を当て考え込んでいるあたしに、恐る恐る声をかける。はっとして顔を上げ、誤魔化すように苦笑いを浮かべて見せた。
「いいえ、なんでもないわ。それより！　早く連れてって頂戴！貴方を食べないよう説得してあげるわ」
腰に手を当てビシッと言い切る。相手は眉尻を下げ、よく分からないと言いたげに首を横へ傾けた。
「さ、行きましょう」
しかし、あたしは説明を続けることはせず、先に進むことを促す。多分、幼いこの子は母親がいかに間違っているかをわからないに違いない。むしろ、母親が正しいとさえ信じているんだと思う。じゃなきゃ、自分の母親が自分を食べようとしてることなんて笑顔で話せるわけがないわ。
子供はあたしの言葉に素直に従って動き出した。のろのろと小さく弾むボールのような動き。相手はあたしになにか言う気もなくしてしまったようだ。黙々と草を掻き分け何処かへ向かう。
「……ねぇ、ところで貴方、名前はなんていうの？」
ただ黙っているのが息苦しくて、ふと思ったことを口にし訊いてみる。相手は目指す先を見据えていた視線をあたしへ向けた。
「なまえ？　……ぼくはコウシャクフジンノムスコだよ、アリス」
「そうじゃないわ。名前もわからないの？　そうね……お母さんは貴方を何て呼ぶのよ？」

見当違いの答えを返してくる子供に、あたしは困って溜息を吐いた。そして、彼にも分かるように質問を代える。
「お母様はぼくをブタって言うよ」
思わず額を押さえた。確かに彼はぷっくりと肥えに肥えていて動物に例えるならブタを連想しやすい。けど、それを母親が言っていいことじゃない。
全くどうしようもない母親ね！
心の中で毒吐き、ぐっと拳を握る。言い知れない怒りが沸々と大きくなっていく。
前に同じような怒りを感じたことがある。けど、それが何のときだったかは全く思い出せない。それが妙に引っかかった。けど、思い出せないものを考えてもしょうがない。
そこでふと、相手の動きが止まっていることに気がついた。
「アリス、着いたよ」
あたしが不思議に思って仰ぎ見ると、彼は一言そう告げる。言われて辺りを見回した。
今居るのは大きな屋敷の扉の前。ゴテゴテとした葉っぱ等を模したような装飾を厳つく纏っている。屋敷はあたしが小さいことを差し引いてもかなり大きかった。
「すごいわね。貴方の家」
あたしは屋敷を呆け眺めながら呟くように言う。
「そうなの？　ぼくはこの家しか見たことないから全然分からない。アリス、中へ入るよ」
相手は意味を解していないらしく流すような言い方をして、またゆったり歩み始めた。　そして、扉の横にある薄汚れた紐を引っ張る。その紐の先には鈴のようなものがあった。チリン、と小さな音を立て、それは揺れる。すると数分もしないうちにギギギ、という重い音がして目の前の扉が動いた。
あたしは緊張して手を強く握り、徐々に現れる屋敷の内部を凝視した。

「お帰りなさいませ。坊ちゃま」
扉が開ききった先、まず一番初めに目に飛び込んだのが、黒い執事服を纏った蛙。それが、あたしを持っている子供に頭を下げた。
「ねぇ、お母様はどこ？」
子供は頷くように微かに頭を動かしてから問うた言葉に蛙がぴょこっ！　と飛び上がる。天井まで届くかと思えるぐらい勢いよく。
「坊ちゃま！　なりませぬぞ！　奥様にはアリスが来るまでお会いにはなれないといつもいつも口を酸っぱくして忠告しておりますのに、またそうのような」
でも、天井にはぶつからず降ってきて、凄い剣幕で叫びだした。その声は甲高く煩わしく感じる。
「違うよ。ぼく、アリスを連れてきたんだ」
未だに喚き続けてる蛙に向けて子供があたしを差し出す。蛙は一瞬で口を閉じた。そして、顔を乗り出しあたしをまじまじと眺める。
流石にぬめった灰色の肌が間近にくると何だか嫌だ。
頬を引きつらせ、一歩下がる。
「あ、りす？」
そう問われてあたしは慎重に一度だけこっくりと頷く。蛙はまたぴょんっ！　と跳ね上がった。
「アリスだっ！　アリスがきたっ！　奥様はお喜びになるぞ！」
何回も何回も叫びながらぴょこぴょこ跳ねる。そして、ついに、ガツンッ！　という嫌な音が玄関ホールへ響いた。蛙が何回目かの跳躍の後、勢い余って天井に頭をぶつけたのだ。パラパラと破片が落ちてくる。それから少し遅れてドスン、という鈍い音。蛙は床に伸びたままぴくりとも動かなくなった。あたしは子供と顔を見合わせる。
「どうしよう？」
「そんなこと訊かれても……」
子供が困ったように問いを口にしたので肩を竦めながら答えた。でも、子供はあたしと蛙を忙しなく見比べ続ける。一向にやめる気

配は無い。
「とりあえず、揺すってみたらどうかしら？」
仕方がないので適当な助言をする。すると彼は嬉しそうににっこり笑った。そんな表情を浮かべられると小さな罪悪感を感じる。だって、口にしたそれは何の考えも確証もないんだもの。
子供はそんなあたしの内心に気づくことなく蛙の元に走り寄った。そして、あたしを下ろし両手でそれを揺する。しかし、彼は手加減と限度を知らないらしい。蛙が少しして小さく唸り始めても揺するのをやめなかった。むしろ更に激しく揺する。
「ちょ、ちょっと！　もういいわよ」
急いであたしが歯止めをかけると子供はすぐ揺するのをやめた。蛙が逃げるように這いずってからよろよろと立ち上がる。
「うぅむ、気持ち悪い……」
蛙の小さな呟き。まぁ、確かにアレだけ揺さぶられれば気持ち悪くもなるわよね。しかし、天井に当たって落ちてきた割にはピンピンしている。
「ねぇ、お母様はどこ？」
子供が相手の様子など気にもしないで最初と同じ言葉を口にする。蛙は頭をふりふりこちらへと振り返った。
「坊ちゃま、今奥様はお客様とお話中にございます。残念ながら話が終わるまでは幾らアリスがいらっしゃろうともお会いになることは出来ません」
淡々と決まり文句のように言う蛙。その言葉に表情を曇らせ子供は俯いた。
「坊ちゃま。そう気を落とさずに。そうです！　奥様と面会なさる前に、料理長のところへ行ってはいかがですか？」
慰めるように視線を落とした蛙だったが、すぐに良いことを思いついたと言わんばかりの明るい声を上げ跳ね上がった。
子供も瞳を輝かせて顔を上げる。
「そうだね。料理長にも教えてあげないと。アリスがきたよ、って」

「そうですとも！　アリスの、客人の急なお越しです。料理長も腕によりを掛けたいでしょう。それには時間が必要ですから喜ぶはずです！」
　ぴょこんぴょこんとさっきのに全然懲りてないのか何度も跳ねながら言う蛙。子供はこくこくと跳ねるのに合わせてるみたく頷いている。そんな中あたしは腕を組んで二人？　を見ていた。
　しかし、料理長ねぇ？　何だかちょっと胡散臭い。
「では、坊ちゃま。早速料理長の下へ参りましょう。アリスも居られますし、ご案内させて頂きます」
　蛙があたしを水掻きのついたぬるぬると光る手で持ち上げようとする。別に普通に蛙は平気なのだけど、今は小さい分、やっぱり流石に気持ち悪い。一歩後退ると、蛙より一歩早く子供があたしを掴みあげた。
「アリスはぼくが連れて行くの」
　そう言って、あたしを掴んだまま両手を自分の胸の前に添える。何だか自分が人形になったかのような気分だ。
「坊ちゃまがそうおっしゃるのであれば構いません。では、ご案内いたしましょう」
　蛙は子供に抗うことなくこっくりと頷いて、そそくさと背を向けた。どうやらかなり気持ちが逸っているようだ。ひょこひょこと小さく跳ねながら歩き出す。子供の速度に合わせたような遅さだ。その後ろを先程と変わらないマイペースな歩きで子供は付いていった。あたしは掴まれたまま身動きできず連れて行かれる。
「ねぇ、ちょっと訊きたいんだけど」
「何用でございますか？　アリス」
　そんな中、あたしは前を行く蛙に問い掛けた。蛙は少し振り返り答える。
「その公爵夫人に来ているお客って誰かしら？」
　そう質問を続けると、蛙は目を細め眉を寄せた。何やらあまり訊いて欲しくなかったようだ。けれど、あたしは相手が答えるまで黙

って待つことにする。だって、そのお客とやらがもしかしたらチェシャ猫達かもしれないから。
白兎は公爵夫人に用があると言っていた。その公爵夫人は多分間違いなくこの屋敷の奥様なのだろう。彼等の移動スピードを考えればもう着いていたってなんらおかしくないわ。だから、今来ている客がチェシャ猫達とイコールで結ばれる確率はかなり高いのだ。なるべくなら早く彼等と合流したい。
「それはお話できません。奥様が内密に、とおっしゃられておりました。それが例え我等がアリスでありましても、お教えすることは叶いません」
如何にも残念そうにそう告げて蛙はまた飛び跳ね歩き出す。しつこく問いただしたところで答えてはくれないだろう。確認したいのは山々だが、今は子供に掴まれていて自由に動けもしないし諦めるしかないか。
コツコツと子供の石の床を歩く音が響く。ちなみに、蛙は靴を履いていないのでペタペタと石に張り付いては剥がす、そんな特有の音がした。
廊下はとても埃っぽい。端には蜘蛛の巣が張り、電気は切れていて、ボロボロのカーテンはおざなりに窓辺でぶら下がっている。掃除なんてかけらもしてないんじゃないかと思えるほど汚かった。しかも、どこもかしこもモノトーンで暖かい色味が全く感じられない。そんな中を黙って進んでいく。正直、不気味だ。
蛙が蜘蛛の巣の掛かっている開きっ放しの戸の前で止まった。中は薄暗くよく見えない。
「料理長、坊ちゃまがお帰りになりましたよ！」
そう蛙が奥へ声を掛けると、暗闇でもっそり何かが動いた。そして戸をくぐる様にして現れる顔。その顔は皮膚が異常なくらい垂れ下がっていた。目なんてどこにあるかも分からない。鼻は辛うじて分かるもののそこから出ている髭は半分以上皮膚に覆い隠されていた。

あたしはこくりと喉を鳴らして唾を飲む。相手の顔がこちらに向いたからだ。
「それに坊ちゃまは、素晴らしいお客を連れてきて下さいました。アリスですよ、料理長！」
蛙が料理長の顔の高さぐらいまで飛び上がり、興奮した口調で付け加える。ぴくり、と眉の辺りだと思われる場所が微かに動いた。白く長いコック帽を片手で直しつつ全身を部屋から乗り出す。
部屋から出てきた料理長はとても大きかった。あたしが小さいからかもしれない。けど、あたしを持っている子供の三倍ぐらいはありそうだ。それに彼は白いコック服の上からも分かるほど筋肉が逞しい。リンゴ一個くらい握り潰せそうだ。
「アリス、だとぉ？」
低くしわがれた声が辺りの空気を震わせる。相手に顔を覗き込まれ、緊張し手が汗ばんできた。
「アリスだよ。これでお母様も喜んでくれるよね」
子供が無邪気にあたしを前へ突き出す。彼の鼻が手を伸ばせば着く位の距離になっていた。しかし、急にあたしの体が強く揺さぶられる。
「アリスだとぉぉおおおっ！」
料理長の激怒したような叫び声。目に映るものが急激に変化して眩暈がしそうになった。料理長があたしを子供から乱暴に取り上げたのだ。強く握られキシキシと体が音をたてる。
「な、何をするんですか、料理長！　アリスは奥様の大事な客人ですぞ！」
「うるせぇっ！」
蛙が悲鳴に近い金切り声で料理長を非難する。しかし、料理長はそれよりも大きな声で蛙の言葉を遮った。子供は怯えて泣き出している。
怒鳴る大人二人。ひたすらに泣きじゃくる子供。
頭の中に一瞬何かが思い浮かんだ。

泣いてる子供。それは……あ、た、し？
けれど、そこまでで浮かんだものは抹消される。後にはもやもやと言い知れぬもの。
あたしが何故大泣きしていると言うのか。よく分からない。それがいつの何の記憶か全く検討が付かなかった。けれど、胸のもやもやは不安を掻き立てる。

思い出さなければいけない。
思い出してはいけない。

そんな矛盾したことが交互に頭の中を巡る。その事を考えるのをやめたかった。でも、やめられなかった。
そう追い詰められるような感覚の中、急に体が軽くなった。そして、ふっと思考が現実に戻される。
「分かっていないのはオマエだ！　アリスが来たら坊はあのキチガイ女に食べられちまうんだぞ！」
あたしの体は大きな声で喚く料理長の手から離れていた。そう、勢い余って投げ出されていたのだ。そんなあたしには誰も気づいていない。
「公爵様の残した財産を食いつぶし、しまいにゃアリスを利用して子供まで食べようとする！　そのうちあいつぁ、女王様に首を切られちまうさ！　そんな奴にオレは仕える気はないんだ！」
「口を慎め！　奥様はこの家の主人であるぞ！」
蛙と料理長は口論に夢中。子供はその口論に負けないくらいの声で泣いていた。あたしは飛ばされていく方向を見た。容赦なく壁が迫ってきている。
本能的に体を縮めて目を瞑った。しかし、すぐに無意味なことに気づく。ぶつかるっ！　そう高を括った瞬間、いきなりくいっ、と飛んでる方向と逆に引っ張られた。そして、その引っ張られる感覚もすぐに消える。

そっと目を開けた。やや離れたところに例の三人。あたしの視界は釣られているようにふらふら揺れる。いや、現に釣られているのだ。振り返ればそこに、よく知っている顔があった。白いフードはにんまり笑い、その中に見えるピクリとも動かない無表情な口。チェシャ猫だ。

「アリス、こんなところに居たんだね」

相手はあたしを指で摘みながら自分のフードに付いた目線に合わせ持ち上げる。その目をあたしは不機嫌に睨み付けた。

「そうよ、どっかの誰かさんが落としていくからね」

「……ごめん、アリス。兎を追うのに夢中になってたんだ」

怒ったキツイ口調で言い放つと、相手の白いフードの耳が少しばかり垂れる。目はくりくりと忙しなく動いていた。しかし、フードの口はひくひくと動くものの笑んだ形のまま変らない。何だか苦笑いをしているみたいだ。

「何事ですの！　騒々しいっ！」

あたしがチェシャ猫にもう一度声を掛けようとした瞬間、後方からとても大きな甲高い声が飛んできた。思わず振り返る。そこにはずんぐりとした女性が一人。派手な装飾の施されたドレスを着ている。けれど色が無いせいかとても不恰好だ。彼女はとても大きいのもそのように見えた要因かもしれない。

「奥様！」

蛙がピシッと垂直な棒になったように背筋を伸ばす。と、すると、この女性が公爵夫人か。確かにそれはとても納得がいった。だって、自分の息子とまるっきり同じ体型なんだから。服のしたから覗く腕は、はちきれんばかりに太く、首なんてほんと何処にあるのかわからない。しかも、彼女は料理長よりも一回り以上大きかった。

「お客様が入らしているんですのよ！　騒ぐなら外でなさい！」

声が廊下の空気を震わせる。鼓膜が痛くなってきた。何て大きな声なんだろう。

「お母様！」

その金切り声の後に子供の嬉々とした声。息子が母親に駆け寄っていた。泣いていた痕跡は欠片も見られない。公爵夫人はごくりと喉を鳴らした。彼女の口端に涎が垂れているのに気づく。
「おぉ、可愛い可愛いワタクシの子！　今日もとっても美味しそうね。いつになったら食べられるのかしら？　ワタクシの可愛い子豚ちゃん」
歌うような弾む口調。しかし、甘い声色とは裏腹に彼女の目は血走っていた。本当に自分の息子を食べることしか考えていないらしい。寒気と吐き気、それがあたしの全身を襲う。公爵夫人の肥えすぎた顔面をぶん殴りたい、そうも思った。
「お母様、聞いてきいて！　ぼく、アリスを――ふえっくしょんっ」
頬が高揚した子供は輝かんばかりの瞳で誇らしげに母親へ何かを告げようとした。しかし、それはくしゃみで中断される。料理長が公爵夫人めがけ、何かの瓶を投げたのだ。瓶から零れる灰色の砂が宙を舞う。その香りは鼻をくすぐり砂の正体を教えている。コショウだった。
「また貴方なのねっ！　誰のおかげで置いてもらってると思ってるの！」
公爵夫人が激怒して悲鳴に近い金切り声を上げる。そして、飛んできたコショウの瓶を鷲掴み、投げ返した。またコショウの瓶が中身を振りまきながら宙を踊る。チェシャ猫もあたしも耐えられずくしゃみを連発する。感染するように全員がくしゃみの渦に飲み込まれた。
「へっくちっ！　こ、これじゃ、くしゅんっ！　まともに会話も、ふぇっくしゅ！　できないわ」
喋る度にコショウが鼻腔をくすぐるもんだからまともに言葉も繋がらない。チェシャ猫はフードに付いた小さい白い鼻を擦りながら連続でくしゃみをしている。あたしの言葉を聞いてる暇などないようだ。彼のその鼻から何か垂れているような気がしたけど、見なかった事にしよう。

仕方なく口と鼻を両手で覆って周りに意識を巡らす。蛙はぴょっこんぴょこん飛び跳ねながらくしゃみしていた。子供は泣き出し、泣き声の合間合間にくしゃみが入る。公爵夫人と料理長は互いに罵詈雑言を浴びせながらコショウのキャッチボールをしていた。いつの間にかコショウの瓶以外のモノも二人の間を行き来している。黒い大きなフライパン。灰色の鍋。白いお皿。ありとあらゆるものを料理長が台所から持ち出したらしい。調味料の粉が視界を霞ますほど舞っている。

「公爵夫人、何時になれば私との会話が再開できるのでしょうか？」

ふと、騒然とした雑音の入り混じる中、澄んだ声が何よりもはっきりと耳に届いた。全員がぴたりと動きを止める。宙を舞っていたモノの落ちる音が後れたように空間へ響いた。

「白兎。まだ終わってなかったんだ」

袖で鼻を拭き終えたチェシャ猫が声の主の名を呼ぶ。彼女はこちらを振り返ってにっこり笑った。

「えぇ、まだ返事を頂いていないのよ。それよりチェシャ猫。アリスが見つかって良かったわね。アリスがチェシャ猫から落ちてしまったと知った時はとても心配したのよ。本当に何処へ行ってしまったのかと思っていたわ、アリス。でも、無事でよかった」

白兎はチェシャ猫に、それからあたしに言葉を掛けた。「アリス」その名が出る度に公爵夫人がぴくり、と体を震わす。そして、徐々にぎこちなく此方を振り返るのが見えた。その目は大きく見開かれ、眼球には無数の灰色に近い線が刻まれている。

ぞくり、と背中に氷を入れたような感覚に襲われた。公爵夫人のその粘りつくような視線はあたしを捕らえて離さない。

そしてドンッ！　という急な衝撃音！　気がつけばその瞳はあたしの目の前にあった。横目にチェシャ猫が壁からずり落ちている様が映る。その位置はあたしから少し離れていた。多分、公爵夫人に吹っ飛ばされたのだろう。彼はそのまま床に平伏し、ぴくりとも動かない。

「チェシャ猫っ！」
大きく相手の名を呼ぶ。出来ることなら駆け寄って彼の具合を確認したかった。けれどあたしは今、公爵夫人の右手で握られている。身動きが出来ない。だから責めて顔を向けて叫ぶしか出来ないのだ。
だがそれも束の間、公爵夫人は余った左手であたしの顔を自分へ無理やり向けさす。太い大きな親指と人差し指があたしの顎を捉えた。
「アリス、あぁ、アリス！　貴方がアリスなのね！　待ち望んでいたわ、アリス！」
興奮し鼻息も荒く捲くし立てる。その勢いであたしの髪はたなびいた。
「あぁ、アリス！　ワタクシ、貴方に最高の料理を召し上がっていただくことを夢見ていたのよ」
「最高の……料理？」
うっとりと目を細め、太い指であたしの頬を撫でる公爵夫人。あたしは眉を寄せ不快さを前面に出しつつ彼女の言葉を反復した。
「もちろんですとも！　さあ、料理長！　アリスがお待ちかねよっ！　すぐに料理に取り掛かりなさい！」
それに答えてすぐ、叫ぶように料理長へ命令を下す。料理長の垂れた皮膚がぷるぷると小刻みに震え、命令を拒否するようにだんまりを決め込んでいた。しかし、そんなことはお構いなしに料理長から視線を外してあたしを掴んだまま子供のもとへ駆け寄る夫人。
「ワタクシの可愛いカワイイ子豚ちゃん。ついにこの日が来たわよ。貴方が最高の料理の食材になるの。ワタクシとアリスの空腹を満たす糧になるのよ」
「お待ちになって、公爵夫人」
うっとりと夢見るように子供の顔を覗き込みながら喋り続ける公爵夫人。その言葉を遮ったのは、意外なことに白兎だった。あたしは今にも叫びだしそうだったし、料理長の拳にはすごく力が込められている。けれど、そんなあたし達二人より早く、白兎が口を挟ん

だのだ。
「公爵夫人？　差し出がましくも申し上げますが、その子供は食用の豚ではありませんわ」
「いいえっ！　この子はワタクシの可愛い子豚よ！アリスの為に育てた可愛いカワイイ子！」
ゆっくりと温和に抜けた感覚さえ与えるような口調で言う白兎を、公爵夫人は凄い形相で睨んだ。声も相手を脅すような濁声に近い。
「駄目よ、公爵夫人。先程も申し上げたとおり、その子を豚扱いするのはやめなさい。出ないと世界の規律を乱すことになるわ」
「お黙りっ！！」
公爵夫人の態度に柔和な笑みを湛えつつ、更に言葉を続ける白兎。しかし、それを遮り公爵夫人の怒号が響いた。あたしは思わず公爵夫人の手の中で跳ね上がる。
「この子は子豚！　可愛いカワイイ、ワタクシが食す為に育てた豚なのよ！」
大きく今までのどの声より大きく公爵夫人は宣言する。その勢いで風が巻き起こり皆の髪が、服がはためいた。そんな中、どうしたことか子供がぶるぶると震えだし母親の服にしがみ付く。一斉に全員の視線が彼に集まった。
「あ、お母様……。お母様、ぼく……」
怯えた表情で縋るような掠れた声を上げながら、ずるずると服からずれ落ち、床にしゃがみ込む。そして、子供の髪の間からひょこり、と何かが生えた。更にお尻に細い何かも出てくる。皆、呆然とその様を見つめるのみ。深い沈黙の中、彼の姿は徐々に変わっていった。
髪は無くなり、四つん這いになった手足は短く揃えられ動物の足と化す。ぷっくりとした体は更に丸くなり、小さかった鼻は前へ突き出て大きく広がった。
その姿は正しく――豚。子供はもう鼻を引くつかせただブーブーと鳴くのみ。

「だから申し上げましたのに。残念ですわ、公爵夫人」
白兎が溜息混じりに口を開き、頭を振った。あたしはまだ、目の前の現状を頭で上手く理解できない。
だって、子供が本物の豚になったのよ？　信じられる？
ただ、そう心の中で自分に問い掛けた時、ここなら有り得なくない。と、思う自分もいる。矛盾した感覚が同居してるのが気持ち悪かった。
「ご主人！　こんなところに！　この屋敷広くて探したヨ！」
そこへ今の重い空気と全く逆な明るい声が飛んできた。全員が振り返る。知っているトカゲ顔。彼は、全員の視線を感じると恥ずかしそうに白い帽子の端をいじる。
「あら、ビル。貴方、とっても丁度いいタイミングだわ」
白兎がビルの隣へ並び、嬉しそうに笑いながら彼の肩を軽く叩く。白いつなぎを着たトカゲ――ビルは白兎の言葉にほっ、と安心し頬を緩ませた。
「さあ、公爵夫人。貴方をハートの女王様の下へお連れする準備が整いましたわ。フシ・ギノ国、第１３条、アリスから頂いた形を故意に変えることを禁ず。この条約に違反した罪で、強制的に１２の城まで連行します！」
「何を言っているの！　白兎、この子は元から豚だったのよ！」
白兎がビルから公爵夫人へ向き直る。そして淡々と言い放った。しかし、公爵夫人は未だ服を着たままのブーブー泣き続ける小さな豚を強く抱きしめる。まるで誰にも渡さないと言わんばかりに。
「いいえ、その子は貴方の子供よ。人間型から食用の豚は生まれないわ。けれど、貴方自身も食用の豚だと言うのなら話は別」
ゆっくりと諭すような口調で一句一句告げる白兎。すると、公爵夫人の鼻が急に豚のそれへと変化した。驚いて公爵夫人はあたしを放り出し、鼻を押さえる。ほっぽり出されたあたしはと言うと、まだ倒れていたチェシャ猫の上に落ちた。少し打ったけれどさほど痛くない。

「わ、ワタクシは！　ワタクシは豚ではないわ！　ワタクシは公爵夫人よ！」
体を反らせ、顔を抑えながら激しく頭を左右に振る。今まで以上に取り乱している公爵夫人。白兎はそんな彼女に怯えも無く近づいて、片手を差し出した。その手に気がつき何故か公爵夫人はすぐに暴れるのをやめる。彼女の鼻は既に元へ戻っていた。
「大丈夫ですわ、公爵夫人。ハートの女王様は寛大ですもの。裁判くらいは開いてくれるわ。さあ、行きましょう」
言葉に促され、公爵夫人は白兎の手を取る。彼女の手は震えていた。表情も怯えたように引きつっている。
今の合間の何処に、公爵夫人を怯えさせるようなものがあったというのだろうか？　さっぱり分からない。
「そう、良い子ね。ビル、扉を開けて頂戴。１２の城へ行きましょう」
「合点ダ、ご主人！」
公爵夫人の大きな手を引きながら、白兎はビルに向けて告げた。彼は手をピッと額にあて元気よく返事をする。それから何を考えたか床に這いつくばった。すると、ビルの体が徐々に平たくなっていく。全身白いトカゲは段々と別のモノへ変化を遂げた。それは、人一人がやっと通れるくらいの大きさの真っ白い扉。
驚いてる間に、それは自分で身を起こす。
そんな扉と公爵夫人を見比べながら白兎は考えるように手を頬へ添えた。
「ねぇ、ビル、公爵夫人が通るのよ。もう少し大きくしてくれないかしら？」
白兎が扉に向かい頼むように呼びかける。すると扉はぐにぐにと柔らかいゴムのような動きをして、上は天井まで、横は両壁につくぐいまで広がった。確かにこの大きさなら公爵夫人でも余裕ね。
「ありがとう、ビル。では、いざ１２の城へ」
公爵夫人の手を離し、一人一歩扉の前へと出る白兎。彼女は懐か

ら懐中時計を取り出した。それを扉の中央にある窪みに当てはめる。そして手を離し、一歩下がって元の場所へ戻った。
扉が向こう側へ重い音をたてて開いていく。最初に目に映ったのは大きな薔薇だった。真っ黒な花を携えて、それはアーチ状に奥へ奥へと続いている。とても大きく、ビルの白い扉よりも上をいっていた。
「公爵夫人、どうぞお通りになって」
白兎はまず、公爵夫人を扉の向こう側に手を引いて通す。公爵夫人は怯えながらも素直に従った。公爵夫人の体が全て向こう側に渡ると、白兎は急いで戻ってきてあたしの目の前まで駆けてくる。
「さあ、アリスも行きましょう」
そして白兎はあたしを掬い上げるように拾い扉の方へ踵を返した。
「ちょっと待って」
あたしは慌ててそれを止める。
「ねぇ、白兎。チェシャ猫は連れて行かないの？」
「えぇ、そうね。下手に動かさないほうがいいと思うわ。でも、大丈夫よ。気がつけば追いかけてくるもの」
白兎は心配要らない、とにっこり笑みを浮かべて見せてくれた。それにあたしは少し考えて小さく頷く。無理やり引きずっていくのは大変だし、チェシャ猫のあの足のスピードならすぐ追いついてくるだろう。
「じゃあ、行きましょう。アリス。貴方達、チェシャ猫とその子豚ちゃんをよろしくお願いしたいの。構わないかしら？」
最後に料理長と蛙に向かい確認するような口調で白兎は問う。
「わかった」
「もちろんでございます！　白兎様もどうぞ奥様をよろしく頼みますよ！」
二人がそれぞれ同時に答える。料理長は誰にも渡さないとでも言うように子豚を抱えていた。蛙はピッと敬礼し家の主人を心配する言葉を述べる。

「ね、ついでにあたしが先に行ったことチェシャ猫が気がついたら伝えて欲しいんだけど！」
そんな二人にあたしも声を掛けた。二人は同時に頷く。これで安心していけるわね。
ほっと息を吐いてから、白兎に目で合図を送る。彼女はにっこり笑顔を浮かべた。それから扉へあたしを連れ近づく。
この扉をくぐったらもうそこは１２の城なのだ。６の森からずっと目指してきたけれど、心の中で何かがざわめいている。それが期待なのか不安なのかはわからない。
ただ、行かなくちゃいけない。
何故かその気持ちが強まっていた。

時の夢　ソウ、アリス

ソウ、アリス。

時間ヲ己ヲ開放シテ。
ソウスレバ記憶ハ開放サレ、汝等ニ戻ル。

記憶ハ時間。
時間ハ記憶。
時間ガ動カナケレバ、記憶モ動ケナイ。

ダカラ、アリス。
開放シテ。
女王様ニ閉ジ込メラレタ時間ヲ。

アリスノ記憶ハ全テ己ダカラ。
己ヲ開放シテ全テヲ取リ戻シテ。

十二の夢　放たれた時間（前書き）

白のアリスが白兎の導きによりハートの１２の城へ辿り着いた頃、
黒のアリスもまた、同じ場所に立っていた。
しかし、二人は出会うことなく……。

十二の夢　放たれた時間

灰色の空に浮かぶ白い雲。太陽は昼間の位置そのまま動かない。そしてその真下にそびえる大きな白い城。黒い薔薇の蔦と花が城の周りを覆っていて、二つの強い白と黒のコントラストに眼が眩んだ。それが、ワタシ達が目指していたハートの１２の城。

「ここがハートの城なのね。すっごく大きい……。こんなの初めてみたわ」

手を胸の前で組んで、その大きな威厳に満ちた城を食い入るように眺め、ワタシは感嘆の息を吐き出した。チェシャ猫さんが横で頷く。

ワタシ達はお城の裏側に居た。月さんが魚人さん達に敢えて正面ではなく裏まで回って欲しいと頼んだからだ。彼等、魚人さん達とは先程別れを告げたばかり。

「こっちだよ、アリス」

月さんがやや離れた場所の生垣の前でしゃがみ込みながらワタシを手招きした。ワタシはチェシャ猫さんと顔を見合わせてから、そこまで歩みを進める。

月さんは生垣を両手で持ち上げていた。その下は薄暗いけれども、少し大きめの窪みがある。よくみると窪みは人一人が何とか通れそうな小さな穴だった。それは斜めに下へ下へと続いている。

「ここから城の中に入れるんだ。昔、女王様の怒りを買って地下牢に閉じ込められた時、ここから脱したこともある」

くすくすと口を押さえて笑いながら、月さんは懐かしそうに話した。どうやら彼は何回もやんちゃっぷりを発揮して女王様に捕まっては逃げ出していたらしい。

「何故、此処から入る必要があるんだ？　あんたの話だと地下牢へ通じてるみたいだが」

チェシャ猫さんが訝しげに問うと、月さんは表情を引き締め穴の

奥を睨みつける。
「多分、オレの探してる時間君は地下牢に閉じ込められていると思うんだ。アリスにもチェシャ猫にも地下牢に用はないかもしれない。けど、アリス！」
そしてワタシの名を唐突に呼んだ。もちろん予想してなくてワタシの身体はびくっと反射的に揺れる。
「オレ、アリスに時間君と会って欲しいんだ」
「……大丈夫。ワタシ、元から月さんについて行くつもりよ？　だってワタシも時間君に会ってみたいもの！」
真剣に、けど何処か弱気な口調で告げる月さんに、ワタシは努めて明るく弾むような声音で返した。彼の頬が静かに緩む。それから子供特有の無邪気な笑顔を浮かべて「ありがとう」と、月さんは言った。
チェシャ猫さんが小さく頭を振ってから月さんの隣に並ぶ。そして、しゃがんでいる彼を見下げながら口を開いた。
「それならそれで構わない。油を売ってないで、早く行こう」
「分かってるよ！　じゃあ、先に行くからね！」
月さんはチェシャ猫さんの言葉に小さく鼻を鳴らし、片口端だけ釣り上げた笑みを向ける。そして、するり、と簡単に穴の中へ滑り込んだ。
「アリス」
チェシャ猫さんが月さんを見送った後、ワタシに振り返り手を差し伸べる。一瞬戸惑ったもののワタシは彼の手を取った。
「先に行ってくれ」
チェシャ猫さんはワタシの手を引き、穴の前へ座らせると、視線を巡らせながらそう告げた。黒い尻尾と耳がピンと立ち、何かを警戒しているようだ。
ワタシは「分かったわ」と返して、穴に足を入れた。そのままチェシャ猫さんの手を離し、片手で地面を押す。体はなんの抵抗も無くスルリ、と穴の中に吸い込まれた。

一瞬にして暗闇に呑まれる。光は消え、暗闇の中をワタシは滑り落ちていた。まるで昔何回も滑ったあの丸い筒のような滑り台みたいだ。

ツルツルと止まることなくワタシの体は勝手に何処かへ向かっていく。急に暗闇の中で淡い光が花咲いた。眩しくて目を細める。その淡い光で辺りの形がうっすらと浮かび上がった。

そこには宙に浮く沢山の時計。変に細長く形の曲がった物、針が存在しないもの、逆に針が何本もある物、数字が間違っているもの……様々な時計が不規則な間隔で空中散歩をしているのだ。コチコチと無数の時計の動く音。まるで、そこは時間の流れが狂ってしまったような印象さえ覚える。

ワタシは急に怖くなった。狂っている時間、それが今、とても近くにあるように感じたからだ。目を強く瞑る。早くこんなとこ通り過ぎたい。そう思った。

すると、その願いが通じたのか瞼越しに光が遮られるのを感じる。それからドンっ！　と鈍い衝撃。

「いたっ！」

ワタシは小さな悲鳴を上げた。無防備に何の構えも無く打ったお尻の痛みは半端じゃない。無意識に涙が滲んでいた。

「大丈夫？　アリス」

掛けられる声。床に向いてた視線は黒い小さな子供の靴を捉えた。ワタシは顔を上げ、目尻に溜まった涙を拭い頷く。

「大丈夫よ。ちょっと打っちゃっただけだもの」

そう答えながら打ったお尻を擦り立ち上がる。辺りをゆっくり見回した。薄暗いじめっとした細長い空間。その両脇に錆びた臭いを漂わせ灰色の鉄格子が順序良く並んでいた。鉄格子の向こう側はコンクリート壁で、小さな部屋にいくつも分けられている。

１３の塔の地下に似た雰囲気を醸し出していたが、此方の方がまだ湿気が少ない。

「それで、時間はどこにいるんだ？」

真後ろからチェシャ猫さんの声が飛んできた。ワタシ越しに彼を見上げて月さんは肩を竦める。
「さあ？　さっき時間君の歌が聞こえたから多分近くには居ると思うよ」
「歌？」
ワタシが問いを口にすると、月さんは視線をワタシの瞳に落として首を傾けた。
「アリスは見なかったの？　沢山の時計が淡い光に包まれてただろう？　そして時計は綺麗な音を刻んでいた。とても、寂しそうな歌声だったよ」
「えぇ！　アレが歌だったの？」
月さんが手で丸を作り時計を模しながら説明している途中で、ワタシは大きな声を上げた。あの滑ってきた変な空間が歌だったなんて正直理解しがたい。第一、歌って言うのは耳で聴くものだし、目で見るものじゃないもの。
「そうだよ。上手い歌は雰囲気を具現化できるのさ！　オレだってもう少し練習すれば出来るようになるよ！」
「歌を歌ってハートの女王の怒りを買っているような奴には一生無理だな」
希望に瞳を光らせて踏ん反る月さんに、チェシャ猫さんが鼻で笑いつつ横槍を入れた。月さんの表情がムッとしたものに変わる。この二人はまた、ワタシを挟んで喧嘩でも始めようと言うのかしら？
その時、奥の方でカツーンと何かが鉄格子に当たったような音がした。ワタシはびっくりして跳ね上がる。
「い、今の音、なにかな？」
「きっと、時間君だ！　オレ達が来たことに気がついたんだよ！」
ワタシが怯えた声で呟く横で、月さんは表情をぱっと明るく輝かせ踵を返し走り出した。彼は鉄格子とコンクリートに区切られた無数の部屋の中の一つ、その前で足を止める。そして、鉄格子を両手で掴み、顔を押しあてながら食い入るように中を見つめた。

「見つかったみたいだな」
チェシャ猫さんがワタシの真横を過ぎ、月さんの方に向かう。ワタシはその後に続いた。月さんはワタシ達が近づいていっても全く動かない。ワタシ達はそれぞれ月さんの両脇に立った。そして、鉄格子の中に視線を向ける。
ワタシの喉がこくりと音をたてた。
それは居た。はじめ、壁の模様かとさえ思えけど、すぐ目の前に居たのだ。
白と黒で真っ二つにされた笑い顔のピエロのお面。その少し下には同じく白と黒の二つの色で両面を染められたマント。それらは宙でふらふらと浮いていた。
「これ、が？」
「そうだよ。やっぱりハートの女王様に捕まってたんだ」
ワタシの呟いたそれに、月さんが放心したままの声で小さく答える。チェシャ猫さんがワタシ達を振り返り、それから鉄格子に手を掛けた。
「なら、ぼうっとしてないで早く出してやろう」
そう、一言述べると彼は腕を引く。鉄格子が歪んだ。バキッという鈍い音がする。天井からパラパラとコンクリートの破片が落ちてきた。月さんはワタシの手を引っ張って慌てて鉄格子から離れる。更に鈍い音が続いて、ついには鉄格子が天井と床から離された。
「まったく、チェシャ猫は相変わらず乱暴だ」
月さんが憤慨した様子で言葉を漏らすと、チェシャ猫さんは外れた鉄格子をほっぽり出して無言のまま尻尾をくゆらせた。
「ま、まぁ、月さん。開いて時間君が出れるようになったんだからいいじゃない？」
チェシャ猫さんがいつまでも黙ったままなので、ワタシは苦笑交じりにフォローを口にする。月さんは肩を竦めてみせただけで、それ以上言及はしなかった。
「アリス、アリス……アリス」

電波のような高音がワタシの名を呼んでいるように聞こえる。いつの間にか、不思議な仮面はワタシの目の前まで来ていた。そして、首を傾げているみたいに左右へ交互に揺れている。笑っているピエロの仮面が目の前に居るのは正直不気味すぎて、顔を逸らしたい気分だった。

「どうしたんだい？　時間君」

月さんがワタシの横から身を乗り出し背伸びして問う。何せ、仮面はワタシと同じ高さでふわふわと浮いてるんだもの。月さんにとって時間君の仮面と目を合わせるには高すぎる位置だわ。

「ねぇ、アリス。アリスは時間君の声が聞こえるかな？」

「え、えぇっと……ワタシ名前を呼んでいたのは分かるわ」

急に話を振られ戸惑いながら正直に答えた。それを聞くとまた月さんは時間君に顔を向ける。そして少しの間黙って見つめていた。その行動の意味がよく分からなくてワタシは首を傾ける。キーキーというブランコを漕いだ時のような音が微かにしていた。どこから聞こえてくるのかはわからない。

「そうか、アリスには時間君の声が上手く聞こえてないのか。でも、駄目だよ、アリス。時間君の声は心を開かなくっちゃ聞こえない」

月さんがまたワタシを振り返り、眉を寄せ少し口を尖らせ明らかに不服顔を作っての一言。ワタシは戸惑い落ち着き無く月さんと時間君を見比べた。心を開く、って言われてもどうしたらいいか分からない。

そのまま押し黙っていたら急に目の前が暗くなった。触れる温もり。

「目を瞑って時間だけを感じるんだ。他は気にしちゃいけない」

暗闇の中でチェシャ猫さんの声が耳元で聞こえた。ふっと、体の力が抜ける。チェシャ猫さんの口ぶりはちょっと粗野。けど、彼の声にはとても懐かしい感じがして安心できるものがある。

ワタシはチェシャ猫さんに言われたとおり目を閉じて、意識を目の前に居るはずの時間君へ向けた。闇の中で残像が青白く浮かび上

がる。それが徐々に集まって形をなして、あの白と黒の仮面が現れた。
驚いて目を見開き、一歩後退する。ヒッという引きつった悲鳴にならない声が喉から漏れた。背中がチェシャ猫さんに当たったのでワタシは元の位置に戻る。もう一度、目を瞑った。
そしたらまたさっきと同じようにして時間君の仮面が形作られる。今度は小さく深呼吸を繰り返し、跳ね上がる気持ちを落ち着けた。
―　アリス。ヨカッタ。コレデ話ガ出来ル。　―
キーンと言う機械音に似たそれが、辛うじて言葉になりながらワタシの耳を通過する。いや、耳というよりは直接頭の中に響いてきていた。
―　アリス、アリス。女王様ニ会ウヨリ先ニ、月ノ思イヲ優先シテクレテ、アリガトウ。　―
「え、えぇと……」
聞き取りにくい声に理解が遅れてついつい反応が鈍くなる。月さんの気持ちを優先したことにお礼を言われたのだと理解した時には既に、次の言葉が紡ぎだされていた。
―　アリス、アリス。言葉ヲ、口ニ出ス必要ハ、無イヨ。心ニ思ウダケデ、己ニ届ク。　―
それも、噛み砕くまで少し時間が掛かった。要するに口に出さないで思うだけで言葉が通じるらしい。まぁ、確かに目隠しをしたまま喋るのもおかしいわよね。
そうなの。こんな感じでいいかしら？　月さんにはここまで道案内してもらったから、お礼も兼ねて月さんの用事を優先してあげたかったの。
―　アリガトウ、アリス。オ礼ニ、一ツ、教エテアゲル。　―
心で思ったらすぐに答えが返ってきた。時間君の仮面はくるくると嬉しそうに回転している。
なにを教えてくれるの？
気になってすぐさま問い返す。すると彼は回転を止めてワタシの

鼻の先まで仮面を近づけた。
―　トテモ、重要ナ事。　―
それだけ発すると彼はまた仮面を元の位置に戻す。そして、その仮面に描かれた口がにんまりと動いた。少しびっくりしたけど、チェシャ猫さんのフードも動くんだもの。仮面の絵が動いてもあんまり不思議には思えなかった。
それは何？　重要ってどういうこと？
―　ソレハ此ノ世界ノ動キ。此ノ世界ニ全テノ色ガ戻ラナイ訳。全テノ色ヲ戻ス方法。　―
全てに色を戻す？
その時間君の言葉にトクンっと胸が高鳴る。色が戻ると言うことは即ち、その色を封印してると言うワタシ達の記憶が開放されると言うこと。
と、すれば、それはワタシとお姉ちゃんの記憶が全て戻る方法でもあるわけよね？
―　ソウ、アリス。記憶ハ開放サレ、汝等ニ戻ル。　―
その方法って言うのは？
―　アリス、何故今マデ、記憶ハ勝手ニ戻ラナカッタノカ……分カル？　―
そう問われ、けれど分からなかったので答えに窮する。首を傾けたかったけれど、チェシャ猫さんに目を覆われてるので無闇に頭は動かせなかった。代わりに意思を表したくて手を唇に当てる。
―　ソレハ、時間ガ、止メラレテ、イタカラ。記憶ハ時間。時間ハ記憶。時間ガ動カナケレバ、記憶モ動ケナイ。
女王様ハ、ソレヲ知ッタカラ、己ヲ此処ニ閉ジ込メタ。　―
時間君が言ってることの半分近く、何を伝えたいのか分からなかった。
時間は記憶？　記憶は時間？　時間が動かなきゃ記憶も動けない？
疑問符ばかりが頭の中に浮かぶけれど、それを問う気にはなれなかった。

とりあえず、唯一理解できた部分を確認の為、心の中で彼に向かい発する。
貴方が閉じ込められてしまうと、時間も止まってしまうの？
―　ソウダヨ、アリス。己ハ時間。時間ハ記憶。記憶ハ己。アリスノ記憶ハ全テ己。　―
え？　えっと？
よく分からなくてなんと返していいか分からず戸惑ってしまう。
ワタシの記憶は、時間君そのもの、だと言いたいのかな？
―　アリス。己ガ解放サレ、時間ガ動キ出シタ今、記憶ハ主ニ戻ルタメ、勝手ニ動ク。　―
ワタシの戸惑いを読み取ったのか、時間君は更に言葉を続けた。けれど、更によく分からなくなる。
記憶が戻るために勝手に動くってどういうことなのかしら？
―　アリス、分カラナイナラ、目ヲ開ケテ、月ヲ見ルトイイ。己ノ言葉ノ意味ガ分カルヨウニナル。　―
また、ワタシの気持ちを見透かしての発言。よくは分からなかったけど、言われたとおり実行することにした。
まず、チェシャ猫さんの手をそっと押し上げる。そうすると彼は素直に手を引いた。視界が開け、あの薄暗い地下牢が目に入る。目の前にはさっきまで暗闇に浮いていた時間君の姿。その横に月さん。
「あっ……」
小さく無意識に口から零れる驚きの声。
思い出したのだ。
月さんの姿が誰であるのか。
帽さんの弟。正しくは帽さんが借りている姿の近所のお兄さんの弟。彼とはハムスターを見せてもらいに行ったとき良く一緒に遊んだから覚えてる。
でも、驚いた理由はそれだけじゃない。黒が光の加減で少し茶色く見える髪。ふっくらとした頬は薄くだけど紅く色づいている。月さんに色が戻っていたのだ。けれど、それは一枚の白いフィルター

を通したような半端な色合いだった。
「どうかした？　アリス？」
月さんが怪訝そうに首を傾げる。彼はどうやら自分の変化に気づいていないらしい。まぁ、月さん元から服は黒いし、白い手袋はしてるし、自分で見える範囲に変化はないのよね。
「色が半端に戻ってる」
チェシャ猫さんがワタシの代わりに答えを返すと、月さんは片眉だけを跳ね上げて、疑ってるような表情を浮かべた。けれど、それもすぐ驚きのものと変わる。月さんは手袋を外して、自分の手を確認したのだ。薄い肌色が覗いた。
「本当だ！　色が戻ってる！　けど……随分と半端だねぇ？」
始めは弾んだ嬉しそうな声を上げるものの、最後は不服そうに呟きを付け足す。
「白のアリスの記憶がまだ残っているんだろう」
それに、チェシャ猫さんが納得する答えを口にした。その可能性は大いにありうる。
「じゃあ、オレは後、白のアリスにさえ会えば全部の色が戻るってわけか」
月さんの表情は気を取り直したように明るくなった。その周りをふよふよと時間君がゆっくりと回る。
「しかし、触っても無いのに何でまた色が戻ったんだ？」
チェシャ猫さんが後ろから、訝る声色で誰にとも無く質問を発した。
「うん、と。時間君が、止まっていた時間は動き出したから記憶は勝手に戻ってくることが出来るだろう。みたいなことを言ってて。よく分からないって答えたら、時間君が月さんを見てみたら分かる。って。そうしたら、月さんに色が、ワタシに記憶が戻ったのよ」
ワタシは目を瞑っていた間のことをしどろもどろに話す。うまく纏めようとすればするほどうまくいかなかった。
「成る程。それじゃあ、アリスが相手を目で確認するだけで記憶は

放たれ、色も記憶も元ある場所に戻るようになった。と、いうことか」
「チガウ、チガウ、チガウ、チガウ！」
時間君が回るスピードを速めてキンキン音を鳴らした。月さんが手袋を素早くはめ直して、時間君の仮面を両手で掴む。仮面を自分の真ん前に移動させてから、黙って仮面を見つめた。そして、少しの沈黙の後、時間君から手を離してワタシ達に振り返る。
「時間君が言うには、アリス。記憶を呼び戻す刺激がどの感覚にでも与えられれば、記憶は勝手に戻ってくる。例え、その記憶が一緒にいた人物が近くに居なくても色は返るし、記憶もアリス、あんたの元に帰る」
月さんはゆっくりとした口調で時間君の代弁をしてくれた。黙っている間、さっきのワタシみたく心の中で会話してたみたい。月さんの言葉が終わると同時に背中で素早く動く気配と、小さな風が巻き起こった。
驚いて反射的に振り返る。そこにあるはずのチェシャ猫さんの姿が消えていた。
「チェシャ猫さん？　どうしたの？」
ワタシは彼の姿を探し、四方八方を見回しながら名を呼んだ。すると後ろから答えるように微かな物音。急いで振り返ったけど、そこにもチェシャ猫さんの姿は無い。
「アリス、俺を探すな。まだ、俺の持つ記憶を取り戻させるわけにはいかない。アリス、理由は言えないが分かってくれ」
姿を見せないままチェシャ猫さんは言う。その声は牢屋内に響いてどの方向から聞こえてきているのか判断できない。
「三月、お願いだ。俺の代わりにアリスを女王の下へ連れてってくれ」
「猫が兎に願い事なんて、珍しいにも程があるね。オレは、あんたの願いを叶えるつもりはないけど、アリスが望むならそうするつもりさ」

時間君を放して肩を竦めながら、月さんは遠まわしな言い方で快諾する。
チェシャ猫さんの声はそれ以降聞こえなくなった。代わりに何処かへ駆けて行く足音が少しの間木霊する。
「さあて、と。どうする？　アリス」
足音が遠ざかり聞こえなくなると、月さんはワタシに振り返り小首を傾げ問うてきた。そう訊かれても今のところ一つしか答えはない。だって、他にどうしたらいいか分からないもの。
だから、答えようと口を開いた瞬間、大きな音が頭上から降ってきた。あの花火を打ち上げたようなお腹にドーンと響く、そんな音。月さんは上を見て、それからワタシ達が来た穴とは逆の方の通路奥を見遣る。
「チェシャ猫が牢屋の扉を開けっ放しで出て行ったみたいだね。外の音がよく聞こえる」
月さんが難しい顔をして状況を分析している間にも、その音は断続的に鳴り響いた。地面が音に反響して揺れる。
「行こう、アリス！　外で何かあったのかもしれない」
急にワタシの腕を掴んで月さんは走り出した。ワタシの腕を掴む手と反対の手には時間君の仮面とマントを抱えている。
少し先に階段が見えた。その階段を一気に駆け上がる。しかし、ワタシは階段を上り始める前から息切れしていて、上りきった後はもう体力の限界だった。足がもつれてバランスを崩し、その場に倒れこむ。ワタシの腕を掴んでいた月さんも巻き添えだ。そう、月さんにしてみれば唐突に後ろに引っ張られた形になった。
「うわっ！　あいたたた……。アリス、大丈夫？」
月さんが後頭部をさすりながら起き上がり、ワタシの上から退く。そして、立ち上がるとワタシを心配そうに覗き込んできた。ワタシは鼻の辺りを押さえながら上体を起こす。
「だ、大丈夫よ。ちょっと鼻を打ったのと、月さんの頭がワタシの頭にぶつかったくらいで」

そう告げて月さんを見た時、彼の後ろのモノに気をとられ凝視する。大きな窓から、昼の明るい白い空に花火が打ち上げられていた。黒と白と灰色の花火。それは意外にもキレイだった。
「アリス、本当に大丈夫？」
ぼんやりとしていたワタシを見つめながら、心底心配そうに言う月さん。ワタシは急いで首を縦に振った。
「大丈夫よ。それより、あれ、何で花火なんて打ち上げてるのかしら？」
立ち上がって服をはたいてから、月さんの後ろを指差す。彼は振り返り驚いたような表情を浮かべた。
「あれは……裁判が始まる合図だ！　こいつは急いでいかなくちゃならない！」
窓の縁に食いつくようにして花火を見つめていた月さんだったが、慌ててワタシの手を再度掴み、窓から勢いよく飛び出した。
風を切り髪や服をたなびかせワタシ達は落下していく。
「ちょ、月さん！　飛び出して、地面に激突したら死んじゃうわ！」
ワタシは近づく地面に恐怖を抱き、悲鳴に近い声を上げる。ちらり、と月さんが振り返った。握っているワタシの手を引き寄せて、落下しながらもワタシを抱えあげる。
「これっくらいの高さ、オレにとってはどうってことないよ。しっかり掴まっててよね！」
片方の口端だけ釣り上げて余裕に満ち溢れた勝気な笑みを浮かべる月さん。もう地面はすぐそこだった。反射的に目を閉じる。エレベーターの下りに乗った時のような感覚があって、すぐに治まった。髪がパサパサと、元の位置に戻っていく。
「アリス、いつまで目を瞑ってるの？」
月さんの笑いが混じった声。ワタシはゆっくりと目を開けた。初めに目に入ったのが月さんの笑い顔。次に、あの黒い薔薇を咲かせた蔦の垣根が視界へ飛び込んできた。それは細く何処かへ誘うように道を作っている。

その生垣を眺めている間に月さんはワタシを地面へ下ろした。そして、また手を引く。
「さあ、急ごうアリス。裁判に出席しなけりゃ首が飛んじゃうよ！」
そしてまた忙しなく走り出す。釣られて走りだしながらワタシは月さんに問い掛けた。
「ねぇ、月さん？　裁判ってなに？　首が飛ぶってどういうこと？」
「なんだい、アリス？　フシ・ギノ国の作法は何一つ思い出してないの？」
そしたら別の問いかけが返ってくる。ワタシは曖昧に苦笑いを浮かべ意思を伝える。
「ふぅん？　まぁ、それなら仕方ないね。いいかい？　アリス。裁判って言うのはフシ・ギノ国の住人に相応しくない人物が現れたときに行われるものさ。それには国中の皆が集まって、参加しなくちゃならない。そういう決まりがある」
月さんは視線だけでワタシをちらりと見てから、また視線を戻し、嫌がることなく説明を開始してくれた。ワタシは黙ってそれを聞く。
「もし、破れば罰として首を跳ねられちゃうのさ。裁判で有罪を受け渡された被告と一緒にね。そして、裁判の始まる一時間前からずっと、あーやって花火を打ち上げてるのさ。花火は徐々に大きくなる。今の大きさだと始まるまで五分もないよ！」
空の花火を見上げながら月さんは歩を早める。その間に段々と早くなる口調。それだけで月さんが焦っていることが十分過ぎるほど分かった。
確かに行かなきゃ首を跳ねられちゃう行事に遅れたくないわよね。怖いもの。
けど、五分でその裁判を行う場所までいけるのかしら？
そんな疑問が首をもたげたのでワタシは訊いてみることにした。しかし、それを口にするより早く、目前の垣根が大きく開ける。そこに集まった人の多さに唖然とした。体が薄っぺたいトランプの兵隊。色んな動物が混じった生き物。見たことない白い顔。他にも変

なのが沢山沢山並んでこちらを見ている。
けど、彼等は紐で区切られた場所から内側に入ってこない。どうやらワタシ達は裁判が行われる舞台の上へ出てきてしまったようだった。そう判断したのは丸く半円に引かれた紐。その内側にはワタシと月さんの他に数えるほどの人数しか居なかったからだ。
その中の一人に目が留まる。灰色のドレスに身を包んだ女の人。彼女を見た瞬間、頭の奥の何かが大きく揺れた。
その途端、彼女のドレスが色を取り戻す。鮮やかな赤。
けれど、ワタシはそれどころじゃない。彼女の顔から目が放せなくなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0837d/

白と黒のアリス

2010年10月8日13時53分発行